

茨城県教育財団文化財調査報告第244集

# 石岡別所遺跡

一般県道石岡つくば線道路改良  
工事地内埋蔵文化財調査報告書

平成 17 年 3 月

茨 城 県  
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第244集

いし おか べっ しょ  
石岡別所遺跡

一般県道石岡つくば線道路改良  
工事地内埋蔵文化財調査報告書

平成 17 年 3 月

茨 城 県  
財団法人 茨城県教育財団

## 序

茨城県は、21世紀の社会を展望し、産業・経済の発展に伴う広域流通機構の整備と、県全域にわたる調和のとれた発展を図るために、県内の交通体系の整備を進めています。一般県道石岡つくば線道路改良工事業も、そうした交通体系の整備と県土の一体的な振興を図るために計画されたものであります。

この事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地である石岡別所遺跡が所在しております。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県土浦土木事務所長から埋蔵文化財の発掘調査について委託を受け、平成15年9月から同年11月まで発掘調査を実施いたしました。

本書は、石岡別所遺跡の調査成果を収録したものです。本書が学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県土浦土木事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、石岡市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し感謝申し上げます。

平成17年3月

財団法人 茨城県教育財団  
理事長 齋藤佳郎

## 例 言

- 1 本書は、茨城県土浦土木事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成15年度に発掘調査を実施した茨城県石岡市大字石岡字別所6737番地の1ほかに所在する、石岡別所遺跡いしおかべつしよの発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。  
調査 平成15年9月1日～平成15年11月30日  
整理 平成16年9月1日～平成16年12月31日
- 3 当遺跡の発掘調査は、調査課長川井正一のもと以下の者が担当した。  
首席調査員兼第3班長 鯉岡 和彦 平成15年9月1日～平成15年11月30日  
主任調査員 長谷川 聡 平成15年9月1日～平成15年9月30日  
主任調査員 後藤 孝行 平成15年9月1日～平成15年11月30日  
調査員 鹿島 直樹 平成15年9月1日～平成15年11月30日
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理第一課長瓦吹堅のもと、主任調査員後藤孝行が担当した。
- 5 本書の作成にあたり、弥生土器の時期・特徴などについて、玉里村立史料館小玉秀成氏にご助言をいただいた。

## 凡 例

- 1 地区設定は、日本平面直角座標第Ⅱ系座標に準拠し、 $X = +20,320\text{m}$ 、 $Y = +38,080\text{m}$ の交点を基準点(A 1a1)とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

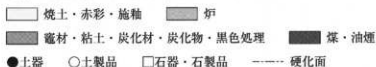
大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA, B, C…、西から東へ1, 2, 3…とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa, b, c…j、西から東へ1, 2, 3, …0とし、名称は、大調査区の名称を冠して「A1a1区」、「B2b2区」のように呼称した。

- 2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 SI-住居跡 SK-土坑 SD-溝跡 P-柱穴 TP-陥し穴  
遺物 TP-拓本記録土器 DP-土製品 Q-石器・石製品 M-金属製品  
土層 K-攪乱

- 3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

- (1) 遺構全体図は500分の1、遺構は60分の1、または80分の1に縮小して掲載した。
- (2) 遺物は原則として3分の1の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては個々に縮尺をスケールで示した。
- (3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

  
●土器 ○土製品 □石器・石製品 -----硬化面

- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、「新版標準土色帖」(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。

- 5 遺物観察表・一覧表の表記については、次のとおりである。

- (1) 計測値の( )内の数値は現存値を、[ ]内の数値は推定値を示した。計測値の単位は、cm, gで示した。
- (2) 備考の欄は、残存率及びその他必要と思われる事項を記した。
- 6 「主軸」は、竈・炉を持つ堅穴住居跡については竈・炉を通る軸線とし、他の遺構については長軸(径)を主軸とみなした。「主軸・長軸方向」は主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した(例  $N-10^{\circ}-E$ )。

## 抄 録

ふりがな	いしおかべつしよいせき							
書名	石岡別所遺跡							
副書名	一般県道石岡つくば線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第244集							
編著者名	後藤孝行							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2				TEL 029 (225) 6587			
発行機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2				TEL 029 (225) 6587			
発行年月日	2005 (平成17) 年3月25日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
いしおかべつしよいせき 石岡別所遺跡	いせがきまけいしおかべつしよいせき 茨城県石岡市 おほあきしよいせき 大字石岡字別所 6737番地の1ほか	08205 — 142	36度 10分 42秒	140度 15分 55秒	6 ~ 25m	20030901 ~ 20031130	5.661㎡	一般県道石岡 つくば線道路 改良工事に伴 う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
石岡別所遺跡	集落跡	弥生	壑穴住居跡 11軒 土坑 2基		弥生土器(壺・高坏) 土製品(紡錘車)石器(石鍬・ 石斧・磨石・敵石・凹石・穂摘 具・炉石)		弥生時代後期から 古墳時代の集 落跡を中心とする 複合遺跡である。 東海系の高 坏やS字状口縁 台付甕が出土し ている古墳時代 前期の壑穴住居 跡を確認した。	
		古墳	壑穴住居跡 14軒 古墳 1基		土師器(坏・碗・高坏・器台・ 埴・甕・壺・甌), 土製品(勾 玉・小玉・球状土錘・紡錘車・ 支脚)			
	その他	縄文	陥し穴 1基		縄文土器(深鉢) 石器(石鍬)			
	時期不明		土坑 4基 溝跡 1条		石器(砥石)			

# 目 次

序	
例 言	
凡 例	
抄 録	
目 次	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	7
第1節 調査の概要	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物	9
1 縄文時代の遺構と遺物	9
2 弥生時代の遺構と遺物	9
(1) 竪穴住居跡	9
(2) 土坑	31
3 古墳時代の遺構と遺物	32
(1) 竪穴住居跡	32
(2) 古墳	73
4 その他の遺構と遺物	75
(1) 溝跡	75
(2) 土坑	76
(3) 遺構外出土遺物	77
第4節 まとめ	82
写真図版	

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経緯

茨城県は、石岡市石岡において、一般県道石岡つくば線の整備を進めている。

平成13年11月28日、茨城県土浦土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して一般県道石岡つくば線道路改良工事地内における埋蔵文化財の有無及び取扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成13年11月28日に現地踏査を、平成14年8月20～22、27日、10月30日に試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成14年9月5日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県土浦土木事務所長あてに、事業地内に石岡別所遺跡が所在する旨回答した。

平成15年1月23日、茨城県土浦土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づき、土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、計画変更が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、平成15年1月29日、茨城県土浦土木事務所長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成15年2月20日、茨城県土浦土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、一般県道石岡つくば線道路改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議した。平成15年2月25日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県土浦土木事務所長あてに、石岡別所遺跡について、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県土浦土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成15年9月1日から平成15年11月30日まで石岡別所遺跡の発掘調査を実施することとなった。

## 第2節 調査経過

調査は、平成15年9月1日から同年11月30日まで実施した。

その概要を表で記載する。

工程	期間	9月	10月	11月
	調査準備 表土除去 遺構確認			
遺構調査				
遺物洗浄及び 注記作業				
補足調査 撤収				





第1図 石岡別所遺跡調査区設定図

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

石岡別所遺跡の所在する石岡市は、関東平野の北東隅、茨城県のほぼ中央部に位置している。当遺跡は、筑波山系のほぼ南端に近い恋瀬川右岸の新治台地縁部と台地裾部に位置している。

この台地は、筑波山を中心とする筑波山塊の南東山麓から霞ヶ浦にむかって半島状に突出し、桜川と北側を東流する恋瀬川によって挟まれた標高20~30mほどの平坦な地形である。台地縁部には恋瀬川、天の川、雪入川などの中小河川の開析によって、浅い谷津が樹枝状に発達している。地質的には、未固結の砂を主とする石崎層、浅海性の貝化石を産する海成の砂層である見和層を基盤とし、その上に茨城粘土層と呼ばれる粘土層(0.3~5.0m)、さらに褐色の関東ローム層(0.5~2.5m)が連続して堆積して最上部は腐食土層となっている<sup>1)</sup>。

当遺跡は、恋瀬川の開析によって形成された台地北縁部と台地裾部の標高6~25mに位置し、遺跡の現況は山林及び畑地である。

### 第2節 歴史的環境

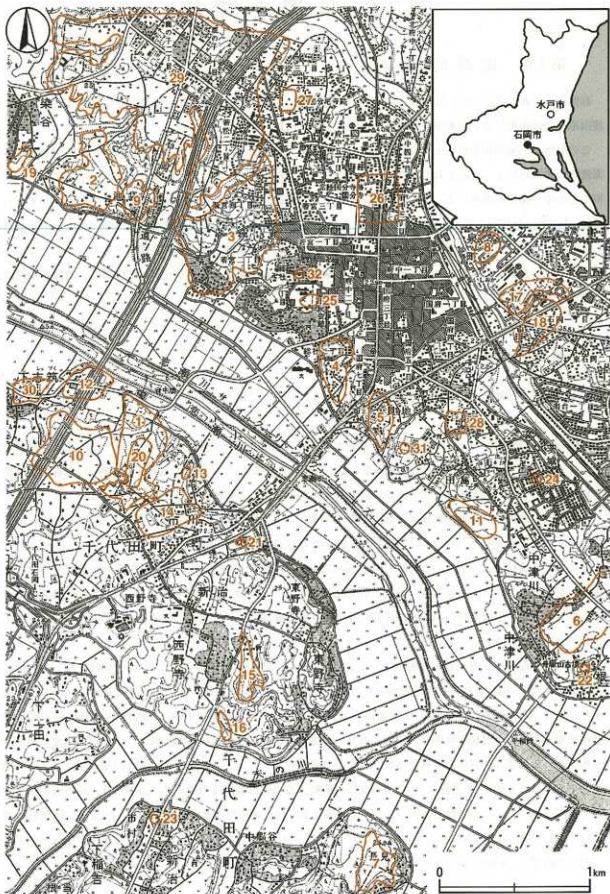
恋瀬川流域の台地上には多くの遺跡が所在しているが、ここでは、石岡別所遺跡周辺の遺跡について時代ごとに概観する。

市内の旧石器時代についてはまだ不明な部分が多いが、市北西部に位置する宮平遺跡<sup>2)</sup>では、残骸3点が出土し、南部の正月遺跡<sup>3)</sup>ではナイフ形石器が出土している。また、十三塚C遺跡・石川弾正C遺跡<sup>4)</sup>では加工痕の認められる石刃が出土しているが、宮平遺跡以外はいずれも発掘調査は実施されていない<sup>5)</sup>。

縄文時代の遺跡は、恋瀬川流域の台地上に多く分布するようになる。左岸には早期の高根遺跡<sup>6)</sup>、宮部遺跡<sup>7)</sup>などが分布し、右岸では、早期に形成された地蔵窪貝塚<sup>8)</sup>が著名である。

弥生時代の遺跡は、当遺跡の左岸約1.5km上流に餓鬼塚遺跡<sup>9)</sup>が位置し、後期初頭の土器群(餓鬼塚タイプ)が出土している。右岸では、常磐自動車道建設によって調査された松延遺跡<sup>10)</sup>(旧志筑遺跡)などが所在している。松延遺跡の調査では後期の住居跡9軒が確認され、在地的な上稲吉式土器の他に、南関東系土器の共伴が確認されている<sup>11)</sup>。

古墳時代になると、遺跡数は増加する。当遺跡周辺には該期の集落も多く、左岸に田島遺跡<sup>11)</sup>、右岸に六枝遺跡<sup>12)</sup>、松延遺跡、三王原遺跡<sup>13)</sup>、市川遺跡<sup>14)</sup>、宮台遺跡<sup>15)</sup>、南原A遺跡<sup>16)</sup>などが所在している。餓鬼塚遺跡は後期<sup>17)</sup>、松延遺跡は前期から後期<sup>18)</sup>、市川遺跡は前期<sup>19)</sup>の集落跡である。この時期も沖積低地を利用して農耕が展開した時期であり、沖積低地に面した台地縁部や低地に沿った微高地に集落が立地している。また、古墳群も確認されている。当遺跡の北方には、方形周溝墓3基と円墳11基、前方後円墳1基で構成される後生草遺跡<sup>20)</sup>(19)が所在し、隣接する松延古墳群は円墳7基、方墳2基、前方後円墳1基から構成されている<sup>21)</sup>。別所古墳群<sup>20)</sup>では円墳6基、前方後円墳3基が確認され<sup>22)</sup>、県指定史跡熊野古墳<sup>21)</sup>(21)(前方後円墳)は当地域でも古式の古墳として知られている。左岸には舟塚山古墳を含む舟塚山古墳群<sup>22)</sup>(22)が所在し、円墳や前方後円墳など合わせて36基の古墳が確認されている<sup>23)</sup>。



第2図 石岡別所遺跡周辺遺跡分布図 (国土地理院2万5千分の1「石岡」〔常陸高浜〕)

表1 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世			近世	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世
①	石岡別所遺跡	○	○	○	○	○		17	山王遺跡				○	○		
2	高根遺跡	○			○	○	○	18	兵崎笑輪遺跡					○	○	
3	宮部遺跡	○				○	○	19	後生車遺跡					○		
4	幸町遺跡	○			○	○	○	20	別所古墳群					○		
5	通安寺遺跡	○	○			○		21	熊野古墳					○		
6	中津川遺跡	○	○	○	○	○	○	22	舟塚山古墳群					○		
7	富士久保遺跡	○	○			○		23	市村古墳					○		
8	白久台遺跡	○						24	茨城古墳					○		
9	餓鬼塚遺跡			○				25	常陸国衛跡					○		
10	松延遺跡	○	○	○				26	常陸国分寺跡					○		
11	田島遺跡				○	○		27	常陸国分尼寺跡					○		
12	六枚遺跡					○		28	茨城廃寺跡					○		
13	三王原遺跡					○		29	鹿の子遺跡	○	○	○	○	○	○	○
14	市川遺跡					○		30	志筑遺跡					○		
15	宮台遺跡					○	○	31	茨城郡衛・石岡城跡					○	○	
16	南原A遺跡			○	○			32	府中城跡						○	○

奈良・平安時代の遺跡は、古代常陸国の国府である常陸国衛跡<sup>①</sup>(25)を中心に、常陸国分寺跡<sup>②</sup>(26)、常陸国分尼寺跡<sup>③</sup>(27)、茨城廃寺跡<sup>④</sup>(28)、当財団の調査により漆紙文書が出土した国衛工房と考えられる鹿の子遺跡<sup>⑤</sup>(29)がそれぞれ所在している。

中世の石岡地域は、左岸に位置する府中城を居城とした大掾氏による支配となる。市による国府跡の調査によっても濠跡などが調査されている。

近世は、大掾氏に代わって佐竹氏が天正18年から約12年間支配したが、その後は、江戸や城下町に住む将軍や大名、あるいは旗本のような幕藩領主による支配を経て、元禄13年水戸藩主徳川頼房の五男頼隆が府中城の一画と長沼(福島県)に陣屋を置いて統治した<sup>⑥</sup>。

※文中の( )内の番号は、表1、第2図中の該当番号と同じである。

註

- 1) 石岡市史編さん委員会 『石岡市史 下巻』 石岡市 1985年3月
- 2) 石岡市文化財関係資料編纂会 『石岡市の遺跡』 茨城県石岡市教育委員会 2003年3月
- 3) 清水潤三 『茨城県石岡市三村字地蔵塚三村貝塚発掘報告』 『Archaeology』 慶應義塾高等学校考古会 1956年8月
- 4) 茨城県史編さん原始古代史部会 『茨城県史料 考古資料編 弥生時代』 茨城県 1991年3月
- 5) 註2)に同じ
- 6) 倉本富美男、山本貴之 『常磐自動車道関係埋蔵文化財調査報告書(Ⅰ) 志波遺跡外』 『茨城県教育財団文化財調査報告』第5集 1980年3月
- 7) 西宮一男、鈴木幹男 『千代田村埋蔵文化財調査報告書(Ⅰ) 市川遺跡、根崎遺跡、清水並木経塚』千代田村教育委員会 1969年2月
- 8) 石岡市遺跡分布調査会 『石岡市遺跡分布調査報告』石岡市教育委員会 2001年3月
- 9) 註6)に同じ
- 10) 註8)に同じ
- 11) 註2)に同じ
- 12) 豊崎 卓 『常陸国街並発掘調査報告書』石岡市教育委員会 1973年3月
- 13) 安藤敏孝 『常陸国分寺発掘調査報告書』石岡市教育委員会 1995年3月
- 14) 安藤敏孝 『常陸国分尼寺発掘調査概報』石岡市教育委員会 1996年3月
- 15) 小笠原好彦、黒澤彰哉 『茨城廃寺跡Ⅰ』石岡市教育委員会 1980年3月
- 16) 佐藤正好、渡辺俊夫 『常磐自動車道関係埋蔵文化財調査報告書(4) 宮部遺跡、鹿の子A遺跡、砂川遺跡』『茨城県教育財団文化財調査報告』第16集 1982年3月  
佐藤正好、川井正一 『常磐自動車道関係埋蔵文化財調査報告書(5) 鹿の子C遺跡』『茨城県教育財団文化財調査報告』第20集 1983年3月
- 17) 竹内理三編 『角川日本地名大辞典 8 茨城県』角川書店 1983年12月

参考文献

- ・茨城県教育庁文化課 『茨城県遺跡地図(地名表編、地図編)』茨城県教育委員会 2001年3月

## 第3章 調査の成果

### 第1節 調査の概要

石岡別所遺跡は、石岡市南西部、標高6～25mの恋瀬川右岸の台地縁辺部及び台地裾部に位置しており、弥生時代後期と古墳時代を中心とした縄文時代から古墳時代にかけての複合遺跡である。調査区域は、斜面部を挟んで南側の台地縁辺部と北側の台地裾部に分かれており、便宜的に南側を調査Ⅰ区、北側を調査Ⅱ区とした。調査区域の現状は山林及び畑地であり、調査対象面積は5,661m<sup>2</sup>である。

今回の調査によって、縄文時代の陥し穴1基、弥生時代の竪穴住居跡11軒・土坑2基、古墳時代の竪穴住居跡14軒・古墳1基、時期不明の土坑4基、溝跡1条などが確認された。遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に34箱ほど出土しており、遺物の大半は古墳時代のものである。主な出土遺物は、縄文土器(深鉢)、弥生土器(壺・高坏)、土師器(坏・高台付坏・高坏・甕・甔・甔・甔・甔)、石器(石鏃・石斧・磨石・砺石・凹石・穂搦具・炉石・砥石)、土製品(勾玉・小玉・球状土錘・紡錘車・支脚)などである。

### 第2節 基本層序

基本層序を確認するテストピットは、調査Ⅰ区のF3a3区と調査Ⅱ区のA5h4に設置した。地表面の標高はⅠ区が22.9m、Ⅱ区が7.5mであり、地表面からⅠ区は1.7m、Ⅱ区は1.3mほどそれぞれ掘削し、第3区のような堆積状況を確認した。以下、テストピットの観察から層序について記述する。

#### 調査Ⅰ区

第1層は黒褐色の耕作土で、ローム粒子を少量含む、厚さは15～28cmである。

第2層はローム粒子を中量含む暗褐色の層で、粘性は普通でしまりはやや弱い。厚さは5～13cmで、表土からローム層への漸移層である。

第3層は暗褐色のソフトローム層で、粘性は普通であるが締まりはやや弱く、厚さは5～17cmである。

第4層はハードロームブロックが混じる褐色のソフトローム層で、粘性・締まりはともに普通であり、厚さは15～22cmである。

第5層は黒色粒子と白色粒子を微量含む暗褐色のハードローム層で、第2黒色帯に相当すると考えられ、粘性・締まりはともに強く、厚さは15～42cmである。

第6層は褐色のハードローム層で、粘性・締まりともに強く、厚さは7～24cmである。

第7層は鹿沼バミスと白色粒子を微量含む褐色のハードローム層で、粘性・締まりはともに強く、厚さは10～40cmである。

第8層は黒色粒子を微量含むにぶい褐色のハードローム層で、粘性・締まりはともに強く、厚さは25～35cmである。

第9層は黒色粒子と白色粒子を少量含むにぶい褐色のハードローム層で、粘性・締まりはともに強く、層厚は未掘のため確認できなかった。

なお、遺構は、第2層及び第3層上面で確認した。

#### 調査Ⅱ区

第1層はローム粒子を少量含む黒褐色の耕作土で、厚さは20～32cmである。

第2層は褐色のソフトローム層で、粘性・締まりはともに普通である。調査I区の第3層に対応すると考えられ、厚さは6~12cmである。

第3層は黒色粒子と白色粒子を微量含むにぶい褐色のハードローム層で、粘性・締まりはともに強い。調査I区の第9層に対応すると考えられ、厚さは4~10cmである。

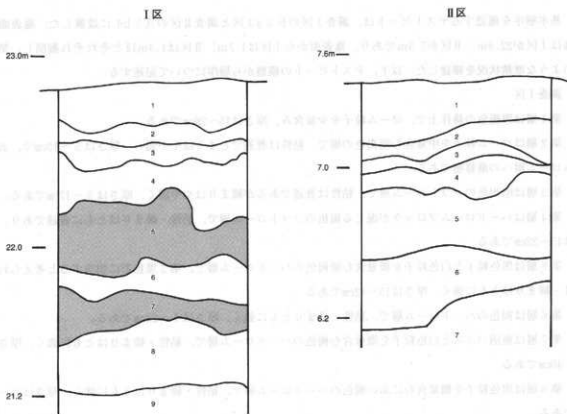
第4層は砂粒少量、小砂利・白色粘土粒子を微量含む褐色の粘土層で、粘性・締まりはともに強く、厚さは4~21cmである。

第5層は砂粒・褐色粘土粒子少量、小砂利を微量含むにぶい褐色の粘土層で、粘性・締まりはともに強く、厚さは25~46cmである。

第6層は小砂利・砂粒・褐色粘土粒子少量含むにぶい褐色の粘土層で、粘性は強く、締まりは普通で、厚さは13~35cmである。

第7層はにぶい黄褐色の粘土層で、茨城粘土層と考えられる。層厚は未掘のため確認できなかった。

なお、遺構は、第2層上面で確認した。



第3図 基本土層図

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 縄文時代の遺構と遺物

陥し穴1基が確認された。

##### 第1号陥し穴 (SK5) (第4図)

位置 調査I区南部のF2j6区、標高23.4mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 長径2.6m、短径1.6mの楕円形で、深さは104cmである。短径方向の断面はU字状を呈し、最上部は大きく外傾し、底面は皿状である。南壁と北壁は外傾して立ち上がっており、長径方向はN-10°-Eである。

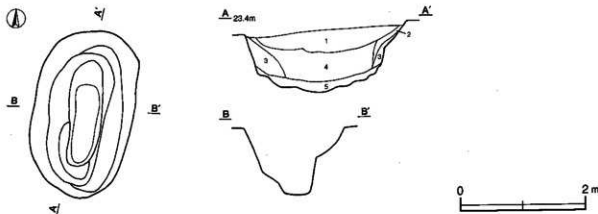
覆土 5層に分層される。周囲からの土砂が流入した様相を呈しており、自然堆積である。

土層解説

- |                      |                 |
|----------------------|-----------------|
| 1 暗褐色 焼土粒子少量、ローム粒子微量 | 4 褐色 ロームブロック少量  |
| 2 暗褐色 ロームブロック微量      | 5 明褐色 ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量 |                 |

遺物出土状況 覆土上層から、弥生土器片15点、土師器片3点が出土している。

所見 出土した遺物は、いずれも後世の流れ込みによるものと考えられる。時期は、規模や形状から縄文時代と考えられる。



第4図 第1号陥し穴実測図

#### 2 弥生時代の遺構と遺物

今回の調査で、弥生時代の竪穴住居跡11軒、土坑2基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

##### (1) 竪穴住居跡

##### 第3号住居跡 (第5図)

位置 調査I区中央部のF2b7区、標高24.2mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 長軸3.7m、短軸3.6mの方形で、主軸方向はN-58°-Wである。壁高は2~6cmで、外傾して立ち上がっている。

床 南東部が削平された状態で検出されたが、ほぼ平坦であり、やや締まりはあるものの硬化した部分は認められない。

ピット 2か所。深さはP1が13cm、P2が11cmで、位置と形状から主柱穴の可能性が考えられるが、明確ではない。



覆土 2層に分層される。薄いため堆積状況は不明である。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子少量

2 褐色 ローム粒子少量

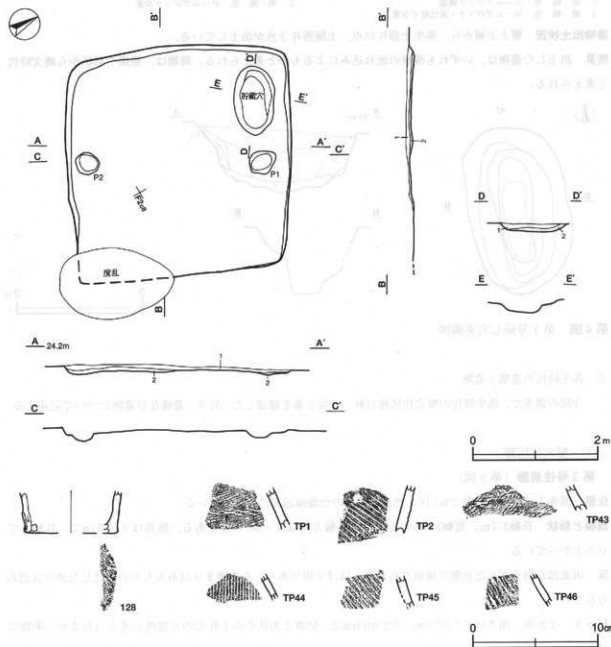
貯蔵穴 北西コーナー部に位置し、長径107cm、短径66cmの楕円形である。深さは14cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1 暗褐色 ローム粒子少量

2 褐色 ローム粒子中量

遺物出土状況 弥生土器片55点(壺)が出土している。覆土が薄く、細片のため図示できたのは128, TP1・TP2・TP43~46で、いずれも覆土中からの出土である。その他、混入したと考えられる縄文土器片7点、土師器片17点、須恵器片1点、剥片6点が出土している。時期は、出土土器から後期後半と考えられる。



第5図 第3号住居跡・出土遺物実測図

第3号住居跡出土遺物観察表(第5回)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
P128	弥生土器	壺	-	(3.4)	[7.0]	長石・石英・雲母	橙	普通	胴部附加条一種(附加2条)の縄文施文	覆土中	S%
TP1	弥生土器	壺	-	(3.5)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	胴部結節文施文	覆土中	PL22
TP2	弥生土器	壺	-	(4.0)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	胴部附加条一種(附加2条)の縄文施文	覆土中	PL22
TP43	弥生土器	壺	-	(2.3)	-	長石・石英	にぶい褐	普通	胴部結節文施文	覆土中	PL22
TP44	弥生土器	壺	-	(2.1)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	胴部附加条一種(附加2条)の縄文施文	覆土中	PL22
TP45	弥生土器	壺	-	(2.6)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	胴部附加条一種(附加2条)の縄文施文	覆土中	PL22
TP46	弥生土器	壺	-	(2.7)	-	長石・石英・雲母	明褐	普通	胴部附加条一種(附加2条)の縄文施文	覆土中	PL22

第4号住居跡(第6~9回)

位置 調査I区中央部のE2g5区、標高24.1mの台地縁部に位置している。

規模と形状 西コーナー部を含む北部分は、調査区域外へ延びるため規模は不明であるが、短軸7.5m、長軸は7.8mが確認された。確認された形状から主軸方向はN-53°-Wと想定される。壁高は25~46cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。また、北東壁中央部に攪乱を受けている。

床 ほほ平坦で、炉の周辺から南東壁部の出入口部にかけて踏み固められている。南壁中央部入り口部には高まりが見られ、床との比高は約4cmである。

炉 中央のやや北部に位置している。長径73cm、短径64cmの楕円形で、床面を6cm皿状に掘りくぼめた地床炉であり、炉床面は熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 炭化粒子中量、焼土粒子多少量  
2 暗赤褐色 ローム粒子中量

ピット 7か所。P1~P3は、深さ98~113cmで主柱穴と考えられる。P4は深さ45cmで、炉の延長線上に位置していることから出入口施設に伴うピットと考えられる。P5は深さ48cm、P6は深さ6cm、P7は深さ15cmであるが、性格は不明である。

覆土 7層に分層される。周囲からの土砂の流入を呈する自然堆積である。

土層解説

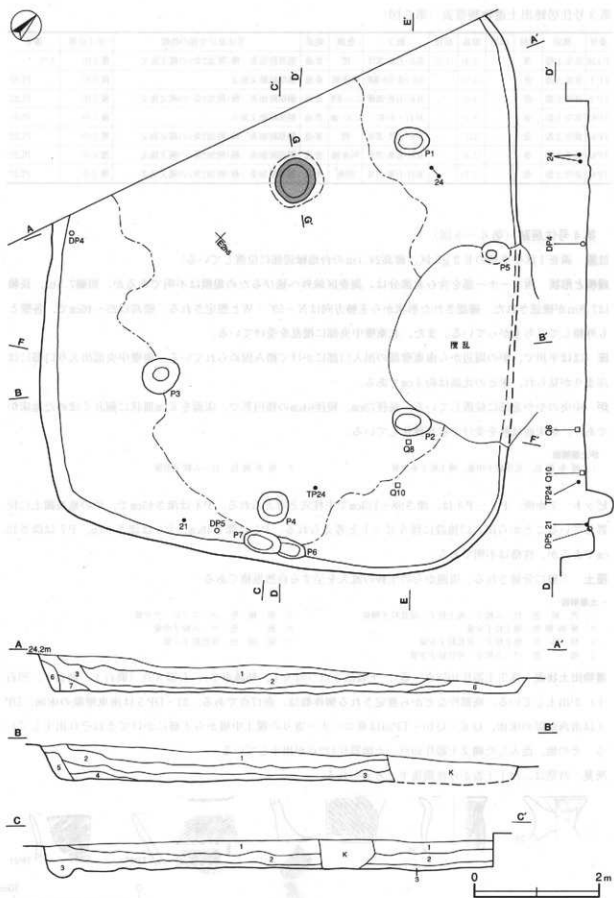
- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量  
2 暗褐色 焼土粒子少量  
3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量  
4 褐色 ローム粒子・炭化粒子少量  
5 明褐色 ロームブロック少量  
6 褐色 ローム粒子中量  
7 暗褐色 炭化粒子少量

遺物出土状況 弥生土器片1058点(壺)、土製品3点(勾玉1、紡錘車2)、石器3点(磨石1、敲石1、凹石1)が出土している。底部片などから推定される個体数は、壺17点である。21・DP5は南東壁際の床面、DP4は南西壁際の床面、Q8・Q10・TP24は東コーナー寄りの覆土中層から下層にかけてそれぞれ出土している。その他、混入した縄文土器片59点、土師器片422点が出土している。

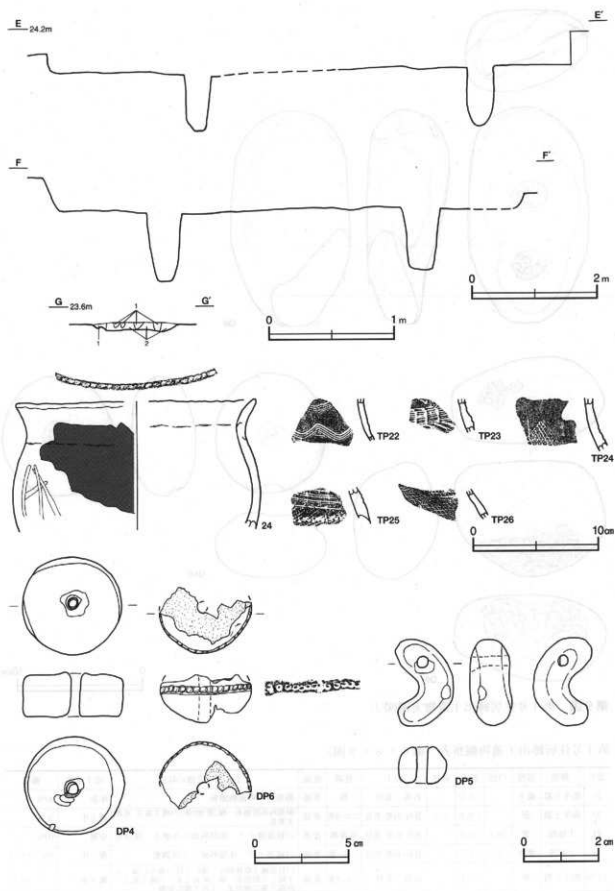
所見 時期は、出土土器から後期後半と考えられる。



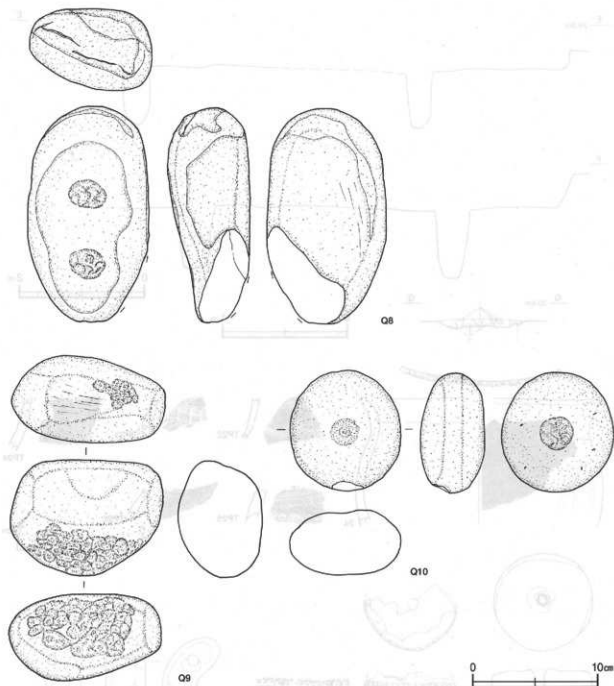
第6図 第4号住居跡出土遺物実測図(1)



第7图 第4号住居跡实测图



第8图 第4号住居跡・出土遺物実測図



第9図 第4号住居跡出土遺物実測図(2)

第4号住居跡出土遺物観察表 (第6・8・9図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
21	弥生土器	蓋カ	-	(3.5)	-	石英・雲母	橙	普通	脚部内・外面指頭痕	床面	30%
23	弥生土器	壺	-	(3.5)	[7.4]	長石・石英・雲母	にがい粉	普通	胴部外面附加塗一種(附加2条)の縄文様文 底部 式雲母	覆土中	5%
24	土師器	壺	[19.4]	(10.2)	-	長石・石英・雲母	灰黄褐色	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラ磨き 煤付着	中層	10%
25	土師器	甕力	[5.2]	(4.5)	-	長石・石英・雲母	にがい粉	普通	口縁部ナデ 体部外面ハケ目調整	覆土中	15% ミナチヤ7
TP20	弥生土器	壺	-	(4.1)	-	長石・雲母	にがい粉	普通	口唇部縄文原体押圧 帯い2段の板合口縁 上 下段とも附加塗一種(附加2条)の縄文様文 紋部下面に刺突文 上段下面に縮輪	覆土中	PL23

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
TP21	弥生土器	壺	-	(3.6)	-	石英・雲母	にぶい	普通	肩加蓋一種(肩加蓋)の縄文施文様, 斜位の短流線施文	覆土中	PL22
TP22	弥生土器	壺	-	(3.3)	-	長石・石英・雲母	にぶい	普通	頸部下縁部曲状工具(4本蹄角)による流状施文	覆土中	PL23
TP23	弥生土器	壺	-	(3.1)	-	長石・石英	にぶい	普通	頸部下縁部曲状工具(5本蹄角)による流状施文 頸部附加蓋一種(肩加蓋)の縄文施文	覆土中	PL23
TP24	弥生土器	壺	-	(4.1)	-	長石・石英	にぶい	普通	沈線による区画内に斜格子文	下層	PL22
TP25	弥生土器	壺	-	(2.9)	-	長石・石英	にぶい	普通	頸部下縁部曲状工具(4本蹄角)による流状施文 頸部附加蓋一種(肩加蓋)の縄文施文	覆土中	PL23
TP26	弥生土器	壺	-	(2.4)	-	長石・石英	にぶい	普通	網目状流線文施文	覆土中	PL23

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴・その他	出土位置	備考
DP4	紡錘車	5.2	2.3	0.6	86.3	長石・石英・雲母	ナデ 一方方向からの穿孔, 断面長方形	床面	PL21
DP6	紡錘車	(4.8)	(2.6)	(0.6)	(21.7)	長石・雲母	側面に竹管状工具による円形刺突文施文	覆土中	PL21

番号	器種	長さ	幅	孔径	重量	胎土	特徴・その他	出土位置	備考
DP5	勾玉	2.2	1.5	0.3	3.2	長石・石英・雲母	ナデ 一方方向からの穿孔	床面	PL21

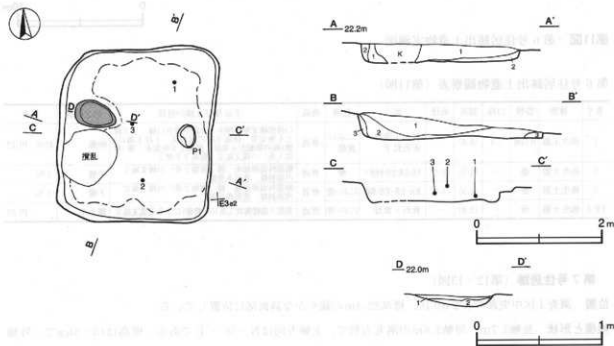
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴・その他	出土位置	備考
Q8	磨石	17.1	9.5	6.4	1504.5	キムンフェルス	両端部打痕 両面の磨痕が著しい	下層	PL24
Q9	磨石	6.9	12.0	9.2	1095.6	砂岩	3面使用	覆土中	PL24
Q10	凹石	2.1	3.0	0.8	3.1	砂岩	2面が窪む 磨打痕有り	下層	PL24

### 第6号住居跡(第10・11図)

位置 調査I区中央部のE3 d1区, 標高22.0mの緩やかな斜面部に位置している。

規模と形状 長軸2.8m, 短軸2.4mの隅丸長方形で, 主軸方向はN-67°-Wである。壁高は13~30cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, 全体的に踏み固められている。



第10図 第6号住居跡実測図

炉 西部に位置している。長径75cm、短径38cmの楕円形で、床面を10cm皿状に掘りこぼめた地床がであり、炉床面は熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子少量、炭化粒子微量  
2 明赤褐色 焼土ブロック少量

ピット 深さは11cmで、位置から出入口施設に伴うピットと考えられる。

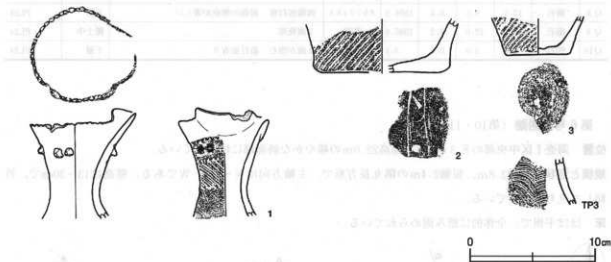
覆土 3層に分層される。周囲からの土砂の流入を呈する自然堆積である。

土層解説

- 1 麻暗褐色 ローム粒子微量  
2 暗褐色 ローム粒子少量  
3 褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 弥生土器片95点（壺94、片口壺1）、被熱痕のある鏝1点が出土している。1は北東コーナ一部床面、2は中央部南壁寄りの覆土中層、3は中央部覆土下層からそれぞれ出土し、TP3は覆土中からの出土である。その他、混入したと考えられる土師器片5点、須恵器片1点が出土している。

所見 時期は、出土土器から後期後半と考えられる。



第11図 第6号住居跡出土遺物実測図

第6号住居跡出土遺物観察表（第11図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	片口壺	7.1	(8.6)	-	長石・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口唇部縄文帯体埋庄 2段の板合口縁 上下段とも無文帯 腹部下層に刺突文 下段上縁に2段以上の縁線が4単位 頸部上平附加条一種（附加1条）の縄文施文 頸部下平無文	床面	45% PL12
2	弥生土器	壺	-	(3.9)	[9.2]	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	頸部外面附加条一種（附加2条）の縄文施文 内面刺線 底部木葉状	中層	5%
3	弥生土器	壺	-	(2.9)	[5.0]	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	頸部外面附加条一種（附加2条）の縄文施文 内面刺線 底部砂目状	下層	5%
TP3	弥生土器	壺	-	(3.8)	-	長石・雲母	にぶい橙	普通	頸部下端脚曲状工具（6本脚面）による連続文施文	覆土中	PL23

第7号住居跡（第12・13図）

位置 調査1区中央部のE2d0区、標高22.4mの緩やかな斜面部に位置している。

規模と形状 長軸3.7m、短軸3.6mの隅丸方形で、主軸方向はN-56°-Eである。壁高は13~34cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、炉を中心とした中央部が踏み固められている。

炉 2か所。炉1は北壁寄りに位置し、長径73cm、短径54cmの楕円形で、床面を6cm皿状に掘りくぼめた地床炉で、炉床面は熱を受けて赤変硬化している。炉2は西壁寄りに位置し、長径54cm、短径41cmの楕円形で、床面を5cm皿状に掘りくぼめた地床炉であり、炉床面は熱を受けて赤変硬化している。

炉1 土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック微量
- 2 赤褐色 焼土ブロック少量

3 赤褐色 焼土ブロック中量

炉2 土層解説

- 1 赤褐色 焼土粒子少量

2 赤褐色 焼土ブロック少量

覆土 3層に分層される。周囲からの土砂の流入を呈する自然堆積である。

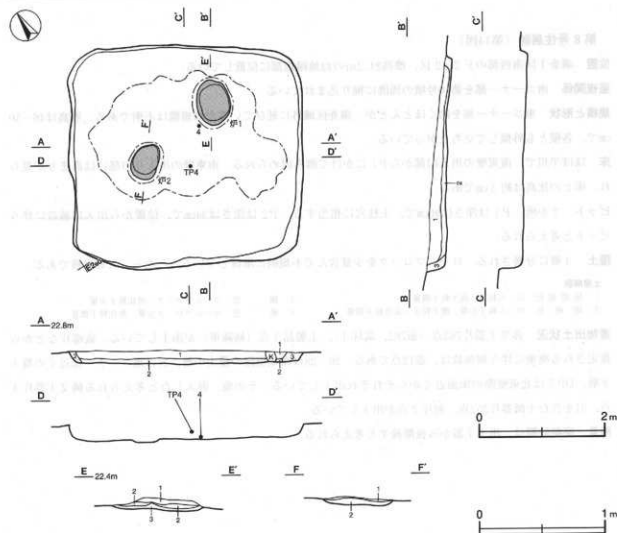
土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ロームブロック少量

3 明褐色 ローム粒子中量

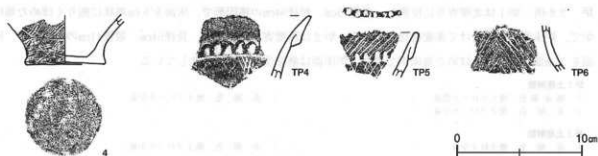
遺物出土状況 弥生土器片75点(壺)が出土している。4とTP4は中央部の覆土下層からそれぞれ出土し、TP5・TP6は覆土中からの出土である。その他、混入したと考えられる縄文土器片2点、土師器片28点が出土している。

所見 時期は、出土土器から後期前半と考えられる。



第12図 第7号住居跡実測図





第13図 第7号住居跡出土遺物実測図

第7号住居跡出土遺物観察表 (第13図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
4	弥生土器	壺	-	(3.9)	6.0	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	胴部外面附加糸一種(附加2条)の縄文施文後、北縁内凹溝。底部も目貫	下層	5%
TP4	弥生土器	壺	-	(5.0)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	腹合口縁段下縁に連続した押圧文。胴部幅面状1具(3本條面)による斜格子状文施文	下層	PL22
TP5	弥生土器	壺	-	(3.4)	-	長石・雲母	にぶい黄橙	普通	口唇部縄文車体押圧。腹合口縁部附加糸一種(附加2条)の縄文施文。段部下縁に斜突頭部沈線による斜格子状文施文	覆土中	PL23
TP6	弥生土器	壺	-	(3.4)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄	普通	頸部沈線による山形文施文	覆土中	PL22

#### 第8号住居跡 (第14図)

位置 調査1区南西部のF2c2区、標高24.2mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 南コーナー部を第10号墳の周溝に掘り込まれている。

規模と形状 東コーナー部を除くほとんどが、調査区域外に延びているため規模は不明である。壁高は46~50cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、南東壁の出入口部からP1にかけて踏み固められる。南東壁の出入り口部には高まりが見られ、床との比高は約3cmである。

ピット 2か所。P1は深さは96cmで、主柱穴に相当する。P2は深さは34cmで、位置から出入口施設に伴うピットと考えられる。

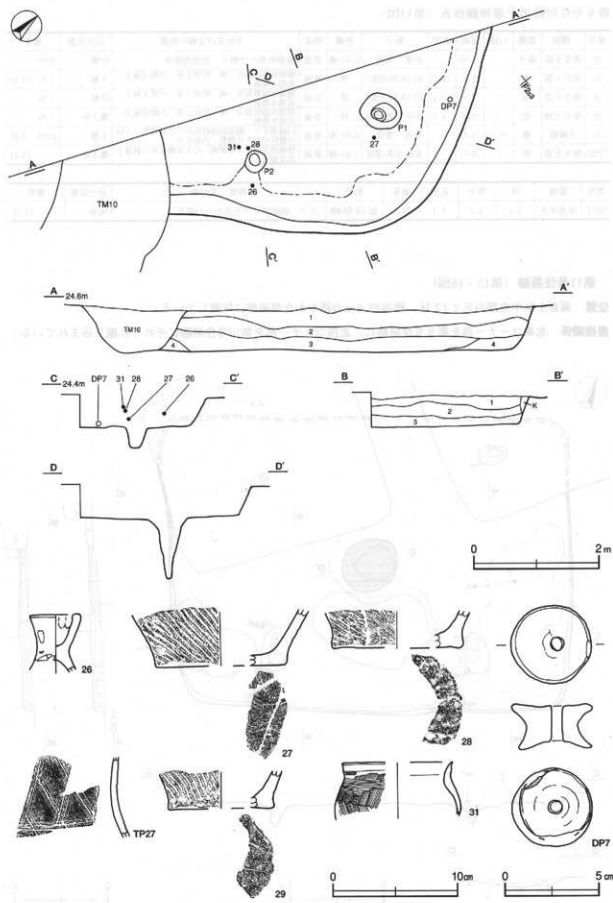
覆土 4層に分層される。ロームブロックを少量含んで不規則に堆積していることから、人為堆積である。

##### 土層解説

- |       |                     |      |                  |
|-------|---------------------|------|------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量        | 3 褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量   |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |

遺物出土状況 弥生土器片763点(壺762, 高坏1), 土製品1点(紡錘車)が出土している。底部片などから推定される廃棄に伴う個体数は、壺12点である。26・28は南東壁際の覆土中層, 27は東コーナー部近くの覆土下層, DP7は北東壁際の床面近くからそれぞれ出土している。その他, 混入したと考えられる縄文土器片4点, 31を含む土師器片352点, 刺片2点が出土している。

所見 廃絶時期は, 出土土器から後期後半と考えられる。



第14图 第8号住居跡・出土遺物実測図

第8号住居跡出土遺物観察表 (第14図)

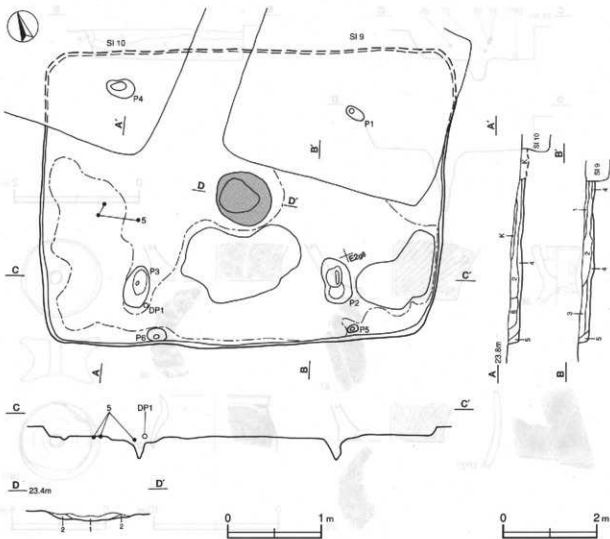
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
26	弥生土器	壺	-	(4.6)	-	石英・雲母	にんげん	普通	脚部外面へう割り・内面指環痕	中層	30%
27	弥生土器	壺	-	(4.3)	[10.2]	紅石・雲母	橙	普通	脚部外面附加帯一種(附加2条)の縄文施文 底径木雲痕	下層	5% PL12
28	弥生土器	壺	-	(2.9)	[10.4]	紅石・雲母	橙	普通	脚部外面附加帯一種(附加2条)の縄文施文 底径木雲痕	中層	5%
29	弥生土器	壺	-	(2.9)	[8.4]	長石・石英・雲母	橙	普通	脚部外面附加帯一種(附加2条)の縄文施文 底径木雲痕	覆土中	5%
31	土師器	甕	[8.7]	(4.3)	-	長石・雲母	にんげん	普通	口縁部ナデ 脚部外面斜位のハケ目調整 上段は斜位のハケ目調整 内面ナデ	上層	25% 手捏
TP27	弥生土器	壺	-	(6.5)	-	長石・石英・雲母	にんげん	普通	脚部加工具(4本輪歯)による縄文文と斜格子状文施文	覆土中	PL22

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴・その他	出土位置	備考
DP7	糸巻き	4.1	4.2	2.4	(31.9)	紅石・雲母	ナデ 指環痕 一方からの穿孔	床面	PL21

第11号住居跡 (第15・16図)

位置 調査I区中央部のE2f7区、標高23.6mの緩やかな斜面部に位置している。

重複関係 北東コーナー部を第9号住居跡に、北西コーナー部を第10号住居跡にそれぞれ掘り込まれている。



第15図 第11号住居跡実測図

**規模と形状** 北東コーナー及び北西コーナー部は、第9・10号住居にそれぞれ掘り込まれているが、長軸8.5m、短軸6.3mの長方形で、主軸方向はN-68°-Wと推定される。壁高は16~20cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。

**床** は平坦で、炉の東側と南側を中心に踏み固められた部分が見られる。また、南東コーナー付近と炉の南側に高まりが見られ、床との比高は、約6cmである。

**炉** 中央部に位置している。長径120cm、短径110cmの円形で、床面を8cm皿状に掘りくぼめた地床炉であり、炉床面は熱を受けて赤変硬化している。

**炉土層解説**

1 赤褐色 焼土ブロック少量

2 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量

**ピット** 6か所。深さはP1が44cm、P2が46cm、P3が21cm、P4が23cmで支柱穴に相当する。また、P5・P6は深さ10cmと15cmであるが、性格は不明である。

**覆土** 6層に分層される。周囲からの土砂の流入を呈する自然堆積である。

**土層解説**

1 黒褐色 炭化粒子中量、ロームブロック少量

4 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

2 黒褐色 炭化粒子中量、ローム粒子・焼土粒子少量

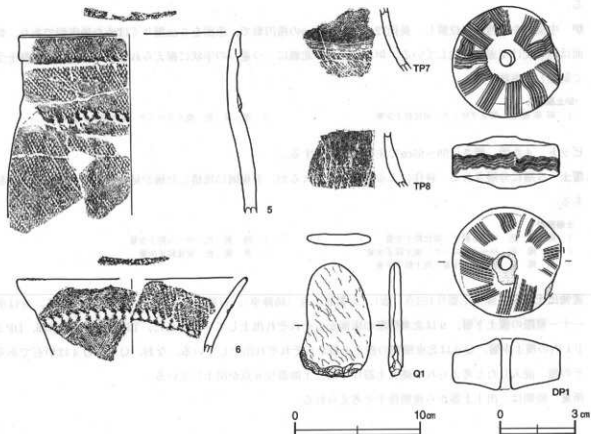
5 極暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

3 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量

6 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量

**遺物出土状況** 弥生土器片165点(壺)、土製品1点(紡錘車)、石器1点(礫器)が出土している。底部片などから推定される個体数は、壺3点である。5は西壁寄りの床面、DP1は南西コーナー部の床面近くからそれぞれ出土している。その他、混入したと考えられる土師器片8点、須臾器片1点が出土している。

**所見** 時期は、出土土器から後期前半と考えられる。



第16図 第11号住居跡出土遺物実測図

第11号住居跡出土遺物観察表 (第16回)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
5	弥生土器	壺	[17.6]	(14.3)	-	長石・石英	浅黄	普通	山口県縄文器体押付 3段の複合口縁 上下段とも附加糸一種 (附加1糸) の縄文施文 段部下部に刺突文 胴部外面附加糸一種 (附加1糸) の縄文施文	床面	10% PL12
6	弥生土器	壺	[18.0]	(6.0)	-	長石・石英・微礫	灰黄	普通	山口県縄文器体押付 複合口縁附加糸一種 (附加2糸) の縄文施文 段部下部に刺突文 胴部外面附加糸一種 (附加2糸) の縄文施文	覆土中	5% PL23
TP7	弥生土器	壺	-	(5.0)	-	長石・石英・微礫	黄	普通	段部下部附加工具 (6本筋面) による波状文及び横波状文 胴部附加糸一種 (附加2糸) の縄文施文	覆土中	PL22
TP8	弥生土器	壺	-	(4.4)	-	長石・石英・微礫	黄	普通	単沈線による区画と斜格子状文	覆土中	PL22

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴・その他	出土位置	備考
DP1	紡錘車	4.3	2.0	0.5	(37.2)	長石・石英・微礫	上・下両面附加工具 (6本筋面) による沈線を放射状に施文、側面波状文施文	床面	PL21

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴・その他	出土位置	備考
Q1	磨石	9.0	5.7	1.0	79.8	キルンフェルス	端部片面調整 石芥カ	覆土中	PL24

第15号住居跡 (第17・18回)

位置 調査I区南部のF2i7区、標高23.4mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 長軸4.0m、短軸3.6mの長方形で、主軸方向はN-57°-Wである。壁高は8~13cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、炉を弧状に囲むように中央部が踏み固められている。南東壁の中央部に出入り口部と考えられる高まりが見られ、高まりと床との比高は約8cmである。西コーナー部と東側が耕作による攪乱を受けている。

炉 中央部やや西側に位置し、長径72cm、短径40cmの楕円形で、床面を6cm掘りくぼめた地床炉であり、炉床面は熱を受けて赤変硬化している。炉石が、炉の北側に二つ連ハの字状に据えられており、上面は火熱を受けて剥離した痕跡が残る。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量      2 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量

ピット 4か所。深さは59~65cmで主柱穴に相当する。

覆土 5層に分層される。耕作による攪乱が見られるが、不規則に堆積した層が見られることから人為堆積である。

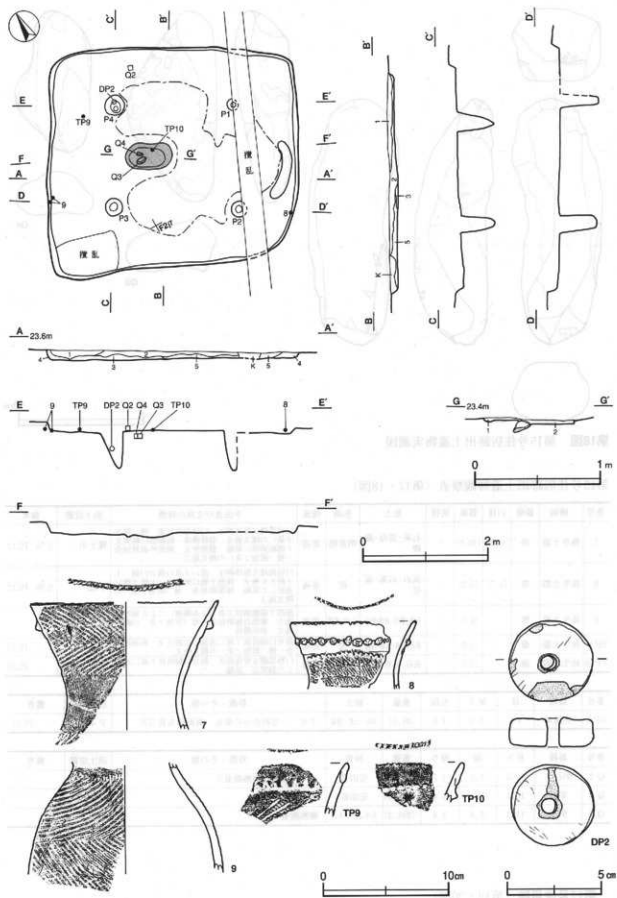
土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量      4 暗褐色 ローム粒子少量  
2 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量      5 黒褐色 炭化粒子少量  
3 黒褐色 炭化粒子中量、焼土粒子少量

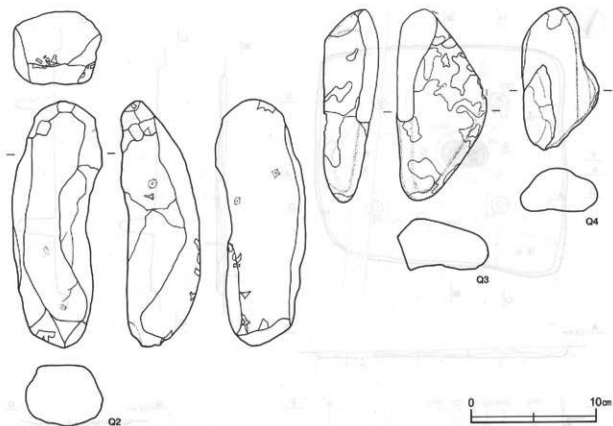
遺物出土状況 弥生土器片163点 (壺)、土製品1点 (紡錘車)、石器1点 (磨石) が出土している。8は南コーナー壁際の覆土下層、9は北東壁際の床面からそれぞれ出土している。また、TP10は炉の火床部、DP2はP4内の覆土中層、Q2は北東壁側の覆土下層からそれぞれ出土している。なお、Q3・Q4は炉石である。

その他、混入したと考えられる縄文土器片4点、土師器片6点が出土している。

所見 時期は、出土土器から後期後半と考えられる。



第17图 第15号住居跡・出土遺物実測図



第18図 第15号住居跡出土遺物実測図

第15号住居跡出土遺物観察表 (第17・18図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
7	弥生土器	壺	[14.8]	(10.1)	-	石英・雲母・燧石	明黄褐色	普通	口唇部縄文縦体押圧 口縁部附加糸一種 (附加2条) の縄文施文 羽状構成 結部部に刺突文 上部結部部に結輪 頸部施文 胴部外面附加糸一種 (附加2条) の縄文施文	覆土中	5% PL12
8	弥生土器	壺	[9.7]	(5.3)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口唇部縄文縦体押圧 深い2段の複合口縁 上下段とも無文 紋部下部に刺突文 上段下部に連続した結輪 胴部附加糸一種 (附加2条) の縄文施文	下層	5% PL12
9	弥生土器	壺	-	(8.7)	-	石英・雲母・赤色磁子	に灰漬	普通	胴部下縁帯状工具 (4本横面) による波状文施文 胴部外面附加糸一種 (附加2条) の縄文施文 羽状構成	床面	10%
TP9	弥生土器	壺	-	(4.3)	-	長石・石英・雲母・燧石	橙	普通	複合口縁段部下縁に連続した刺突文 胴部附加糸一種 (附加2条) の縄文施文	下層	PL23
TP10	弥生土器	壺	-	(3.2)	-	長石・石英・雲母	黒褐色	普通	口唇部縄文縦体押圧 複合口縁段下部に連続した刺突文 結輪	炉内	PL23

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴・その他	出土位置	備考
DP2	紡錘車	4.3	4.5	1.6	(39.5)	長石・石英・雲母	ナデ 一方からの穿孔 断面隅丸長方形	P4内	PL21

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴・その他	出土位置	備考
Q2	炉石カ	19.5	7.0	4.7	1008.3	安山岩	タール付着 被熱痕有り	下層	
Q3	炉石	15.1	(5.1)	4.4	(495.1)	安山岩	被熱痕有り	炉内	
Q4	炉石	11.1	5.9	3.4	(291.3)	ホルンフェルス	被熱痕有り	炉内	

第17号住居跡 (第19・20図)

位置 調査I区中央部のF3b1区、標高23.5mの台地縁辺部に位置している。

**規模と形状** 北東コーナー及び南東コーナー部を含む住居跡の東部は調査区域外に延びているため、全体の規模は不明であるが、短軸3.4m、長軸4.3mが確認された。確認された形状から主軸方向はN-59°-Wであると想定される。壁高は18~25cmで、緩斜して立ち上がっている。

**床** はほぼ平坦であり、やや締まりはあるものの硬化した部分は認められない。

**炉** 中央部に位置し、長径98cm、短径70cmの楕円形で、床面を10cm掘りくぼめた地床炉であり、炉床面は熱を受けて赤変しているが、東側約半分が擾乱を受けている。

**炉土層解説**

- |                       |                          |
|-----------------------|--------------------------|
| 1 極暗赤褐色 炭化粒子少量、焼土粒子微量 | 2 にぶい赤褐色 焼土ブロック少量、炭化粒子微量 |
|-----------------------|--------------------------|

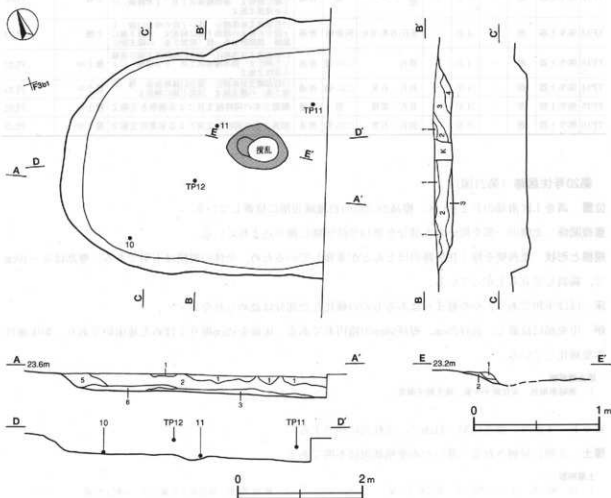
**覆土** 6層に分層される。不規則に堆積した層が見られることから人為堆積である。

**土層解説**

- |                    |                    |
|--------------------|--------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 | 4 極暗褐色 ローム粒子微量     |
| 2 黒褐色 焼土粒子少量       | 5 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 3 褐色 ロームブロック少量     | 6 褐色 ローム粒子少量       |

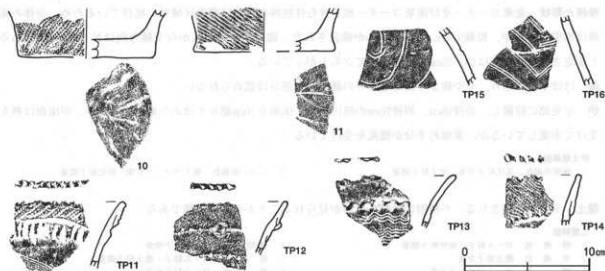
**遺物出土状況** 弥生土器片471点（壺）が出土している。10は南西コーナー側の床面、11は炉北側の床面からそれぞれ出土している。その他、混入したと考えられる縄文土器片28点、土師器片43点、陶器2点が出土している。

**所見** 時期は、中期の土器の混入も見られるが、出土土器から後期前半と考えられる。



第19図 第17号住居跡実測図





第20図 第17号住居跡出土遺物実測図

第17号住居跡出土遺物観察表 (第20図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
10	弥生土器	壺	-	(3.7)	[10.8]	石英・雲母・燧石	橙	普通	胴部外面附加条一種 (附加2条) の縄文施文 内面斜線 底部木葉状	床面	5%
11	弥生土器	壺	-	(3.3)	[11.0]	石英・雲母・燧石	橙	普通	胴部外面附加条一種 (附加2条) の縄文施文 底部木葉状	床面	5%
TP11	弥生土器	壺	-	(5.0)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口唇部縄文原形押圧 複合口縁附加条一種 (附加2条) の縄文施文 段部下に横波状施文後、下部に斜交文、頸部脚部状工具 (4本脚面) による波状施文	上層	PL22
TP12	弥生土器	壺	-	(4.2)	-	長石・石英・雲母	灰黄褐色	普通	口唇部縄文原形押圧 薄い2段の複合口縁 上下段とも施文の段部下に斜交文 上段下部に斜線 胴部附加条一種 (附加2条) の縄文押圧	上層	PL23
TP13	弥生土器	壺	-	(4.2)	-	長石	にがい色	普通	口唇部縄文原形押圧 複合口縁段下部に連続した斜交文、頸部脚部状工具 (3本脚面) による波状施文	覆土中	PL23
TP14	弥生土器	壺	-	(4.0)	-	長石・石英	にがい色	普通	口唇部縄文原形押圧 複合口縁附加条一種 (附加2条) の縄文施文 段部下に斜交文	覆土中	PL23
TP15	弥生土器	壺	-	(4.8)	-	長石・雲母	橙	普通	胴部2本の同時施文工具による渦巻文施文	覆土中	PL22
TP16	弥生土器	壺	-	(5.8)	-	長石・石英	にがい色	普通	胴部2本の同時施文工具による垂葉形文施文	覆土中	PL22

### 第20号住居跡 (第21図)

位置 調査I区南部のF 2g 8区、標高23.2mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 北側の一部を除いた大部分を第14号住居跡に掘り込まれている。

規模と形状 北西壁を除く住居跡のほとんどが重複しているため、全体の規模は不明である。壁高は8~10cmで、緩斜して立ち上がっている。

床 ほほ平坦であり、やや締まりはあるものの硬化した部分は認められない。

炉 中央部に位置し、長径75cm、短径56cmの楕円形である。床面を12cm掘りくぼめた地床炉であり、炉床面は赤変硬化している。

#### 伊土層解説

- 1 極暗赤褐色 炭化粒子少量、焼土粒子微量

ピット 4か所。深さは33~41cmで、支柱穴に相当する。

覆土 2層に分層される。薄いため堆積状況は不明である。

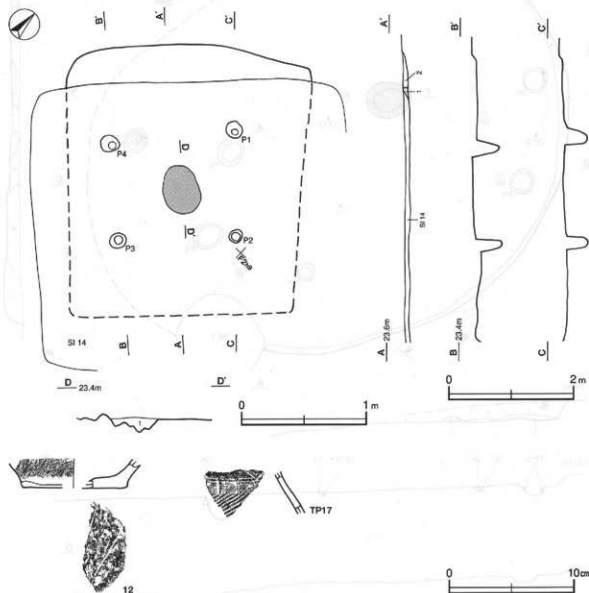
#### 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

- 2 極暗褐色 炭化粒子中量、ローム粒子少量

**遺物出土状況** 弥生土器片90点（壺）が出土している。重複により覆土が薄く、遺物の数も少ないため、図示することができたのは12・TP17であり、それぞれ覆土中からの出土である。その他、混入したと考えられる縄文土器片3点、土師器片7点、須恵器片1点が出土している。

**所見** 時期は、出土土器から後期後半と考えられる。



第21図 第20号住居跡・出土遺物実測図

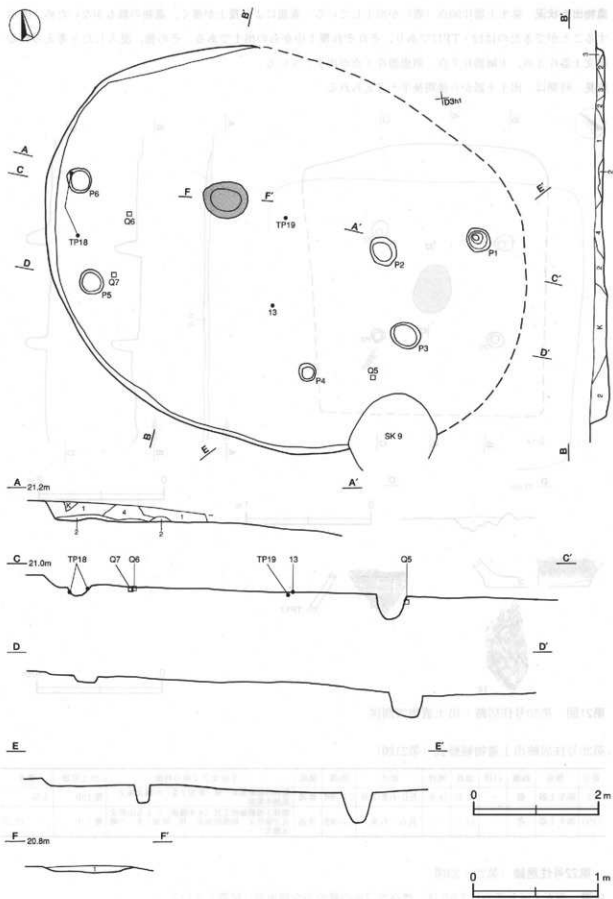
第20号住居跡出土遺物観察表（第21図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
12	弥生土器	壺	-	(2.3)	[8.0]	長石・石英・雲母	にじみ青	普通	胴部外面附加条一種（附加2条）の縄文施文 或部木葉状	覆土中	5%
TP17	弥生土器	壺	-	(3.1)	-	長石・石英	にじみ青	普通	胴部下高脚座状工具（8本脚座）による山形文 及び葉状文 胴部附加条一種（附加2条）の縄 文施文	覆土中	PL23

第22号住居跡（第22・23図）

**位置** 調査Ⅰ区北部のD 2 h 0 区、標高20.7mの緩やかな斜面部に位置している。

**重複関係** 南部を第9号土坑に掘り込まれている。



第22图 第22号住居跡実測図

**規模と形状** 東側床面の半分が露出した状態で検出された。遺存する壁の形状と床面の状況から長径7.9m、短径5.8mの楕円形で、主軸方向はN-43°-Wと推定される。壁高は20cmほどで、外傾して立ち上がっている。床 はほぼ平坦であり、やや締まりはあるものの硬化した部分は認められない。

**炉** 中央部の北東寄りに位置し、長径36cm、短径30cmの楕円形で、床面を5cm皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉床面はわずかに赤変硬化している。

**炉土層解説**

1 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量

**ピット** 6か所。主柱穴は不明であるが、P1・P3・P5・P6の深さは10~39cmである。

**覆土** 4層に分層される。埋め戻されたような状態を示す人為堆積である。

**土層解説**

1 黒褐色 炭化粒子中量

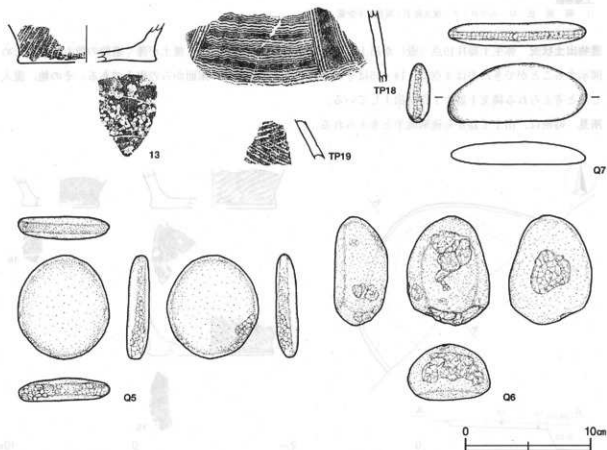
3 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量

2 黒褐色 炭化粒子中量、ローム粒子少量

4 黒褐色 炭化粒子多量

**遺物出土状況** 弥生土器片10点(壺)、石器3点(磨石1、敲石1、敲打具カ1)が出土している。13・TP19は中央部の床面、Q5は南コーナー寄りの床面、Q6・Q7は西コーナー寄りの床面からそれぞれ出土している。TP18はP6内の覆土上層とP6南側の床面から出土した破片が接合したものである。その他、混入したと考えられる縄文土器片6点、土師器片26点が出土している。

**所見** 時期は、出土土器から後期後半と考えられる。



第23図 第22号住居跡出土遺物実測図

第22号住居跡出土遺物観察表 (第23図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
13	弥生土器	壺	-	(3.0)	[10.8]	長石・石英・雲母	浅黄	普通	胴部外面附加条一種(附加2条)の縄文施文 内面附飾 底部木漆痕	床面	5%
TP18	弥生土器	壺	-	(5.2)	-	長石・雲母	浅黄	普通	胴部外面附加条一種(日本標準)のスリット手法による縦区画 充填状文施文	P6内	PL23
TP19	弥生土器	壺	-	(2.9)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	胴部附加条一種(附加2条)の縄文施文	床面	PL23

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴・その他	出土位置	備考
Q5	磨石	8.1	7.1	1.8	138.4	砂岩	周縁部敲打痕	床面	PL24
Q6	磨石	8.6	6.5	4.2	341.8	安山岩	両面、両端部使用 両面及び下部部の敲打痕が著しい	床面	PL24
Q7	敲打具カ	11.0	4.6	1.9	141.7	ホルンフェルス	端部・側面に敲打痕及び磨痕	床面	PL24

第24号住居跡 (第24図)

**位置** 調査I区東部のF2g3区、標高23.9mの台地縁辺部に位置している。

**重複関係** 第25号住居に掘り込まれている。

**規模と形状** ほとんどが第25号住居と重複しているため、全体の規模は不明である。壁高は8~10cmで、外傾して立ち上がっている。

**床** ほぼ平坦で、中央部にかけて踏み固められている部分が見られる。

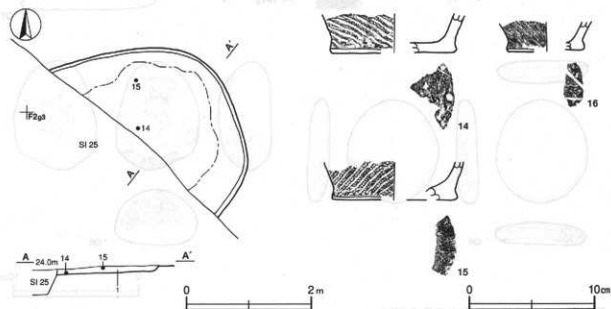
**覆土** 単一層である。薄いため堆積状況は不明である。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量

**遺物出土状況** 弥生土器片19点(壺)が出土している。重複及び耕作により覆土が薄く遺物の数も少ないため図示することができたのは3点で、14・15はそれぞれ東コーナー寄りの床面からの出土である。その他、混入したと考えられる縄文土器片1点が出土している。

**所見** 時期は、出土土器から後期前半と考えられる。



第24図 第24号住居跡・出土遺物実測図

第24号住居跡出土遺物観察表 (第24図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
14	弥生土器	壺	-	(3.1)	[9.6]	石英・雲母	にがい壺	普通	胴部外面附加糸一種(附加2条)の縄文施文 或部木葉文	床面	5%
15	弥生土器	壺	-	(3.0)	[9.6]	長石・石英・雲母	にがい壺	普通	胴部外面附加糸一種(附加2条)の縄文施文 或部木葉文	床面	5%
16	弥生土器	壺	-	(2.3)	[6.0]	長石・石英・雲母	にがい壺	普通	胴部外面附加糸一種(附加2条)の縄文施文 或部木葉文	覆土中	5% PL23

## (2) 土坑

## 第2号土坑 (第25図)

位置 調査I区北部のD3d2区、標高20.9mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第3号土坑の南部を掘り込んでいる。

規模と形状 長径2.3m、短径2.0mの楕円形で、深さは45cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がりしている。長径方向はN-48°-Eである。

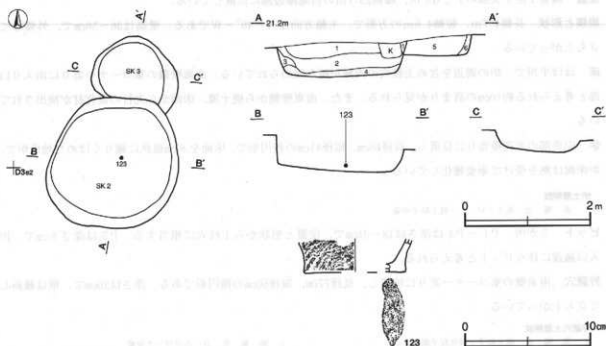
覆土 4層に分層される。周囲からの土砂の流入を早する自然堆積である。

## 土層解説

- 1 黒色 炭化粒子・粘土粒子・炭屑・炭質バミス粒子微量  
2 灰褐色 粘土ブロック少量、炭屑バミス粒子微量  
3 灰褐色 粘土ブロック中量、炭屑バミス粒子微量  
4 黒褐色 粘土粒子少量

遺物出土状況 弥生土器片1点(壺)が中央部の覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から後期後半と考えられる。



第25図 第2・3号土坑・出土遺物実測図

第2号土坑出土遺物観察表 (第25図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
123	弥生土器	壺	-	(2.6)	[7.8]	長石・石英・雲母	橙	普通	胴部外面附加糸一種(附加2条)の縄文施文 或部木葉文	下層	5%

### 第3号土坑 (第25図)

位置 調査Ⅰ区北部のD3d2区、標高21.0mの台地縁辺部に位置している。

置換関係 南部を第2号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長径1.4m、短径1.1mの楕円形で、深さは24cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。長径方向はN-76°-Wである。

覆土 2層に分層される。周囲からの土砂の流入を呈する自然堆積である。

#### 土層解説

5 暗褐色 粘土粒子少量、炭化粒子微量

6 におい褐色 粘土粒子・炭粒少量

遺物出土状況 土師器片28点(杯・椀類13、甕類12、高杯3)が出土している。いずれも細片のため図示できなかったが、多くは覆土下層から底面にかけて出土している。

所見 時期は、第2号土坑に掘り込まれていることから、後期後半以前と考えられる。

### 3 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査で、古墳時代の竪穴住居跡14軒、古墳1基を確認した。別所古墳群は9基が確認されており、今回の調査により確認された古墳は第10号墳とする。以下、遺構及び遺物について記述する。

#### (1) 竪穴住居跡

##### 第1号住居跡 (第26～28図)

位置 調査Ⅰ区中央部のF2d9区、標高23.7mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 長軸4.7m、短軸4.6mの方形で、主軸方向はN-49°-Wである。壁高は36～56cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、炉の周辺を含め主柱穴の内側が踏み固められている。南東壁側の東コーナー寄りに出入り口部と考えられる約10cmの高まりが見られる。また、南東壁側から焼土塊、床面から丸材の炭化材が検出されている。

炉 中央部の北西壁寄りに位置し、長径66cm、短径41cmの楕円形で、床面を8cm皿状に掘りくぼめた地床炉で、炉床面は熱を受けて赤変硬化している。

#### 炉土層解説

1 赤褐色 焼土ブロック・焼土粒子中量

ピット 5か所。P1～P4は深さは18～24cmで、位置と形状から主柱穴に相当する。P5は深さ9cmで、入口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 南東壁の東コーナー寄りに位置し、長径77cm、短径60cmの楕円形である。深さは20cmで、壁は緩斜して立ち上がっている。

#### 貯蔵穴土層解説

1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子微量

3 暗褐色 ロームブロック少量

2 明褐色 ロームブロック少量

4 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量

覆土 8層に分層される。第1層は周囲からの土砂の流入を示す自然堆積で、第2～8層はロームブロック、炭化材や炭化物を比較的多く含んでおり、焼失や焼絶に伴って形成された人為堆積である。

#### 土層解説

1 黒褐色 炭化粒子中量、ローム粒子・焼土粒子微量

5 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

6 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量

3 暗褐色 炭化物中量、ロームブロック少量

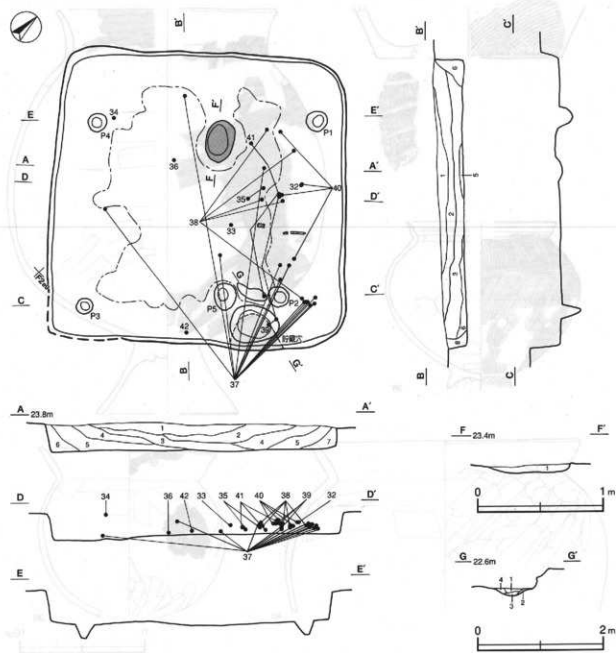
7 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量

4 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量

8 褐色 ローム粒子中量

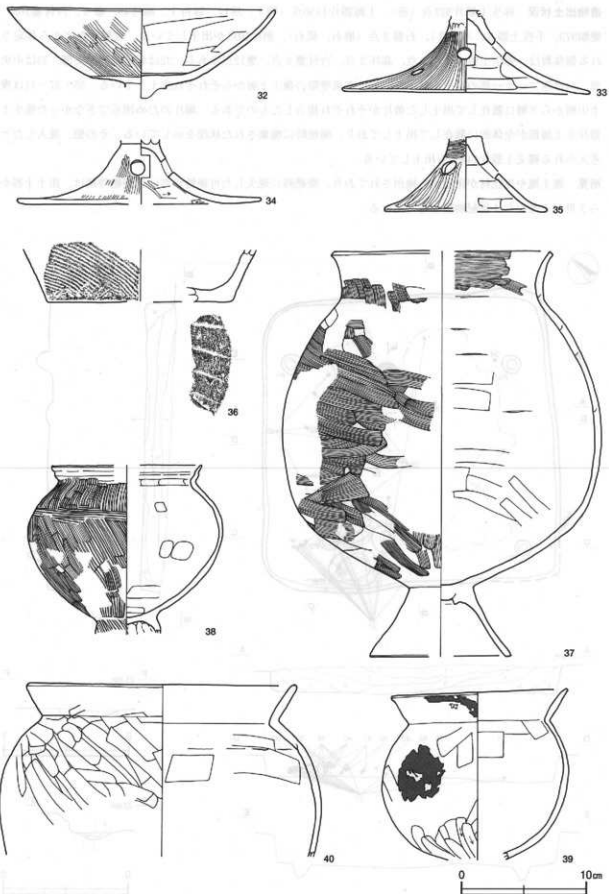
遺物出土状況 弥生土器片327点(壺), 土師器片1150点(椀1, 埴17, 器台1, 高坏43, 壺6, 台付甕103, 甕類973, 手捏土器3, 不明3), 石器2点(磨石, 砥石), 剥片10点が出土している。底部片などから推定される個体数は, 弥生土器(壺)3点, 高坏3点, 台付甕6点, 甕12点である。32は北東壁側中央部, 33は中央部, 34は西コーナー部の覆土中層から, 42は南東壁際の覆土下層からそれぞれ出土している。35・37~41は覆土中層から下層に散在して出土した破片がそれぞれ接合したものである。細片のため図示できなかった弥生土器片と土師器が全体的に散在して出土しており, 廃絶時に廃棄された状況を示している。その他, 混入したと考えられる縄文土器片144点も出土している。

所見 焼土塊や炭化材が床面から検出されており, 廃絶時に焼失した可能性が高い。廃絶時期は, 出土土器から3世紀末葉から4世紀初頭と考えられる。

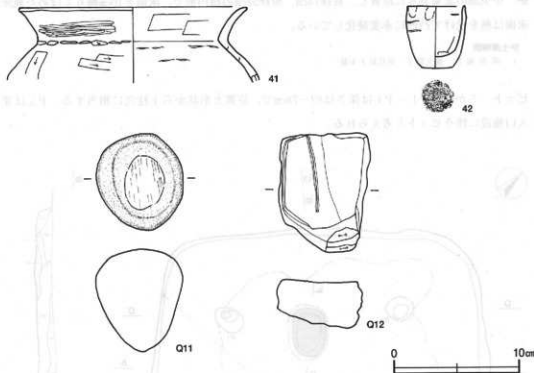


第26図 第1号住居跡実測図





第27图 第1号住居跡出土遺物実測図(1)



第28図 第1号住居跡出土遺物実測図(2)

第1号住居跡出土遺物観察表(第27・28図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
32	土師器	高坏	21.4	(7.0)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部破ナデ 胴部外面ヘラ磨き	中層	40%
33	土師器	高坏	-	(6.6)	19.6	長石・雲母	にぶい橙	普通	胴部外面ヘラ磨き 内面ヘラナデ 意6カ所	中層	40% PL16
34	土師器	高坏	-	(5.1)	19.3	長石・雲母	にぶい橙	普通	胴部外面ヘラ磨き 内面ヘラナデ 意5カ所	上層	20%
35	土師器	高坏	-	(5.9)	12.0	長石・雲母	にぶい橙	普通	胴部外面ヘラ磨き 内面ヘラナデ 意3カ所	中層	30%
36	弥生土器	壺	-	(4.2)	14.6	長石・石英・雲母	浅黄橙	普通	胴部外面磨加念一様(舞加2条)の縄文施文 底径太型 底無底	下層	5% PL12
37	土師器	台付甕	17.0	32.5	11.0	石英・雲母・赤包灰	にぶい橙	普通	口縁部破ナデ 胴部外面ヘラ磨き 内面ヘラナデ 輪痕	中層	60%
38	土師器	台付甕	11.8	(13.3)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部破ナデ 胴部外面新位のハケ目調整 上位は磨位のハケ目調整 内面ナデ	中層	60% S字状口縁 PL14
39	土師器	甕	14.0	(13.5)	-	石英・雲母	浅黄橙	普通	口縁部破ナデ 胴部外面ヘラナデ・ヘラ磨り 内面ヘラナデ	中層	70% PL18
40	土師器	甕	21.1	(13.5)	-	長石・石英・雲母	濁	普通	口縁部破ナデ 胴部外面ヘラ磨き・ヘラ磨り 内面ヘラナデ 輪痕	中層	40%
41	土師器	甕	18.0	(5.8)	-	石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部破ナデ・ヘラ磨き 胴部外面ヘラ磨り 内面ヘラナデ 輪痕	中層	15%
42	土師器	手捏	4.5	4.9	2.5	長石・雲母	にぶい橙	普通	体部内・外面指痕。輪痕	下層	85% PL13

	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴・その他	出土位置	備考
Q11	磨石	7.7	6.9	8.1	617.7	カリシムス石	下層部使用	覆土中	PL24
Q12	砥石	9.3	7.2	3.8	382	片岩	上層部使用	覆土中	

### 第2号住居跡(第29・30図)

位置 調査I区中央部のF2b4区、標高24.2mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 長軸5.4m、短軸5.2mの方形で、主軸方向はN-45°-Eである。壁高は25~30cmで、外傾して立ち上がっている。

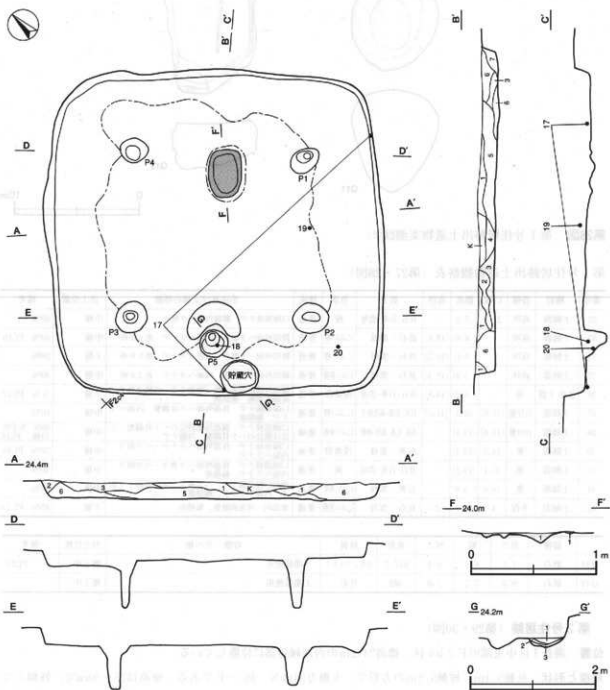
床 はほぼ平坦で、炉の周辺を含め支柱穴の内側が踏み固められている。南西壁側の中央部に出入り口部と考えられる約6cmの高まりがある。

炉 中央部の北東寄りに位置し、長径74cm、短径52cmの楕円形で、床面を10cm掘りくぼめた地床炉であり、炉床面は熱を受けて凸凹に赤硬化している。

炉土層解説

1 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量

ピット 5か所。P1～P4は深さは62～78cmで、位置と形状から主柱穴に相当する。P5は深さ35cmで、出入口施設に伴うピットと考えられる。



第29図 第2号住居跡実測図

貯蔵穴 南西壁の中央部に位置し、長径60cm、短径50cmの楕円形である。深さは17cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- |       |              |      |           |
|-------|--------------|------|-----------|
| 1 灰褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 3 褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量      |      |           |

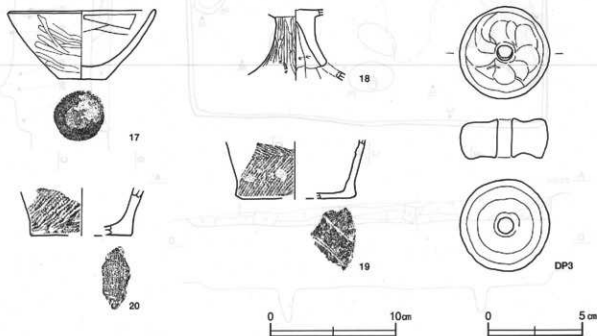
覆土 7層に分別される。ロームブロックを少量含み、埋め戻されたような状態を示す人為堆積である。

土層解説

- |       |                |       |                       |
|-------|----------------|-------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量   | 5 黒褐色 | 炭化粒子中量、ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | 6 黒褐色 | 炭化粒子中量、ローム粒子少量        |
| 3 黒褐色 | 炭化粒子中量、ローム粒子少量 | 7 黒褐色 | 炭化粒子中量、ロームブロック少量      |
| 4 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量   |       |                       |

遺物出土状況 弥生土器片296点(壺), 土師器片221点(椀17, 高坏4, 壺1, 甕類199), 土製品1点(紡錘車), 割片1点が出土している。底部片などから推定される個体数は、弥生土器(壺)6点, 椀1点, 高坏1点, 甕4点である。17は南西壁際の覆土下層と東コーナー壁際の覆土下層から出土した破片がそれぞれ接合したものである。18はP5内の覆土上層, 19は南東壁側の覆土下層, 20は南コーナーの床面からそれぞれ出土している。細片のため図示できなかった弥生土器片と土師器が全体的に散在して出土しており、廃絶時に廃棄された状況を示している。その他、混入したと考えられる縄文土器片45点が出土している。

所見 廃絶時期は、出土土器から4世紀前葉と考えられる。



第30図 第2号住居跡出土遺物実測図

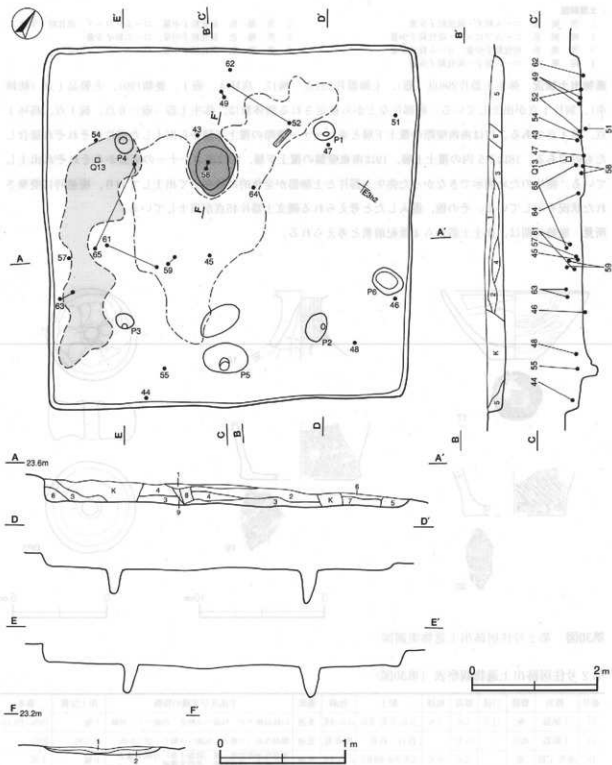
第2号住居跡出土遺物観察表(第30図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
17	土師器	椀	11.6	5.6	3.8	長石・石英・雲母	にい・黄赤	普通	口縁部横ナゲ 外面へラ磨き 内面ナゲ, 刺棘	下層	75% PL13
18	土師器	高坏	-	(5.6)	-	長石・石英	褐色陶	普通	脚部外面へラ磨き 内面へラ磨り 意3か所	P5内	40%
19	弥生土器	壺	-	(4.6)	[8.6]	石英・雲母・赤鉄粒子	にい・黄赤	普通	胴部外面附加糸一種(附加2条)の縄文系文羽状横線 内面刺棘 底部木蓋痕	下層	5%
20	弥生土器	壺	-	(3.8)	[8.0]	長石・石英	浅黄橙	普通	胴部外面附加糸一種(附加2条)の縄文系文底面刺棘	床面	5% PL23

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP3	紡錘車	4.8	2.1	0.8	56.8	長石-石灰-雲母	上面磨面痕 下面ナデ	覆土中	PL21

### 第5号住居跡 (第31~35図)

位置 調査I区中央部のE3h1区、標高23.4mの緩やかな斜面部に位置している。



第31図 第5号住居跡実測図

**規模と形状** 長軸6.0m、短軸5.7mの方形で、主軸方向はN-35°-Wである。壁高は8~33cmで、やや外傾して立ち上がっている。

**床** はほぼ平坦で、炉を弧状に囲むように中央部が踏み固められている。南東壁側の中央部に出入口部と考えられる約5cmの高まりがある。また、南西壁側から焼土塊、床面から丸材の炭化材が検出されている。

**炉** 中央部の北西壁寄りに位置し、長径97cm、短径72cmの楕円形で、床面を7cm皿状に掘りくぼめた床床あり、炉床面は熱を受けて赤変硬化している。

**炉土層解説**

- |                  |                      |
|------------------|----------------------|
| 1 黒褐色 炭化物・炭化粒子少量 | 2 暗赤褐色 焼土ブロック・焼土粒子少量 |
|------------------|----------------------|

**ピット** 6か所。P1~P4は深さは40~55cmで、位置と形状から主柱穴に相当する。P5は深さ26cmで、出入口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ12cmで、性格は不明である。

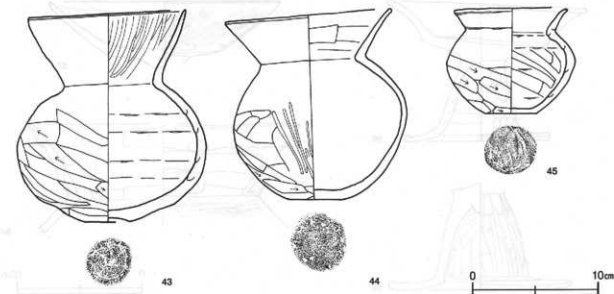
**覆土** 9層に分別される。ロームブロックを少量含み、埋め戻されたような状態を示す人為堆積である。

**土層解説**

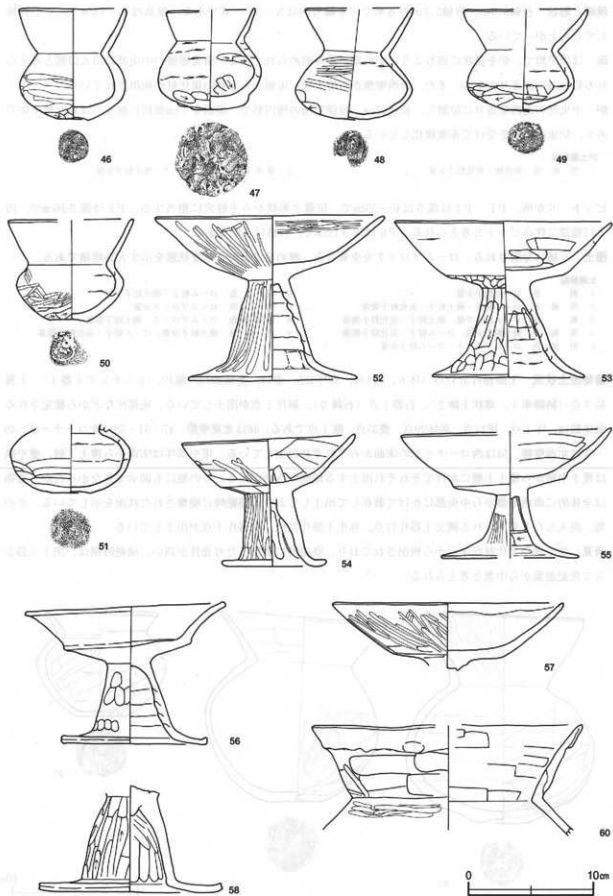
- |                           |                           |
|---------------------------|---------------------------|
| 1 褐色 ローム粒子少量              | 6 褐色 ローム粒子・焼土粒子少量         |
| 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量   | 7 褐色 ロームブロック少量            |
| 3 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量  | 8 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量      |
| 4 黒褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 9 黒褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 5 明褐色 ロームブロック・ローム粒子少量     |                           |

**遺物出土状況** 土師器片3742点(坏6, 埴14, 高坏485, 壺14, 甕類3073, 瓶19, ミニチュア土器1), 土製品3点(紡錘車1, 球状土錘2), 石器1点(石錘カ), 剥片1点が出土している。底部片などから推定される個体数は、坏1点, 埴11点, 高坏29点, 甕35点, 瓶1点である。46は北東壁際, 47・51・52は北コーナー部, 49・62は北西壁側, 54は西コーナー部の床面からそれぞれ出土している。埴や高坏は床面から覆土下層, 甕や瓶は覆土中層から覆土上層にかけてそれぞれ出土する傾向がうかがえる。この他にも図示できなかったが、遺物は全体的に南西壁側から中央部にかけて散在して出土しており、廃絶時に廃棄された状況を示している。その他、混入したと考えられる縄文土器片17点, 弥生土器片72点, 陶器片1点が出土している。

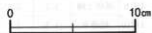
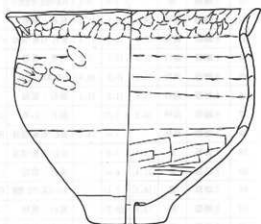
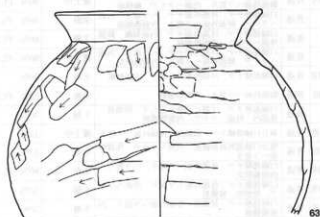
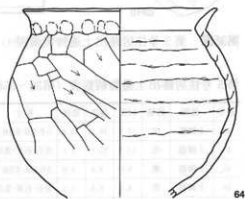
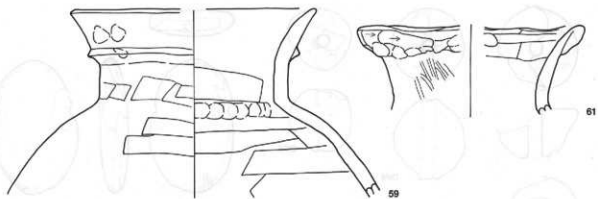
**所見** 焼土塊や炭化材が床面から検出されており、廃絶時に焼失した可能性が高い。廃絶時期は、出土土器から5世紀前葉から中葉と考えられる。



第32図 第5号住居跡出土遺物実測図(1)

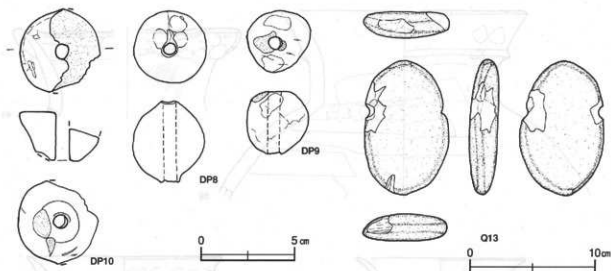


第33图 第5号住居跡出土遺物実測図(2)



第34图 第5号住居跡出土遺物実測図(3)





第35図 第5号住居跡出土遺物実測図(4)

第5号住居跡出土遺物観察表 (第32~35図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
43	土師器	埴	12.5	16.8	3.4	石灰・雲母・赤色粒子	にぶい黄	普通	口縁部外面ナデ、内面ヘラ磨き 体部外面ヘラ磨り、内面輪轆痕	下層	90% PL15
44	土師器	埴	13.1	15.1	4.1	長石・石英・雲母	にぶい黄	普通	口縁部ナデ 体部外面ヘラ磨き、ヘラ磨り 内面ヘラナデ	下層	95% PL15
45	土師器	甕	9.0	8.4	4.0	長石・石英・赤色粒子	黄	普通	口縁部ナデ 体部外面ヘラ磨り、内面ヘラナデ 輪轆痕	下層	90% ミニチュア PL14
46	土師器	埴	8.4	8.8	2.5	長石・石英・雲母	黄	普通	口縁部ナデ 体部外面ヘラ磨き、ヘラ磨り 内面輪轆痕	床面	95% PL14
47	土師器	埴	[ 6.8 ]	8.1	5.6	長石・石英・雲母	にぶい黄	普通	口縁部ナデ 体部内・外面ヘラ磨り、輪轆痕	床面	95% PL15
48	土師器	埴	[ 8.5 ]	8.8	2.0	長石・石英・雲母	にぶい黄	普通	口縁部ナデ 体部外面ヘラ磨き、ヘラ磨り 内面輪轆痕	下層	70%
49	土師器	埴	[ 9.8 ]	8.1	2.6	長石・雲母・赤色粒子	にぶい赤黄	普通	口縁部ナデ 体部外面ヘラ磨き、ヘラ磨り 内面ヘラ磨り、輪轆痕	床面	65%
50	土師器	埴	[10.0]	8.1	2.8	長石・雲母	にぶい黄	普通	口縁部ナデ 体部外面ヘラ磨き 内面輪轆痕	覆土中	55%
51	土師器	埴	- ( 5.4 )	3.1	0.1	石灰・雲母・赤色粒子	にぶい黄	普通	体部外面ヘラ磨き 内面輪轆痕	床面	60%
52	土師器	高坏	18.1	13.1	13.3	長石・雲母	黄	普通	口縁部ナデナデ、体部外面・頸部ヘラ磨き 内面ヘラ磨き、輪轆痕	床面	80% PL17
53	土師器	高坏	17.2	12.3	12.1	長石・石英・雲母	にぶい黄	普通	口縁部ナデナデ、体部外面ナデ 内面ヘラナデ 頸部外面ヘラ磨り、内面ヘラナデ、輪轆痕	覆土中	90% PL17
54	土師器	高坏	13.8	10.5	8.2	石英・雲母	黄	普通	口縁部ナデナデ、体部外面ナデ、ヘラ磨き 内面ヘラナデ、頸部外面ヘラ磨き、内面輪轆痕	床面	98% PL17
55	土師器	高坏	[16.6]	10.2	[10.9]	石灰・雲母・赤色粒子	黄	普通	口縁部ナデナデ、体部外面ナデ、ヘラ磨き 内面輪轆痕、体部外面ヘラ磨り、内面輪轆痕	下層	80% PL17
56	土師器	高坏	15.6	11.3	11.4	長石・雲母	黄	普通	口縁部ナデナデ、体部外面ナデ、ヘラ磨き 内面ヘラナデ、頸部外面ヘラ磨き、内面輪轆痕	覆土中	90% PL17
57	土師器	高坏	18.2	( 5.0 )	-	長石・石英	にぶい黄	普通	口縁部ナデナデ、体部外面ヘラ磨き 内面輪轆痕	下層	50%
58	土師器	高坏	- ( 7.8 )	14.4	-	長石・石英・雲母	明赤黄	普通	頸部外面ヘラ磨き 内面輪轆痕	床面	50% PL17
59	土師器	甕	[ 9.8 ]	( 5.4 )	-	長石・石英・雲母	黄	普通	口縁部ナデナデ、下面に凸部を穿らす、指痕痕 体部内・外面ヘラナデ、内面輪轆痕	上層	30%
60	土師器	甕	[21.4]	( 8.8 )	-	長石・雲母	にぶい黄	普通	複合口縁部ナデナデ、指痕痕、体部外面ヘラ磨き	覆土中	10%
61	土師器	甕	[18.2]	( 7.1 )	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤黄	普通	複合口縁部外面指痕痕、内面ヘラナデ 体部外面ヘラ磨き	中層	10%
62	土師器	甕	13.6	(20.2)	-	長石・雲母	にぶい黄	普通	口縁部ナデナデ 体部外面ヘラ磨き、ヘラ磨り 内面輪轆痕	床面	80% PL18
63	土師器	甕	[16.6]	(16.2)	-	石英・雲母	にぶい黄	普通	口縁部ナデナデ 体部外面ヘラ磨り 内面ヘラナデ、指痕痕、輪轆痕	上層	50%
64	土師器	甕	15.2	(15.1)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄	普通	口縁部ナデナデ、指痕痕 体部外面ヘラ磨り 内面輪轆痕	下層	70%
65	土師器	甕	19.8	17.0	6.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	黄	普通	口縁部指痕痕 体部外面ヘラ磨り、指痕痕 内面ヘラナデ、輪轆痕	中層	50% PL18

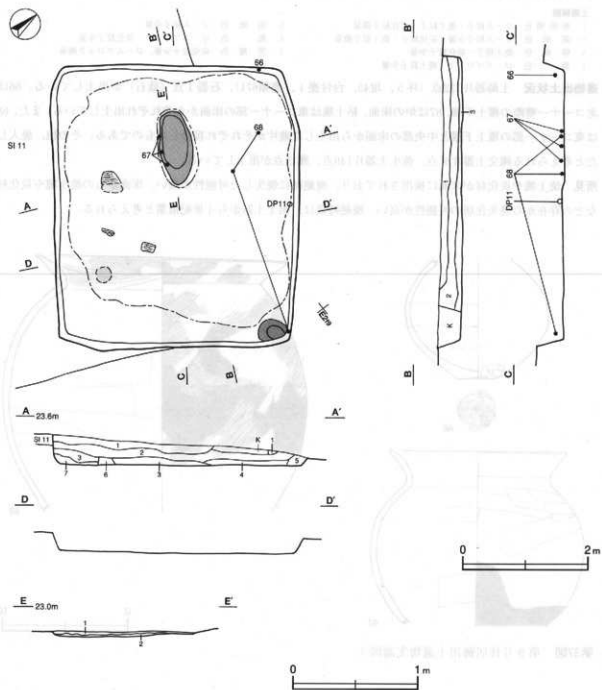
番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴・その他	出土位置	備考
DP8	球状土鉢	3.8	4.2	0.6	54.3	長石・石英・雲母	上面及び縁部指痕痕 ナデ	覆土中	PL21
DP9	球状土鉢	3.3	3.3	0.7	31.9	長石・石英・雲母	指痕痕 一方方向からの穿孔	覆土中	PL21
DP10	鉢鉢車	(4.2)	2.6	0.7	(33.2)	長石・石英・雲母	ナデ 両方向からの穿孔 断面円錐台形	覆土中	

器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴・その他	出土位置	備考	
Q13	石鉢	10.6	6.8	2.2	234.1	砂岩	両端部に挿入を有する	上層	PL24

### 第9号住居跡 (第36~38図)

位置 調査I区北東部のE2f8区、標高23.2mの緩やかな斜面部に位置している。

規模と形状 長軸4.5m、短軸3.9mの長方形で、主軸方向はN-58°-Wである。壁高は25~35cmで、外傾して立ち上がっている。



第36図 第9号住居跡実測図

床 ほぼ平坦で、中央部を中心に踏み固められている。南西壁側から焼土塊や丸材の炭化材が検出されている。また、東コーナー部の床面から粘土塊が検出されている。

炉 中央部の北西寄りに位置し、長径116cm、短径54cmの楕円形で、床面を5cm皿状に掘りくぼめた地床である。炉床面は熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 炭化粒子少量、焼土ブロック微量      2 に近い赤褐色 焼土ブロック・焼土粒子少量

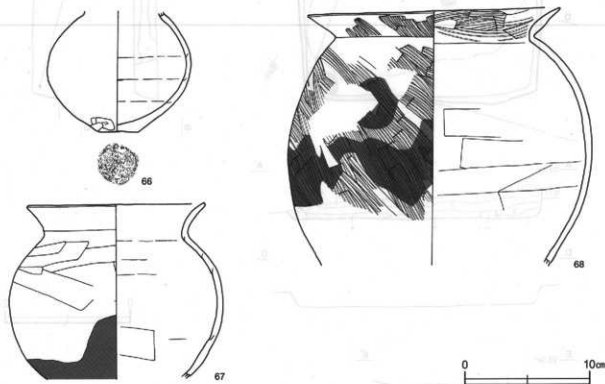
覆土 7層に分層される。第1・2層は周囲からの土砂の流入を示す自然堆積で、第3～7層はロームブロック、炭化材や炭化物を比較的多く含んでおり、廃絶や焼失に伴って形成された人為堆積である。

土層解説

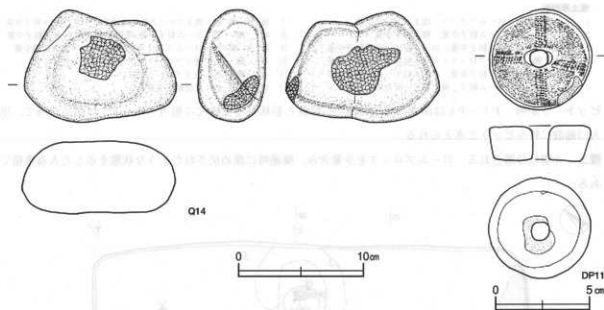
- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量      5 明褐色 ローム粒子中量  
2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子・焼土粒子微量      6 褐色 ロームブロック・炭化粒子少量  
3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量      7 黒褐色 炭化粒子少量、ロームブロック微量  
4 褐色 ロームブロック・焼土粒子少量

遺物出土状況 土師器片722点（坏5，埴45，台付甕1，甕類671），石器1点（礫石）が出土している。66は北コーナー壁際の覆土下層，67は炉の床面，粘土塊は東コーナー部の床面からそれぞれ出土している。また，68は東コーナー部の覆土下層と中央部の床面から出土した破片がそれぞれ接合したものである。その他，混入したと考えられる縄文土器片8点，弥生土器片149点，礫2点が出土している。

所見 焼土塊や炭化材が床面に検出されており，廃絶時に焼失した可能性が高い。床面からの焼土塊や炭化材などの存在から焼失住居の可能性が高い。廃絶時期は，出土土器から4世紀前葉と考えられる。



第37図 第9号住居跡出土遺物実測図(1)



第38図 第9号住居跡出土遺物実測図(2)

第9号住居跡出土遺物観察表(第37・38図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
66	土師器	埴	-	(9.5)	3.0	石英・雲母	明黄褐色	普通	体部外面ナデ、ヘリ削り 内面輪積直	下層	80%
67	土師器	甕	14.0	(13.8)	-	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	口縁部横ナデ、体部外面ヘラナデ、葉付着 内面ヘラナデ、輪積直	竈床	70% PL18
68	土師器	甕	20.0	(20.4)	-	長石・雲母	にぶ黄褐色	普通	口縁部・体部外面刷毛目調整 内面ヘラナデ	床面	60% PL18

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴・その他	出土位置	備考
DP11	紡錘車	5.3	1.9	0.9	(59.6)	長石・石英・雲母	上面放射状に組み込んだヘラ状工具による押し引きナデ 一方側からの穿孔 断面円形	床面	PL21

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴・その他	出土位置	備考
Q14	磁石	8.9	12.2	5.6	888.9	安山岩	両面・下端面使用 被熱痕	覆土中	PL24

### 第10号住居跡(第39~42図)

位置 調査I区中央部のE2d7区、標高23.4mの緩やかな斜面部に位置している。

重複関係 第11号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸7.3m、短軸7.2mの方形で、主軸方向はN-47°-Wである。壁高は8~58cmで、やや外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、竈手前と中央部から南東壁にかけて踏み固められている。南東壁側の中央部に出入口部と考えられる約10cmの高まりがあり、壁溝が南東壁側に見られる。また、出入口部から中央部にかけて、粘土が床面に散乱した状態で検出されている。

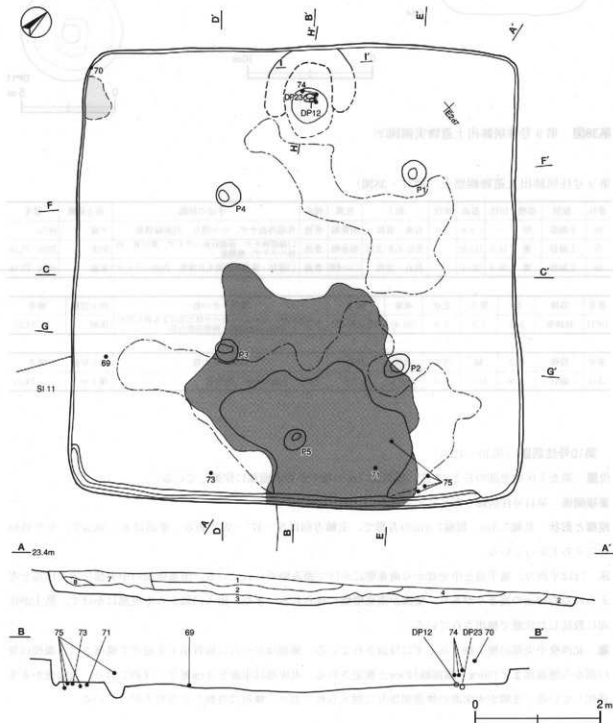
竈 北西壁中央部の壁を掘り込まずに付設されている。袖部はロームに砂質粘土を混ぜて構築され、規模は焚き口部から煙道部まで150cm、袖部幅140cmと推定される。火床部は床面を3cm掘りくぼめており、火床面が赤変硬化している。支脚が火床面の煙道部寄りに据えられており、煙道は外傾して立ち上がっている。

覆土層解説

- |          |                     |          |                         |
|----------|---------------------|----------|-------------------------|
| 1 暗 褐色   | ロームブロック・焼土ブロック少量    | 7 暗 赤褐色  | 焼土ブロック多量、炭化粒子中量、ローム粒子少量 |
| 2 褐 色    | ローム粒子中量、焼土粒子少量      | 8 暗 褐色   | ローム粒子中量、炭化物・焼土粒子・粘土粒子少量 |
| 3 暗 赤褐色  | 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量 | 9 暗 赤褐色  | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量    |
| 4 暗 赤褐色  | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量 | 10 暗 褐色  | 焼土ブロック・炭化物・ローム粒子少量      |
| 5 にぶい赤褐色 | 焼土粒子多量、ローム粒子・炭化粒子少量 | 11 赤 褐色  | 焼土ブロック中量                |
| 6 暗 褐色   | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量   | 12 暗 赤褐色 | 炭化粒子少量                  |

ピット 5か所。P1～P4は深さは25～60cmで、位置と形状から主柱穴に相当する。P5は深さ24cmで、出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 8層に分層される。ロームブロックを少量含み、廃絶時に埋め戻されたような状態を示した人為堆積である。



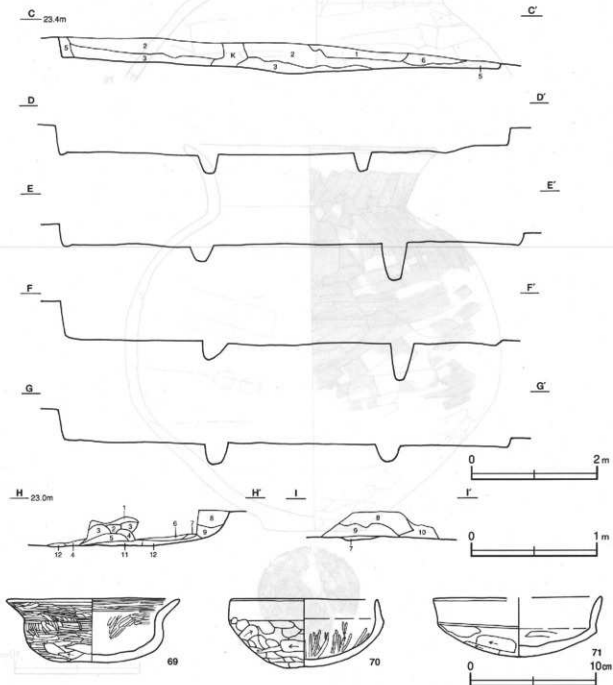
第39図 第10号住居跡実測図

土層解説

- |       |                     |       |                |
|-------|---------------------|-------|----------------|
| 1 褐色  | ロームブロック・ローム粒子少量     | 5 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 6 黒褐色 | 炭化粒子少量         |
| 3 褐色  | ロームブロック中量、炭化粒子微量    | 7 褐色  | ローム粒子・焼土粒子少量   |
| 4 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量 | 8 褐色  | ローム粒子少量、焼土粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片1019点（坏62，碗17，埴1，高坏5，台付甕1，甕類933），土製品2点（紡錘車1，支脚1）が出土している。70は西コーナーの覆土上層，71・73は南東壁際の床面，DP12は竈の火床部，74はDP23の上のつた状態で竈内からそれぞれ出土している。また，75は東コーナー壁際の覆土中層から下層にかけて出土した破片が接合したものである。その他，混入したと考えられる縄文土器片8点，弥生土器片80点，陶器片2点，鉄滓2点，鏝1点が出土している。

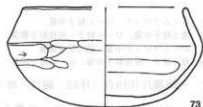
所見 時期は，出土土器や竈の構築方法から5世紀末葉から6世紀初頭と考えられる。



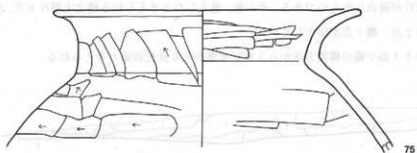
第40図 第10号住居跡・出土遺物実測図



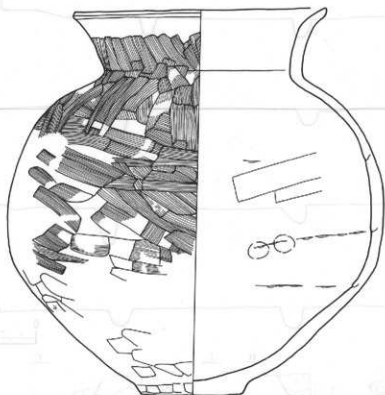
72



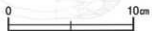
73



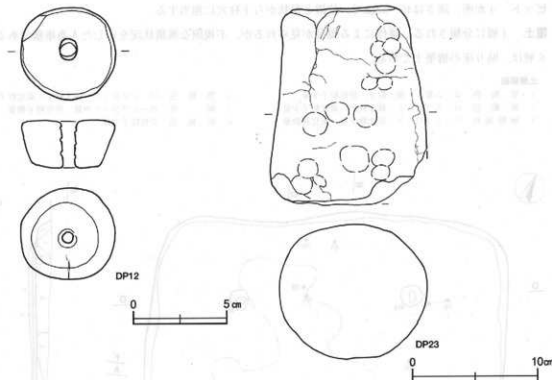
75



74



第41図 第10号住居跡出土遺物実測図(1)



第42図 第10号住居跡出土遺物実測図(2)

第10号住居跡出土遺物観察表 (第40~42図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
69	土師器	環	13.4	5.0	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部ヘラ磨き、体部内・外面ヘラ磨き 内面刻線	覆土中	70% PL13
70	土師器	環	11.6	5.4	-	石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ、体部外面ヘラ磨り、内面ヘラ磨き	上層	85% PL13
71	土師器	環	[15.4]	6.3	-	長石・雲母	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ、体部外面ヘラ磨り、内面ヘラナデ	床面	55%
72	土師器	環	[13.4]	5.0	-	長石・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部ヘラ磨き、外面ヘラ磨り 内面ヘラ磨き	覆土中	45%
73	土師器	碗	[12.9]	8.0	-	石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ、体部外面ヘラ磨り、内面ヘラナデ	床面	70%
74	土師器	甕	19.8	30.9	8.0	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ、眉毛目調整 体部外面眉毛目調整、ヘラ磨り 内面ヘラナデ、輪縁部、部底部	甕内	85% PL19
75	土師器	壺	23.7	(10.9)	-	長石・石英・雲母	褐灰	普通	口縁部ナデ、ヘラ磨り 体部外面ヘラ磨り 内面ヘラナデ	下層	35% PL19

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴・その他	出土位置	備考
DP12	紡錘車	5.0	2.5	0.9	61.7	長石・雲母・燧石	ナデ一方向からの穿孔で燧石製の穿孔痕 断面円錐台形	竈火床部	PL21

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴・その他	出土位置	備考
DP23	支脚	15.7	(12.5)	10.5	(2100.6)	長石・雲母・燧石	指調痕 被熱痕	竈火床部	

### 第12A号住居跡 (第43~45図)

位置 調査I区中央部のF2e7区、標高23.7mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第12B号住居跡を北東側に38cm、北西側に65cm拡張している。

規模と形状 長軸5.8m、短軸4.9mの長方形で、主軸方向はN-69°-Wである。壁高は10~18cmで、外傾して立ち上がっている。

床 耕作による攪乱を受けているが、ほぼ平坦で、主柱穴の内側が踏み固められている。また、中央部床面から丸材の炭化材が検出されている。

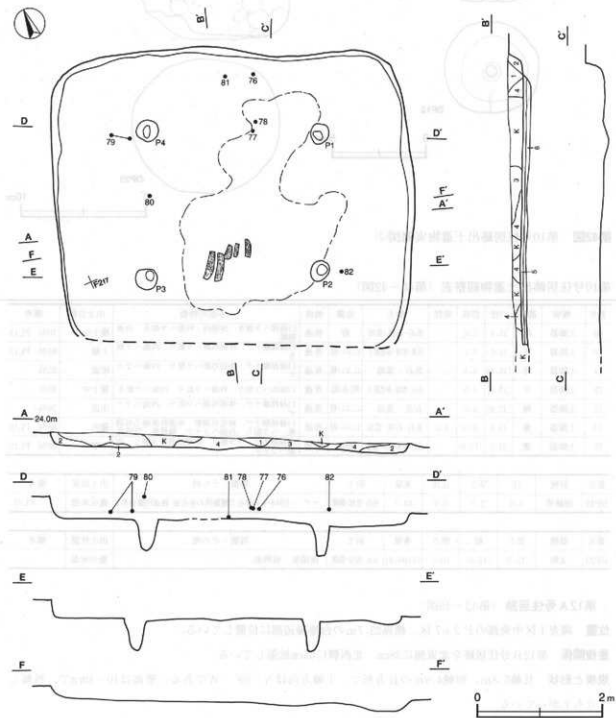


ピット 4か所。深さは49~52cmで、位置と形状から主柱穴に相当する。

覆土 4層に分層される。耕作による攪乱が見られるが、不規則な堆積状況を示した人為堆積である。第5・6層は、貼り床の構築土である。

土層解説

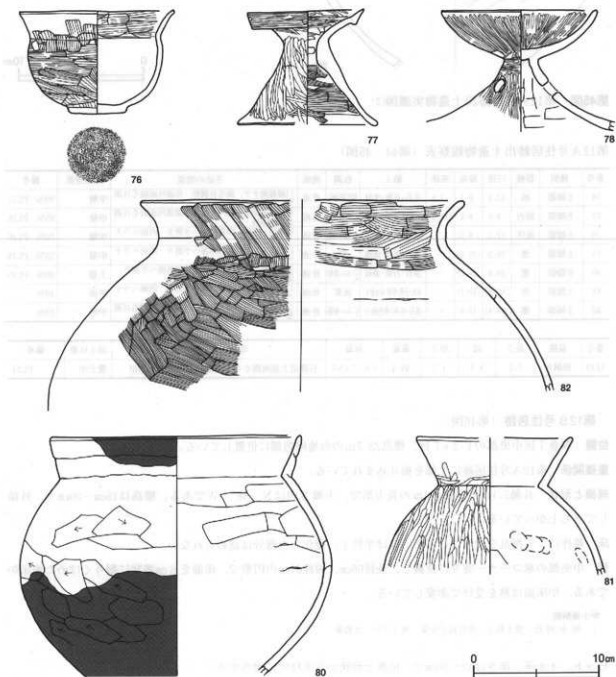
- |                             |                           |
|-----------------------------|---------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量     | 4 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量   | 5 褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量    |
| 3 極暗褐色 ロームブロック・炭化物少量, 炭化材微量 | 6 暗褐色 炭化粒子少量              |



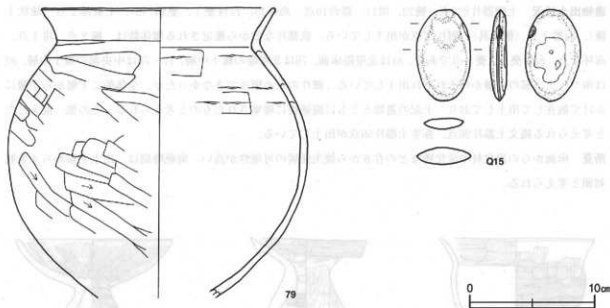
第43図 第12A住居跡実測図

**遺物出土状況** 土器器片813点(碗23, 埴11, 器台10点, 高坏15, 台付甕1, 甕頸753), 土製品2点(球状土鏝), 石器1点(穂摘具), 剥片1点が出土している。底部片などから推定される個体数は、碗2点, 埴1点, 高坏1点, 台付甕1, 甕5点である。81は北壁際床面, 76は北壁際の覆土中層, 77・78は中央部の覆土中層, 82は南コーナー部の中層からそれぞれ出土している。細片のため図示できなかったが, 全体的に下層から中層にかけて散在して出土しており, 上記の遺物とともに廃絶後に廃棄されたものと考えられる。その他, 混入したと考えられる縄文土器片26点, 弥生土器片59点が出土している。

**所見** 床面からの炭化材や炭化物などの存在から焼失住居の可能性が高い。廃絶時期は, 出土土器から4世紀初頭と考えられる。



第44図 第12A住居跡出土遺物実測図(1)



第45図 第12A号住居跡出土遺物実測図(2)

第12A号住居跡出土遺物観察表 (第44・45図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
76	土師器	碗	12.4	8.1	4.4	灰石・石英・雲母	明黄褐色	普通	口縁部横ナデ、刷毛目調整 内面ヘラナデ 外面・器受部内面ヘラ磨き 器底微	体部外面刷毛目調整	中層	90% PL15
77	土師器	器台	9.6	9.2	[11.2]	石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	器底微	器底微	中層	83% PL16
78	土師器	高坏	12.2	(9.5)	-	長石・雲母	にぶい青	普通	坏部内・外面・脚部外面ヘラ磨き 内面ヘラナデ 器4小周	器底微	中層	70% PL16
79	土師器	甕	18.3	(23.0)	-	灰石・雲母・微塵	橙	普通	口縁部横ナデ、刷毛目調整	体部外面ヘラ磨き 内面ヘラナデ	中層	55% PL19
80	土師器	甕	19.8	(19.1)	-	長石・石英・雲母	にぶい青	普通	複合口縁 口縁部横ナデ 器底微	体部外面ヘラ磨き 器底微	上層	60% PL19
81	土師器	壺	[12.0]	(10.7)	-	灰石・雲母・赤色粒子	淡黄	普通	口縁部横ナデ、刷毛目調整	体部外面ヘラ磨き 内面ヘラナデ	床面	40%
82	土師器	甕	[25.4]	15.2	-	灰石・石英・赤色粒子	にぶい青	普通	口縁部内・外面刷毛目調整	体部外面刷毛目調整 内面微調整	中層	15%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴・その他	出土位置	備考
Q15	磨削具	7.1	4.3	1.2	46.4	ホルンフェルス	右側辺上部側面からの割削による刃部を作出	覆土中	PL24

### 第12B号住居跡 (第46図)

位置 調査I区中央部のF 2 e7区、標高23.7mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第12A号住居跡に上部を掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.1m、短軸4.3mの長方形で、主軸方向はN-68°-Wである。壁高は15cm~20cmで、外傾して立ち上がっている。

床 耕作による攪乱を受けているが、ほぼ平坦で、硬化した部分は認められない。

炉 中央部の東コーナー寄りに位置し、長径66cm、短径61cmの円形で、床面を8cm皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉床面は熱を受けて赤変している。

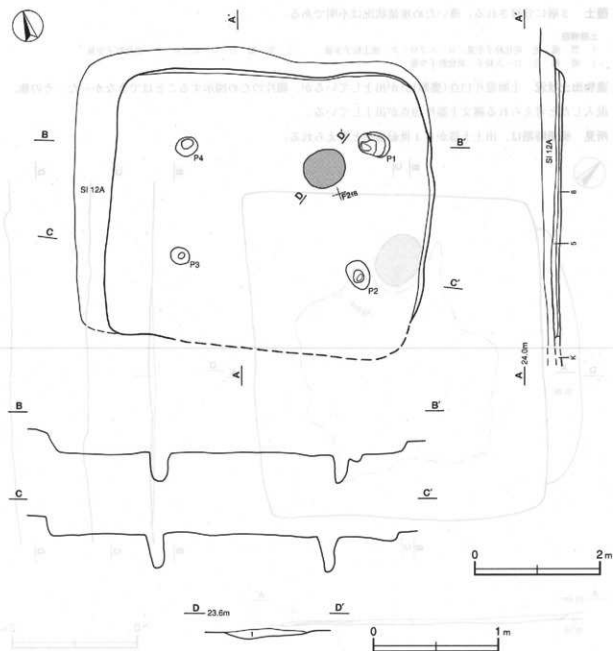
#### 炉土層解説

1 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、焼土ブロック微量

ピット 4か所。深さは42~56cmで、位置と形状から主柱穴に相当する。

**遺物出土状況** 土師器片18点（高坏1，甕類17），剥片1点が出土している。拡張のため覆土が薄く，出土遺物も細片で少なく，図示することはできなかった。その他，混入したと考えられる縄文土器片1点が出土している。

**所見** 時期は本跡を拡張して第12A号住居跡を構築していることと出土土器などから，3世紀末葉と考えられる。



第46図 第12B住居跡実測図

#### 第14号住居跡（第47図）

**位置** 調査I区南部のF2h8区，標高23.4mの台地縁辺部に位置している。

**重複関係** 第20号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸5.1m、短軸4.7mの方形で、主軸方向はN-42°-Eである。壁高は1~3cmで、やや外傾して立ち上がっている。

床 床面がほぼ露出した状態で検出されたが、平坦であり、中央部及び炉の周りが踏み固められている。  
 炉 北東壁寄りに位置し、長径83cm、短径65cmの楕円形で、床面を4cm掘りくぼめた地床炉であり、炉床面は熱を受けて赤変硬化している。

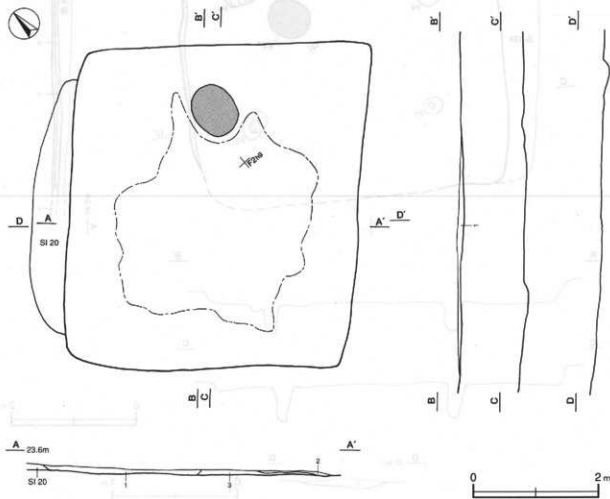
覆土 3層に分層される。薄いため堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子中量、ロームブロック・焼土粒子少量      3 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量  
 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片13点(変類13)が出土しているが、細片のため図示することはできなかった。その他、混入したと考えられる縄文土器片19点が出土している。

所見 廃絶時期は、出土土器から4世紀前半と考えられる。



第47図 第14号住居跡実測図

第16号住居跡 (第48・49図)

位置 調査I区南部のG 2 a 4 区、標高23.1mの緩やかな斜面部に位置している。  
 規模と形状 長軸4.0m、短軸3.6mの長方形で、主軸方向はN-43°-Wである。壁高は8~16cmで、外傾して立ち上がっている。

床 南東・南西壁側の床面がほぼ露出した状態で検出されたが、ほぼ平坦で、電手前から中央部にかけて踏み固められている。また、北側コーナー部や北西壁際から丸材の炭化材や焼土塊が検出されている。

竈 北西壁の中央部を壁外に12cm掘り込んで付設されている。袖部はロームに砂質粘土と小砂利を混ぜて構築されており、焚口部から煙道部まで86cm、袖部幅96cmである。火床部は床面を3cm掘りくぼめており、火床面が赤変硬化している。煙道は外傾して立ち上がっている。

覆土層解説

- |          |                     |        |                       |
|----------|---------------------|--------|-----------------------|
| 1 暗褐色    | ローム粒子中量、炭化物・炭化粒子少量  | 4 暗褐色  | 炭化粒子中量、ローム粒子・砂質粘土粒子少量 |
| 2 暗褐色    | 炭化粒子中量、ローム粒子・焼土粒子少量 | 5 暗赤褐色 | 焼土粒子微量                |
| 3 に近い赤褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量 |        |                       |

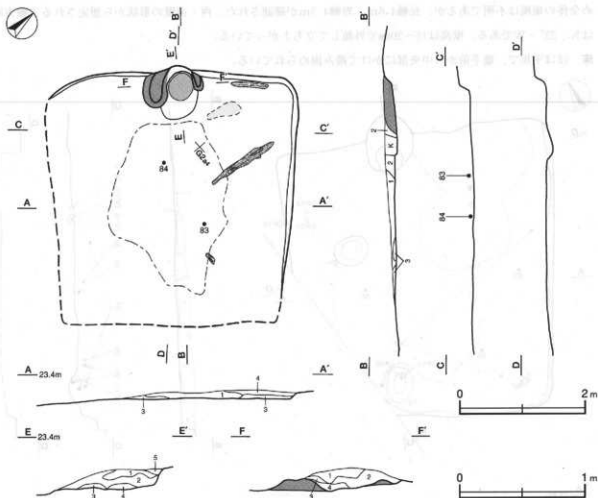
覆土 4層に分層される。薄いため堆積状況は不明である。

土層解説

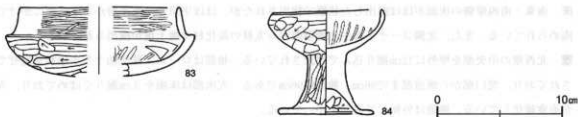
- |        |                    |       |                |
|--------|--------------------|-------|----------------|
| 1 極暗褐色 | 炭化物少量、ローム粒子・焼土粒子微量 | 3 明褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色  | ローム粒子・焼土粒子少量       | 4 褐色  | ローム粒子少量        |

遺物出土状況 土師器片62点(坏6, 高坏1, 甕類55)が出土している。83は中央部の覆土中層, 84は電手前の覆土中層からそれぞれ出土している。その他、混入したと考えられる弥生土器片3点が出土している。

所見 壁際から炭化材や焼土塊が出土している状況から、焼失住居の可能性が高い。廃絶時期は、出土土器から6世紀初頭と考えられる。



第48図 第16号住居跡実測図



第49図 第16号住居跡出土遺物実測図

第16号住居跡出土遺物観察表 (第49図)

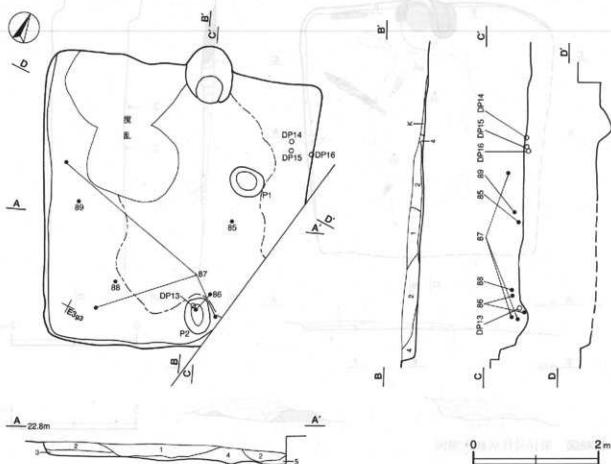
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法的特徴	出土位置	備考
83	土器器	坏	[12.4]	(5.4)	-	石灰質母・白色粒子	橙	普通	口縁部へう磨き, 外面へう磨り 内面へう磨き	中層	45%
84	土器器	高坏	8.6	8.4	7.4	石灰質母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部磨きナシ 坏部外面へう磨り 内面へう磨き 胴部内・外面へう磨り	中層	100% PL16

第18号住居跡 (第50・51図)

位置 調査Ⅰ区中央部のE3f3区、標高22.6mの緩やかな斜面部に位置している。

規模と形状 北東・北西壁側の床面がほぼ露出した状態で検出された。また、東コーナー部は調査区域外のため全体の規模は不明であるが、長軸4.6m、短軸4.3mが確認された。西・南壁の形状から想定される主軸方向はN-23°-Wである。壁高は15~20cmで外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、竈手前から中央部にかけて踏み固められている。



第50図 第18号住居跡実測図

竈 北西壁の中央部に構築され、火床部が露出した状態で検出された。火床部は床面を3cm掘りくぼめており、火床面が赤変硬化している。

ピット 2か所。P1は深さは21cmであるが、性格は不明である。P2は深さ23cmで、出入口施設に伴うピットと考えられる。

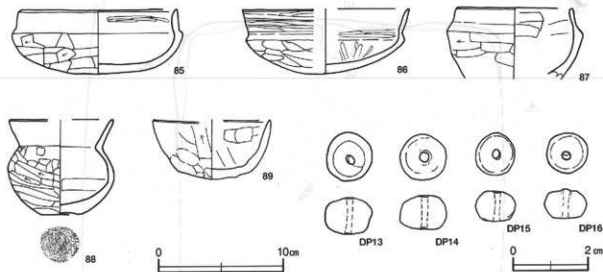
覆土 5層に分層される。ロームブロックを少量含み、不規則な堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- |                           |                            |
|---------------------------|----------------------------|
| 1 黒褐色 炭化粒子中量、ローム粒子・焼土粒子少量 | 4 黒褐色 焼土粒子中量、ロームブロック・炭化物微量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量        | 5 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量       |
| 3 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量      |                            |

遺物出土状況 土師器片519点(坏49, 碗6, 埴2, 高坏4, 甕類454, 瓶3, 手捏土器1), 土製品4点(小玉), 礫1点が出土している。底部片などから推定される個体数は、坏4点, 碗1, 埴1点, 高坏1点, 甕10点, 瓶1点, 手捏土器1点である。85は中央部の覆土下層, 88は南コーナー部の覆土中層, 89は南西壁側の覆土中層, DP13はP2の覆土上層, DP14~DP16は北コーナー部の床面からそれぞれ出土している。また, 87は南東壁側床面と南コーナー部の覆土下層, 南西壁側の覆土中層から出土した破片が接合したもので、廃絶時に廃棄された状況を示している。その他, 混入したと考えられる縄文土器片9点と弥生土器片42点が出土している。

所見 廃絶時期は, 出土土器から6世紀初頭と考えられる。



第51図 第18号住居跡出土遺物実測図

第18号住居跡出土遺物観察表 (第51図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
85	土師器	坏	12.2	5.1	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面削離	下層	80% PL13
86	土師器	坏	13.2	5.1	-	石英・雲母・赤色粒子	濃い黄橙	普通	口縁部ヘラ磨き 外面ヘラ削り 内面ヘラ磨き	P1内	45%
87	土師器	碗	9.2	(5.6)	-	長石・石英・雲母	濃い黄橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	下層	40%
88	土師器	埴	(8.4)	7.5	3.0	石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	中層	80% PL15
89	土師器	手捏	(9.4)	4.7	-	石英・雲母	濃い橙	普通	体部外面ヘラ削り, 指頭削 内面ヘラナデ	中層	45% 輪



番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴・その他	出土位置	備考
DP13	小玉	1.2	1.0	0.1	1.5	長石・雲母	ナデ 一方向からの穿孔 漆塗布	P 2 上層	PL21
DP14	小玉	1.2	0.9	0.2	1.4	長石・雲母	ナデ 一方向からの穿孔 漆塗布	床面	PL21
DP15	小玉	1.1	0.8	0.1	1.2	長石・雲母	ナデ 一方向からの穿孔 漆塗布	床面	PL21
DP16	小玉	1.1	0.8	0.1	1.1	長石・雲母	ナデ 一方向からの穿孔 漆塗布	床面	PL21

### 第19号住居跡 (第52図)

位置 調査I区中央部のF 2 f 5区、標高23.9mの台地縁辺部に位置している。

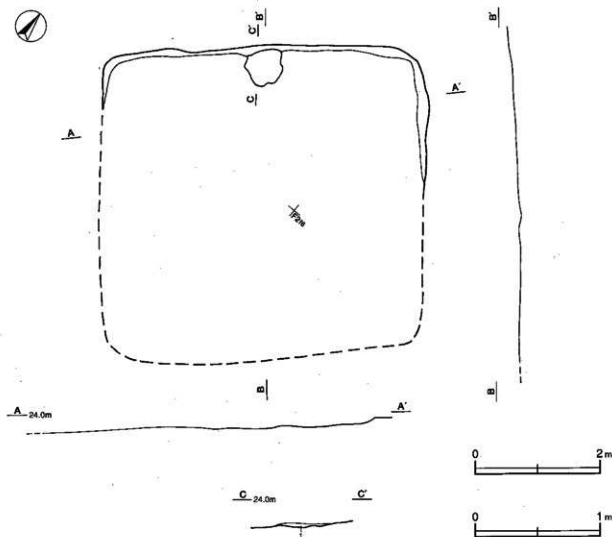
規模と形状 耕作による擾乱のため、北西壁と北・西コーナー部だけが遺存した状態で検出されたため、全体の規模は不明である。遺存している北西壁5.1mと北・西コーナー部の形状から想定される主軸方向はN-50°-Wである。壁高は9cmで外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、やや綺まりはあるものの硬化した部分は認められない。

竈 北西壁の中央部に構築されており、火床部が露出した状態で検出された。火床面は赤変している。

#### 竈土層解説

1 におい赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子微量



第52図 第19号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片22点(甕類22)が出土しているが、細片のため図示できなかった。その他、混入したと考えられる弥生土器片2点が出土している。

所見 主軸方向と竈の構築状態から、第10号住居跡とほぼ同じ時期である5世紀末葉から6世紀初頭と考えられる。

### 第21号住居跡 (第53～56図)

位置 調査I区北部のD3g2区、標高20.4mの緩やかな斜面部に位置している。

規模と形状 中央部及び南東コーナー部を含む住居跡のおよそ半分が攪乱のため、全体の規模は不明であるが長軸7.6m、短軸7.5mが確認され、遺存している壁とコーナー部の形状から想定される主軸方向はN-8°-Eである。壁高は20～100cmで外傾して立ち上がっている。

床 竈手前と南東コーナー部が踏み固められている。

竈 北壁中央部を壁外に33cm掘り込んで付設されている。袖部は砂質粘土にロームと小砂利を混ぜて地山の砂質粘土の上に構築されており、笑口部から煙道部まで130cm、袖部幅100cmである。火床部は床面を15cmほど掘りくぼめており、火床面が赤変硬化している。支脚が火床面の煙道部寄りに据えられており、煙道は外傾して立ち上がっている。

#### 覆土層解説

1 暗褐色 砂粒中量、ローム粒子・炭化粒子少量	10 赤褐色 焼土ブロック中量
2 暗褐色 砂粒多量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	11 暗赤褐色 炭化粒子少量
3 暗赤褐色 砂粒中量、焼土ブロック・炭化粒子少量	12 暗褐色 炭化粒子微量
4 赤褐色 砂粒中量、焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量	13 暗褐色 粘土粒子少量、焼土粒子微量
5 黒褐色 砂質粘土粒子多量	14 灰褐色 粘土粒子少量
6 灰褐色 砂質粘土粒子少量	15 灰褐色 焼土粒・粘土粒子少量
7 赤褐色 焼土ブロック多量	16 灰褐色 粘土粒子中量
8 暗赤褐色 焼土ブロック・砂質粘土粒子中量、炭化粒子少量	17 にぶい赤褐色 粘土粒子少量、焼土粒子微量
9 灰褐色 砂質粘土粒子少量	18 暗赤褐色 焼土ブロック・粘土粒子少量

ピット 6か所。P1～P4は深さは16cm～51cmで、位置と形状から主柱穴に相当する。P5は深さ22cmで、出入口施設に伴うピットと考えられる。P6の深さは20cmであるが、性格は不明である。

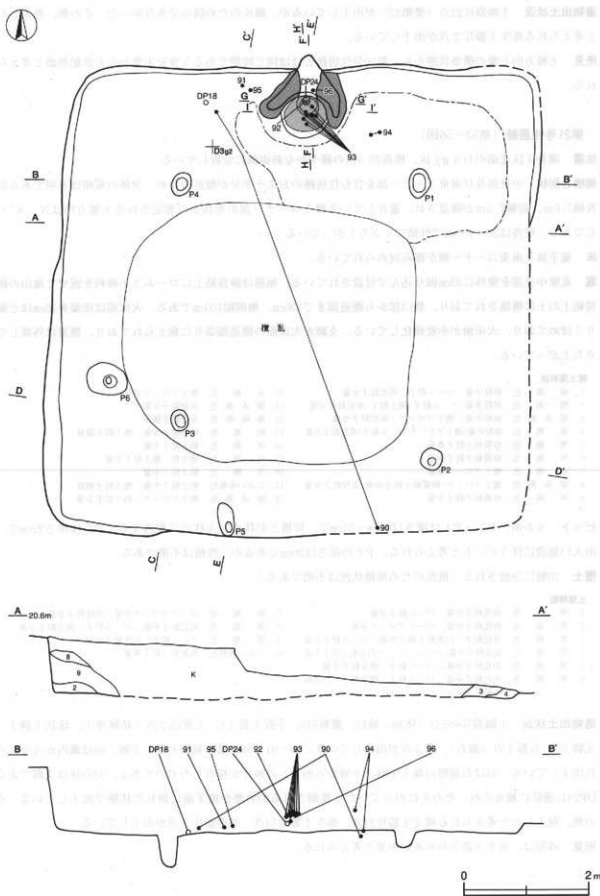
覆土 10層に分層される。攪乱のため堆積状況は不明である。

#### 土層解説

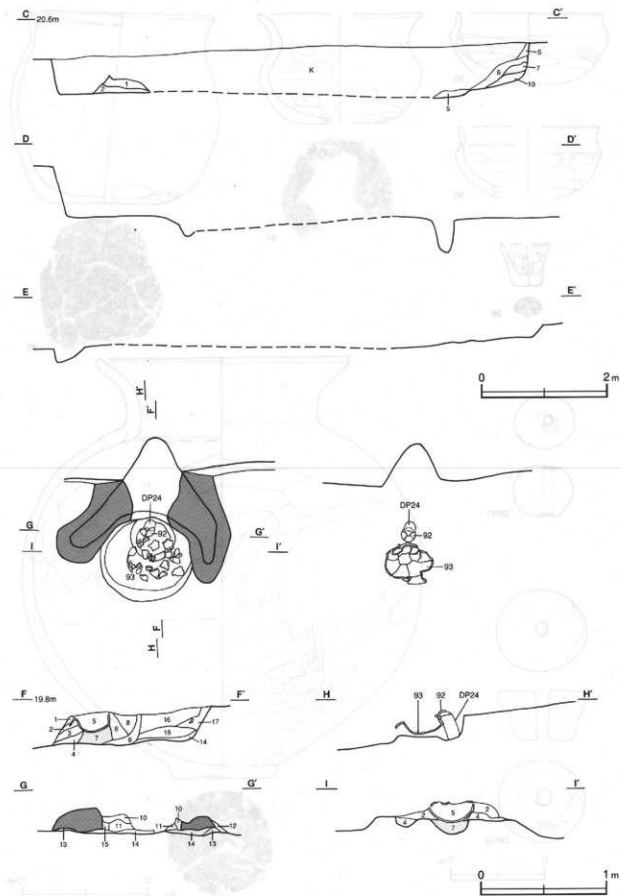
1 黒色 炭化粒子中量、ローム粒子少量	7 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量
2 黒褐色 炭化粒子中量、ロームブロック少量	8 黒褐色 炭化粒子中量、ローム粒子・焼土粒子少量
3 黒褐色 炭化粒子・白色粘土粒子中量、ローム粒子少量	9 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子中量、
4 黒褐色 炭化粒子中量、ロームブロック・白色粘土粒子少量	10 にぶい黄褐色 砂質粘土粒子多量
5 黒褐色 炭化粒子中量、ローム粒子・焼土粒子少量	
6 黒褐色 炭化粒子中量、ローム粒子・焼土粒子・白色粘土粒子少量	

遺物出土状況 土師器片665点(坏36, 碗13, 甕類615, 手捏土器1), 土製品3点(紡錘車1, 球状土錘1, 支脚1), 石器1点(敲石), 鏝3点が出土している。90・91・95は竈左袖側の覆土下層, 96は竈内からそれぞれ出土している。94は右袖側の覆土中層と下層から出土した破片が接合したものである。92の坏は支脚であるDP24に逆位に被せられ、その上の上のっていたと推測される93の甕が竈手前に倒れた状態で出土している。その他、混入したと考えられる縄文土器片21点, 弥生土器片54点, 須恵器片1点が出土している。

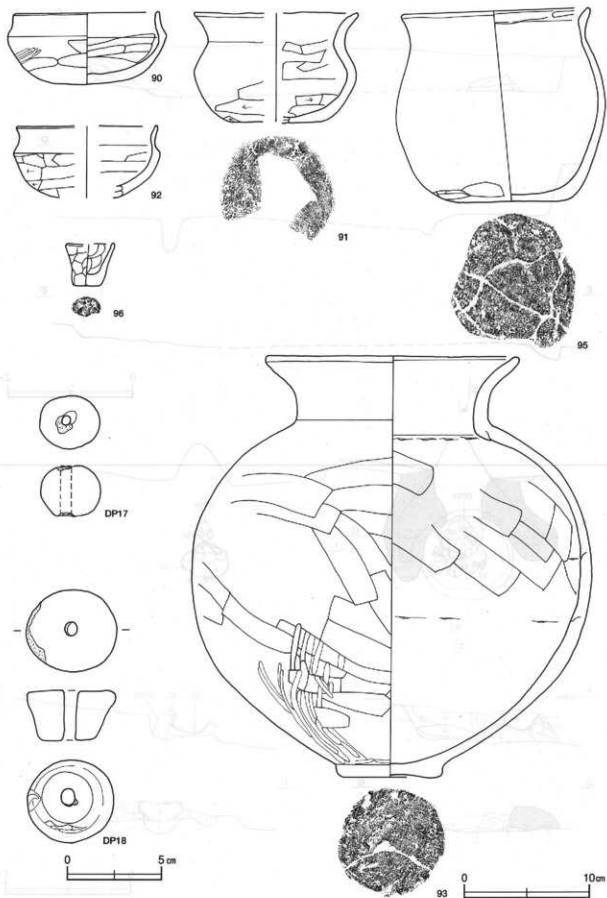
所見 時期は、出土土器から6世紀中葉と考えられる。



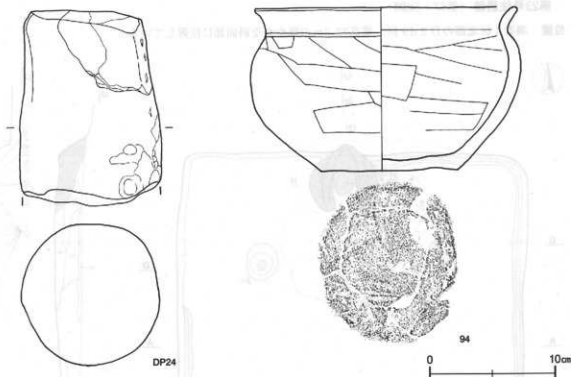
第53图 第21号住居跡实测图(1)



第54图 第21号住居跡実測图(2)



第55图 第21号住居跡出土遺物実測図(1)



第56図 第21号住居跡出土遺物実測図(2)

第21号住居跡出土遺物観察表 (第55・56図)

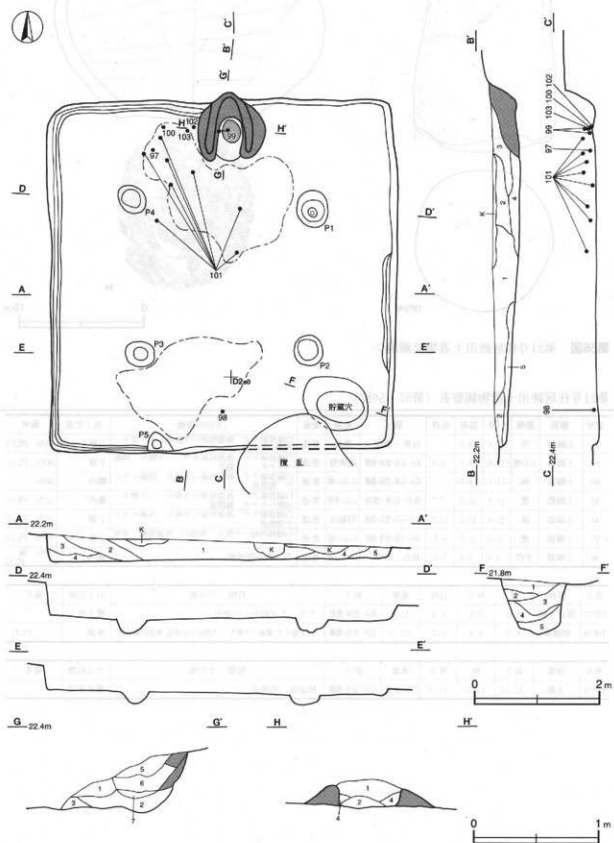
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
90	土師器	坏	11.4	5.6	-	石英・雲母	黒褐色	普通	口縁部ナデ 内面ヘラナデ 体部外面ヘラ磨き、ヘラ削り	下層	55% PL13
91	土師器	広口甕	[12.8]	8.2	[6.6]	長石・石英・雲母・燧石	浅黄褐色	普通	口縁部ナデ 体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ、ヘラ削り	下層	50% PL15
92	土師器	椀	[11.1]	(6.7)	-	長石・石英・雲母・燧石	にがい色	普通	口縁部ナデ 体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ 磨き	竈内	50%
93	土師器	甕	19.8	33.5	7.7	長石・石英・雲母	にがい色	普通	口縁部ナデ 体部外面ヘラ削り、ヘラ磨き 内面ヘラナデ 輪磨	竈内	55% PL19
94	土師器	鉢	20.6	13.0	10.7	長石・石英・雲母・燧石	明褐色	普通	口縁部ナデ 体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ 磨き	下層	55% PL18
95	土師器	甕	15.0	15.2	8.6	長石・石英・雲母・燧石	にがい色	普通	口縁部内面ヘラ削り 体部内・外面磨 被熱痕	下層	50% PL18
96	土師器	手捏	[3.9]	3.4	2.0	長石・雲母	にがい色	普通	内・外面磨	竈内	70% 残 PL13

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴・その他	出土位置	備考
DP17	球状土埴	3.0	2.6	0.6	21.0	長石・雲母・燧石	ナデ 一方からの穿孔	覆土中	
DP18	紡錘車	4.7	4.4	0.7	(52.5)	長石・雲母・燧石	上・下面ナデ 側面ヘラ磨き 一方からの穿孔 断面円臺台形	床面	PL21

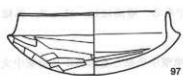
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴・その他	出土位置	備考
DP24	支脚	(15.5)	(11.3)	(11.3)	(2010.0)	長石・雲母・燧石	指頭痕 被熱痕	竈穴床部	

第23号住居跡 (第57・58図)

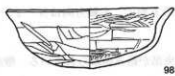
位置 調査I区北部のD 2 d9区、標高22.3mの緩やかな斜面部に位置している。



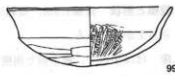
第57図 第23号住居跡実測図



97



98



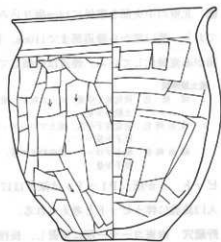
99



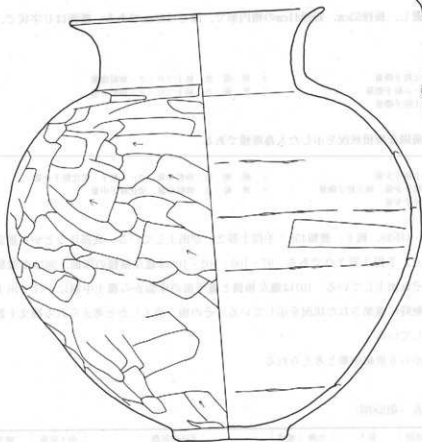
102



103



100



101



第58图 第23号住居跡出土遺物実測図



規模と形状 長軸5.6m, 短軸5.5mの方形で, 主軸方向はN-2°-Eである。壁高は10~43cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 ほは平坦で, 甕手前と南壁側中央部が踏み固められている。壁溝が東壁中央部と甕西側から南壁中央部まで周囲している。

甕 北壁の中央部を壁外に18cm掘り込み付設されている。袖部は砂質粘土にロームと小砂利を混ぜて構築されており, 焚口部から煙道部まで110cm, 袖部幅103cmである。火床部は床面を10cmほど掘りくぼめており, 火床面が赤変硬化している。煙道は外傾して立ち上がっている。

#### 甕土層解説

- |                                    |                                 |
|------------------------------------|---------------------------------|
| 1 暗褐色 炭化粒子中量, ローム粒子・焼土粒子・砂粒・粘土粒子少量 | 4 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子中量, 粘土粒子・砂粒少量 |
| 2 暗赤褐色 炭化粒子中量, 焼土ブロック・ローム粒子・粘土粒子少量 | 5 暗褐色 ローム粒子微量                   |
| 3 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子中量, ローム粒子・粘土粒子少量 | 7 暗赤褐色 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量         |

ピット 5か所。P1~P4は深さは17~28cmで, 位置と形状から支柱穴に相当する。P5は深さ11cmで, 入口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 南東コーナー部に位置し, 長径53cm, 短径41cmの楕円形で, 深さは85cmである。断面はU字状で, 壁は外傾して立ち上がっている。

#### 貯蔵穴土層解説

- |                             |                   |
|-----------------------------|-------------------|
| 1 極暗褐色 粘土粒子少量, 焼土粒子微量       | 4 黒褐色 粘土ブロック・砂粒微量 |
| 2 灰褐色 ローム粒子・炭化粒子少量, ローム粒子微量 | 5 黒褐色 粘土ブロック・砂粒少量 |
| 3 褐色 粘土粒子少量, 焼土粒子微量         |                   |

覆土 5層に分層される。不規則な堆積状況を示した人為堆積である。

#### 土層解説

- |                            |                          |
|----------------------------|--------------------------|
| 1 黒褐色 炭化粒子中量, 焼土粒子少量       | 4 暗褐色 砂粒中量, ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量, 焼土粒子微量 | 5 黒褐色 砂粒中量, 炭化粒子中量       |
| 3 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量         |                          |

遺物出土状況 土師器片497点(坏39, 碗1, 甕類55, 手捏土器2)が出土している。底部片などから推定される個体数は, 坏7点, 甕7点, 手捏土器2点である。97・100・102・103は甕左袖側の床面, 98は南壁側の覆土下層, 99は甕内からそれぞれ出土している。101は甕左袖側と甕手前の床面から覆土中層にかけて出土した破片が接合したもので, 廃絶時に廃棄された状況を示している。その他, 混入したと考えられる縄文土器片14点と弥生土器片63点が出土している。

所見 廃絶時期は, 出土土器から6世紀中葉と考えられる。

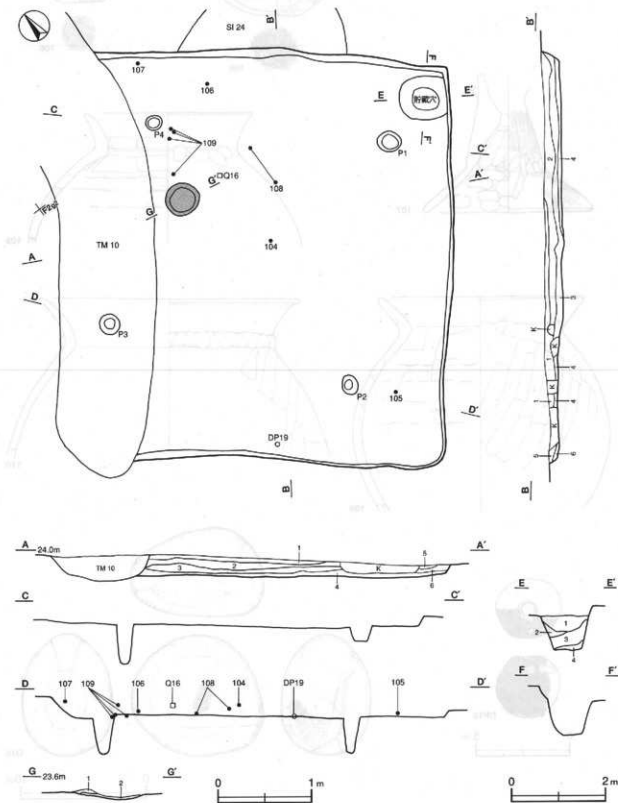
### 第23号住居跡出土遺物観察表 (第58回)

番号	種類	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
97	土師器	坏	11.6	4.9	-	長石・石英・雲母	橙	普通 口縁部横ナデ 体部外面へう張り 内面へうナデ 無変色	床面	80% PL13
98	土師器	坏	13.2	4.7	-	石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通 口縁部横ナデ 体部外面へう張り, へう張り内面へうナデ, へう張り	下層	55% PL13
99	土師器	坏	13.2	4.7	-	長石・雲母	橙	普通 口縁部横ナデ 体部外面へう張り 内面へう張り 無変色	甕内	55%
100	土師器	甕	16.0	18.5	7.6	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通 口縁部横ナデ 体部外面へう張り 内面へうナデ	床面	90% PL18
101	土師器	甕	20.2	34.0	8.8	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通 口縁部横ナデ 体部外面へう張り 内面へうナデ 無変色	床面	80% PL19
102	土師器	手捏坏	5.4	1.9	5.1	長石・石英・微塵	橙	普通 内・外面指痕	床面	95% PL13
103	土師器	手捏坏	4.6	2.2	4.8	長石・石英・微塵	橙	普通 内・外面指痕	床面	95% PL13

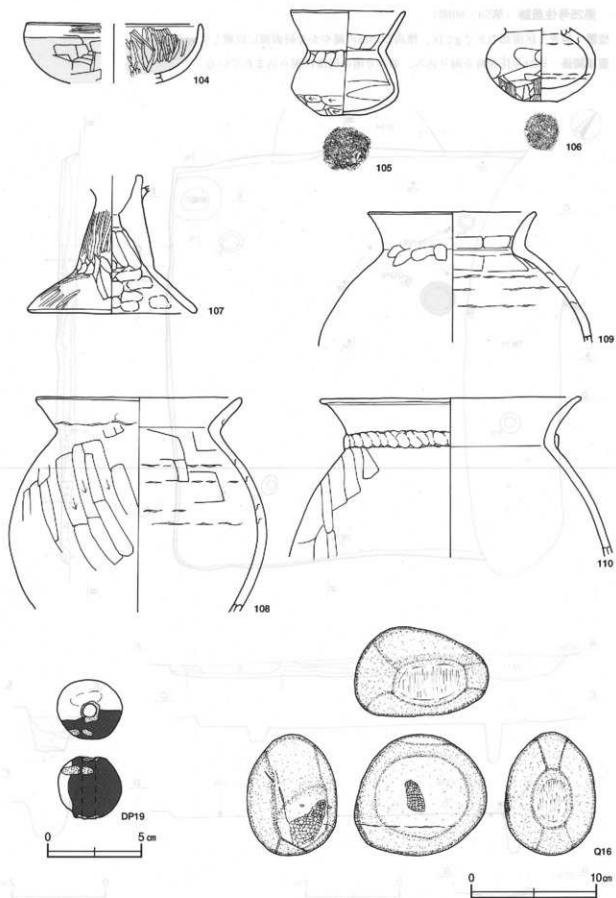
第25号住居跡 (第59・60図)

位置 調査I区南部のF2g2区、標高23.9mの緩やかな斜面部に位置している。

重複関係 第24号住居跡を掘り込み、第10号墳の周溝に掘り込まれている。



第59図 第25号住居跡実測図



第60图 第25号住居跡出土遺物実測図

規模と形状 北西壁及び北・西コーナー部が、別所10号墳の周溝に掘り込まれているため全体の規模は不明である。長軸8.6m、短軸7.2mが確認され、遺存している壁とコーナー部の形状から想定される主軸方向は、N-48°-Eである。壁高は20~40cmで外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、やや締まりはあるものの硬化した部分は認められない。

炉 中央部の北コーナー寄りに位置し、長径70cm、短径66cmの円形で、床面を7cm皿状に掘りくぼめた地床炉であり、炉床面は赤変している。

土層解説

- 1 暗赤褐色 炭化粒子中量、焼土粒子微量      2 赤褐色 焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 4か所。深さは33~80cmで、位置と形状から主柱穴に相当する。

貯蔵穴 北東コーナー部に位置し、長径97cm、短径92cmの円形で、深さは70cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化物少量      3 黒灰色 炭化粒子中量、ロームブロック少量  
2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量      4 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量

覆土 6層に分層される。ロームブロックを少量から中量含み、埋め戻されたような状態を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子中量、ロームブロック・焼土粒子少量      4 黒褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量  
2 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量      5 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量  
3 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化物少量      6 暗褐色 ローム粒子多量、炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片1942点(埴23, 埴37, 器台2, 高坏17, 甕類1844, 甗19), 土製品1点(球状土錘1), 石器1点(磨石), 剥片6点, 礫1点が出土している。104・Q16は中央部の覆土中層, 105は南コーナー部の覆土下層, 106は北東壁際の覆土下層, 107は北東壁際の覆土中層, DP19は南西壁際の床面からそれぞれ出土している。また, 108・109は炉北東側の床面から覆土中層にかけて出土した破片がそれぞれ接合したもので、廃絶時に廃棄された状況を示している。その他, 混入したと考えられる縄文土器片23点と弥生土器片376点が出土している。

所見 廃絶時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。

第25号住居跡出土遺物観察表 (第60図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
104	土師器	坏	(13.8)	(4.7)	-	長石・石英・赤色粒子	明赤焼	口縁部ヘラ磨き 体部外面ヘラ磨り 内面ヘラ磨き	中層	20%
105	土師器	埴	9.1	8.4	3.1	石英・雲母	におい青	口縁部ナデ 体部外面ヘラ磨り 内面ヘラナデ	下層	100% PL15
106	土師器	埴	-	(5.8)	2.8	石英・雲母・赤色粒子	橙	普通 体部外面ヘラ磨り 内面輪痕状	F層	60%
107	土師器	高坏	-	(10.9)	13.4	長石・石英・赤色粒子	におい青	脚部外面ヘラ磨き 内面ヘラナデ, 指痕状	中層	50% PL17
108	土師器	甕	16.2	(16.9)	-	長石・石英・雲母	橙	口縁部横ナデ 体部外面ヘラ磨き 内面ヘラナデ, 指痕状	床面	25%
109	土師器	甕	13.3	(10.3)	-	長石・雲母	におい青	口縁部横ナデ 体部外面ナデ 内面ヘラナデ, 指痕状	床面	30%
110	土師器	甗	20.5	(12.9)	-	長石・石英・雲母	橙	口縁部横ナデ 胴部隆起部付付部に指痕状 体部外面ヘラ磨り	覆土中	20%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴・その他	出土位置	備考
DP19	球状土錘	3.3	3.3	0.7	32.1	長石・雲母	ヘラナデ 一方向からの穿孔 煤付着	床面	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴・その他	出土位置	備考
Q16	磨石	9.6	10.6	7.1	978.6	砂岩	両端及び片面に磨痕 敲打痕	中層	PL24

第26号住居跡 (第61～63図)

位置 調査Ⅱ区南部のA4h5区、標高6.7mの台地裾部に位置している。

重複関係 第4号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.0m、短軸4.8mの方形で、主軸方向はN-20°-Wである。壁高は5～13cmで、外傾して立ち上がっている。

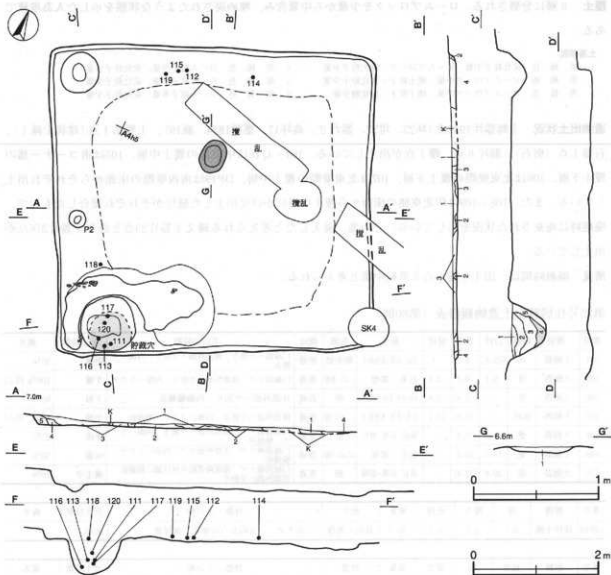
床 ほぼ平坦で、炉の周辺が踏み固められている。南壁の南西コーナー部寄りに出入口部と考えられる約10cmの高まりがあり、その高まりは貯蔵穴の北西側を圍繞している。また、南コーナー部から焼土塊や丸材の炭化材が検出されている。

炉 中央部の北寄りに位置し、長径52cm、短径39cmの楕円形で、床面を6cm皿状に掘りくぼめた地床炉であり、炉床面は赤変している。

炉土層解説

1 黒 褐色 焼土粒子・炭化粒子中量、焼土ブロック少量

ピット 2か所。深さはP1が25cm、P2が12cmであるが、性格は不明である。



第61図 第26号住居跡実測図

貯蔵穴 南コーナー部に位置している。長径90cm、短径88cmの円形で、深さは61cmである。断面はU字状で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- |       |                   |       |                        |
|-------|-------------------|-------|------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック多量、ローム粒子中量 | 4 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック多量、炭化物少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック多量         | 5 黒褐色 | ロームブロック・炭化物中量          |
| 3 黒褐色 | ロームブロック多量、炭化物中量   |       |                        |

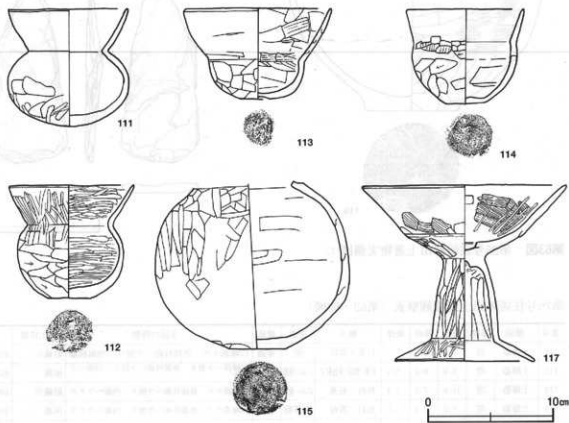
覆土 5層に分層される。不規則な堆積状態を示した人為堆積である。

土層解説

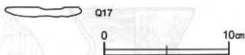
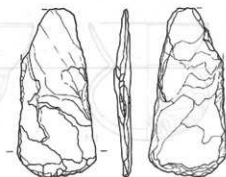
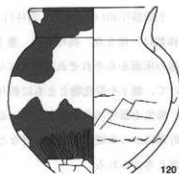
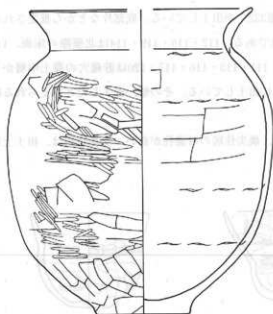
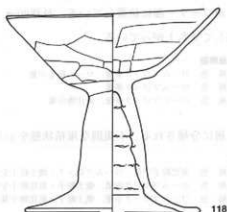
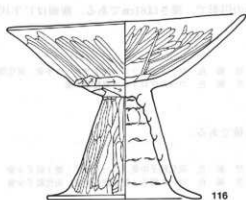
- |       |                       |       |                     |
|-------|-----------------------|-------|---------------------|
| 1 黒褐色 | 炭化粒子中量、ロームブロック・焼土粒子少量 | 4 黒褐色 | 炭化粒子中量、ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量 | 5 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子中量、炭化粒子少量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化物少量  |       |                     |

遺物出土状況 土師器片401点（埴53、高坏11、壺5、甕類332）が出土している。底部片などから推定される廃絶に伴う個体数は、埴5点、高坏4点、甕7点、甌1点である。112・115・119・114は北壁際の床面、118は南コーナー部の床面からそれぞれ出土している。また、111・113・116・117・120は貯蔵穴の覆土中層から覆土下層にかけて、焼土や炭化物とともに折り重なるように出土している。その他、混入したと考えられる縄文土器片31点、弥生土器片75点が出土している。

所見 床面や貯蔵穴からの焼土塊や炭化材などの存在から、焼失住居の可能性が高い。廃絶時期は、出土土器から5世紀初頭と考えられる。



第62図 第26号住居跡出土遺物実測図(1)



第63図 第26号住居跡出土遺物実測図(2)

第26号住居跡出土遺物観察表 (第62・63図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
111	土師器	埴	9.4	9.3	-	石英・雲母	橙	普通	口縁部ナデ 体部外面ヘラ削り、内面割削	貯蔵穴	95% PL14
112	土師器	埴	9.9	8.9	3.4	石英・雲母・赤色粒子	にぶ黄褐色	普通	口縁部ヘラ磨き 体部外面ヘラ削り 内面ヘラ磨き	床面	85% PL14
113	土師器	埴	11.6	7.2	2.4	長石・石英	にぶ黄褐色	普通	口縁部ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	貯蔵穴	100% PL14
114	土師器	埴	9.2	7.4	3.0	長石・雲母	灰黄褐色	普通	口縁部ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	床面	100% PL14
115	土師器	埴	-	(13.0)	4.4	長石・石英・雲母	にぶ黄褐色	普通	体部外面ヘラ磨き 内面ヘラナデ、輪磨直	床面	70%
116	土師器	高坏	18.7	14.6	12.2	石英・雲母	橙	普通	口縁部ナデ 耳部内・外面粗毛目調整後ヘラ磨き 胴部外面ヘラ磨き 内面輪磨直、指頭直	貯蔵穴	90% PL16
117	土師器	高坏	16.1	13.9	16.0	石英・雲母	にぶ黄褐色	普通	口縁部・耳部外面粗毛目調整後ナデ 内面粗毛目調整後ヘラ磨き 胴部外面ヘラ磨き 内面ヘラ削り	貯蔵穴	90% PL16
118	土師器	高坏	17.0	16.1	[14.0]	長石・雲母	橙	普通	口縁部ナデ、耳部内・外面ヘラナデ 胴部外面ナデ、内面輪磨直	床面	85% PL16

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
119	土師器	壺 [17.6]	24.1	7.4	紅褐色粘土	にぶい青	普通	口縁部横ナデ 内面ヘラナデ	外部外面ヘラ磨き、ヘラナデ 輪痕	床面	70% PL19
120	土師器	小形壺	10.0 (13.1)	-	灰石・石灰・雲母	投	普通	口縁部横ナデ 内面ヘラナデ	外部外面ヘラ磨き、ヘラ磨り 輪痕 削痕 磨行痕	貯蔵穴	75% PL14

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴・その他	出土位置	備考
Q17	石斧	13.3	6.2	1.2	(1080.0)	片麻岩	板状の礫を素材として鋳込部に加工を施す 見せる	短冊状を 覆土中、	PL24

## (2) 古墳

### 第10号墳 (第64・65図)

位置 調査I区南部のF2c9～F3i2区、標高25.3mの緩やかな斜面部に位置している。

重複関係 第8・25号住居跡を掘り込んでいる。

墳形及び規模 墳形は周溝から円墳と推定されるが、墳丘のほとんどは調査区域外に延びている。西部が道路により削平されているため現況は楕円形状を呈し、長径20m、短径15.2m、墳頂部と平坦部の比高は0.8mで、長径方向はN-80°-Eである。

墳丘 墳頂付近には盗掘坑と見られる窪みが確認された。地山の上に第1～5層の黒褐色土や暗褐色土を盛土して構築されている。第6～9層は、墳丘の盛土及びローム層を掘り込んで墳頂部付近に位置している。また、第9・8層は黒褐色土を用いて突き固めていることから、埋葬施設と何らかの関係もある可能性が高いが、明確ではない。

#### 墳丘土層解説

1	黒褐色	炭化粒子中量、ローム粒子少量	6	黒褐色	炭化粒子中量、ローム粒子・焼土粒子少量、炭化物微量
2	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子少量	7	黒褐色	炭化粒子中量、ローム粒子・焼土粒子少量
3	黒褐色	炭化粒子少量、ローム粒子少量、焼土粒子微量	8	黒褐色	炭化粒子中量、ロームブロック・焼土粒子少量
4	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量	9	黒褐色	ロームブロック・炭化物・焼土粒子少量
5	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量			

周溝 断面形はU字状で、北東部で幅1.7m、深さ0.6m、南東部で幅2.0m、深さ0.5mである。南部で周溝は途切れており、全体の形状は馬蹄形であったと推測される。

#### 土層解説

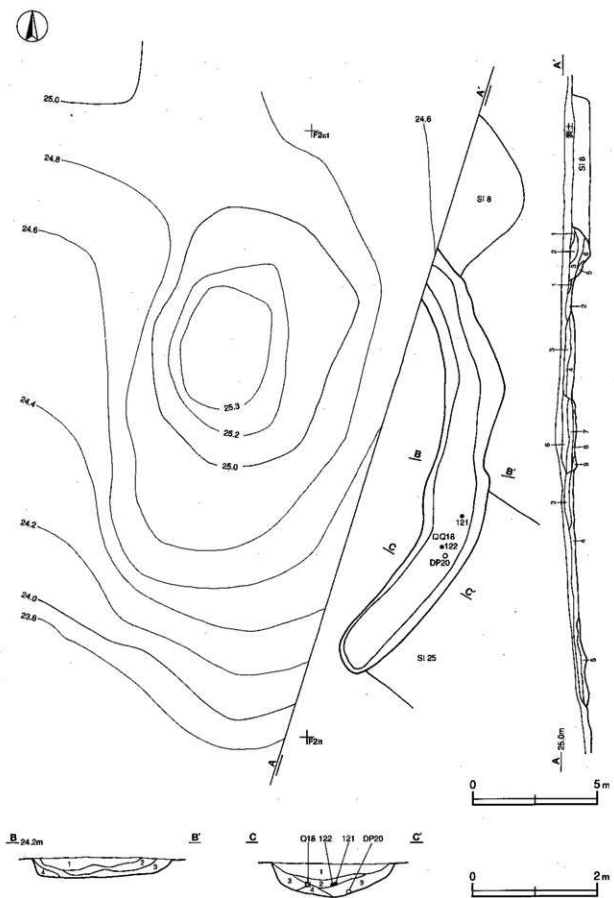
1	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子少量	4	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子少量
2	黒褐色	炭化粒子中量	5	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子少量、ロームブロック微量
3	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量	6	黒褐色	ロームブロック・炭化粒子少量

埋葬施設 調査区域外のため確認できなかった。

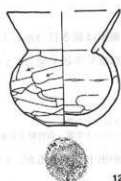
遺物出土状況 弥生土器片213点、土師器片376点、石器1点(砥石)が出土している。121・122・Q18は南東部の覆土中層、DP20は南東部の底面からそれぞれ出土しているが、周溝が第8・25号住居跡を掘り込んでいるため、これらの住居跡の遺物が流れ込んだものと考えられる。この他に、縄文土器片109点出土している。また、埴輪片の出土を想定して精査を行ったが、それらは検出できなかった。

所見 古墳の形態や外部施設、古墳時代中期の住居を掘り込んでいること、さらに6世紀初頭の住居が周辺に存在することなどから集落廃絶後造営されたものと推測され、時期は6世紀初頭以降と考えられる。

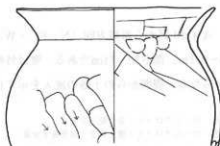




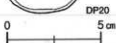
第64图 第10号墳実測図



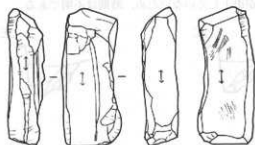
121



122



DP20



Q18



第65図 第10号墳出土遺物実測図

第10号墳出土遺物観察表 (第65図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
121	土師器	埴	[8.8]	9.1	3.3	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	口縁部ナデ 体部外面へラ削り 内面輪轆痕、指痕	中層	70% PL15
122	土師器	甕	15.7	(11.0)	-	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	口縁部ナデ 体部外面へラ削り 内面へラナデ、指痕	中層	25%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴・その他	出土位置	備考
DP20	紡錘車	4.7	1.5	0.7	(47.4)	長石・石英・雲母	ナデ 一方方向からの穿孔 断面隅丸長方形	底面	PL21

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴・その他	出土位置	備考
Q18	砥石	8.9	12.2	5.6	888.9	凝灰岩	5面使用 断面V字状の縦条痕	中層	PL24

## 4 その他の遺構と遺物

今回の調査で、時期の明確でない溝跡1条、土坑4基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

## (1) 溝跡

## 第1号溝跡 (第66図)

位置 調査Ⅱ区北部のA4 d3～A4 f7区、遺構確認面の西部と東部の高低差が約12cmの台地裾部に位置し

ている。

**規模と形状** A4d3区から南東方向(N-62°-W)にほぼ直線のに延び、規模は長さ17.4m、上幅1.0~0.7m、下幅0.3~0.1m、深さ70~74cmである。壁は外傾して立ち上がり、断面形はV字状を呈している。

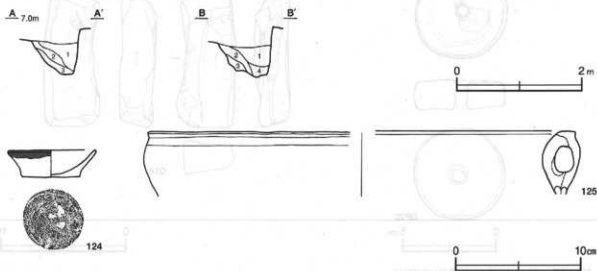
**覆土** 4層からなる。周囲からの土砂の流入を示す自然堆積である。

**土層解説**

- |       |                |       |                  |
|-------|----------------|-------|------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | 3 黒褐色 | ロームブロック少量        |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量 | 4 暗褐色 | ロームブロック中量・炭化粒子少量 |

**遺物出土状況** 縄文土器片2点、土師器片8点、土師質土器12点、陶器4点が出土しているが、いずれも覆土中からの出土である。

**所見** 調査区域外の北側は恋瀬川に続く低地にあたり、遺構の立地から区画溝と推測されるが明確ではない。伴う遺物が出土していないため、時期は不明である。



第66図 第1号溝跡・出土遺物実測図

第1号溝跡出土遺物観察表(第66図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
124	土師質土器	小皿	7.0	2.1	4.6	長石・石英・雲母	にぶ褐色	普通	外部外面口口調整 底縁削輪糸切り 溝縁付着	覆土中	100%
125	土師質土器	内耳皿	[33.6]	(5.1)	-	長石・石英・雲母	黒褐色	普通	内耳1 内面から口縁部外面縁テラ 外部外面 縁付着	覆土中	5%

(2) 土坑

時期及び性格が不明な4基の土坑について、実測図と土層解説を記載する。

**第4号土坑土層解説**

- 1 黒褐色 炭化粒子中量、ロームブロック・焼土粒子少量
- 2 黒褐色 炭化粒子中量、ローム粒子微量

**第7号土坑土層解説**

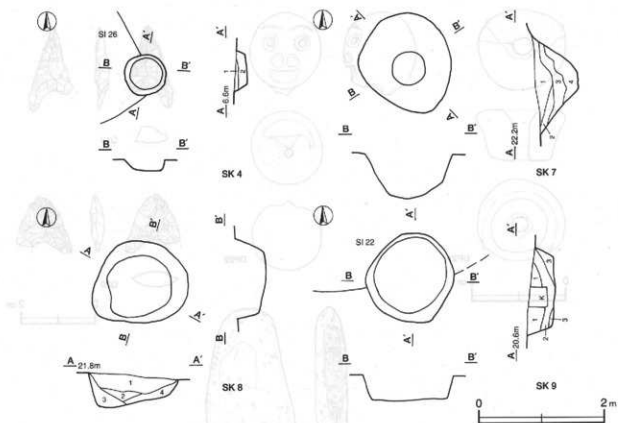
- 1 暗褐色 白色粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 炭化粒子中量、白色粘土ブロック・ローム粒子少量
- 3 暗褐色 白色粘土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量
- 4 極暗褐色 炭化粒子中量、ローム粒子少量

**第8号土坑土層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック微量
- 2 極暗褐色 炭化粒子少量、ローム粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

**第9号土坑土層解説**

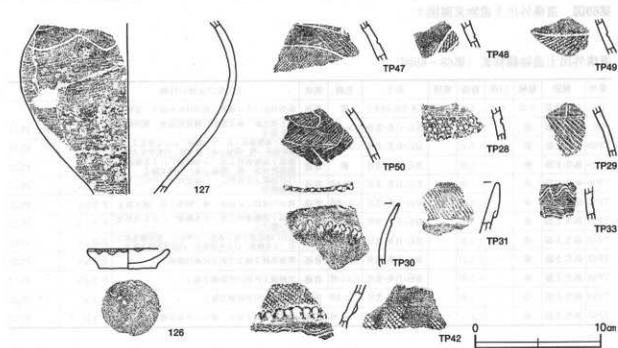
- 1 黒褐色 炭化粒子中量、ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量



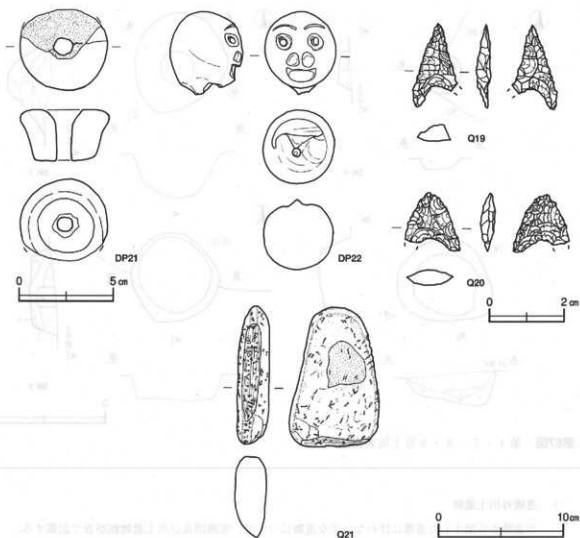
第67図 第4・7・8・9号土坑実測図

(3) 遺構外出土遺物

当遺跡から出土した遺構に伴わない主な遺物について、実測図及び出土遺物観察表に記載する。



第68図 遺構外出土遺物実測図(1)



第69図 遺構外出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物観察表 (第68・69図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
126	土製瓦土器	小皿	6.4	1.5	4.6	石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	体部外面口クロ調整 底縁回転糸切り 煤付着	A 3区	95%
127	弥生土器	壺	-	(13.6)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	胴上部定輪 地文磨消 胴部附加糸一種同時附加を施文	F 2区	10% PL12
TP28	弥生土器	壺	-	(2.6)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	普通	底部下端磨面状工具 (6本磨面) による磨面文。胴部附加糸一種 (附加2条) 施文後、円形竹管文刺突	F 2 d8	PL23
TP29	弥生土器	壺	-	(4.0)	-	長石・石英・雲母	褐色	普通	底部下端磨面状工具 (6本磨面) による磨面文刺突	F 2 d8	PL23
TP30	弥生土器	壺	-	(5.0)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	口縁部磨面文刺突一種 (附加2条) 施文後、	F 2 b4	PL23
TP31	弥生土器	壺	-	(3.1)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	口縁部磨面文で中位に原体磨面刺突	F 2 b4	PL22
TP33	弥生土器	壺	-	(2.7)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	複合口縁部に附加糸一種 (附加2条) 施文施文	F 2 c4	PL23
TP42	弥生土器	壺	-	(3.6)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	複合口縁部下端に連続した押圧文 胴部磨面状工具 (3本磨面) による磨面文 内面単筋縄文施文	F 2 c4	PL22
TP47	弥生土器	壺	-	(3.1)	-	長石・石英・雲母	灰黄褐色	普通	附加糸施文施文で淡文区画内磨面	E 2 h5	PL22
TP48	弥生土器	壺	-	(2.2)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	沈線淡文区画内単筋縄文施文	E 2 g5	PL22
TP49	弥生土器	壺	-	(2.8)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	沈線区画内単筋縄文施文	D 3 g1	PL22
TP50	弥生土器	壺	-	(4.5)	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	胴部沈線施文施文 地文に附加糸施文	F 2区	PL22

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴・その他	出土位置	備考
DP21	絞鉢車	4.6	2.7	0.9	(45.2)	長石・灰・黄砂	上・下両ナデ 前面へウ磨る 一方からの穿孔 断面以建台形	E 2区	PL21

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	焼成	特徴・その他	出土位置	備考
DP22	土人形	1.9	2.2	1.9	6.9	長石・黄砂	にぶい橙	普通	ナデ 土人形頭部	E 3区	PL21

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴・その他	出土位置	備考
Q19	石鏡	2.2	(1.2)	0.4	(0.7)	チャート	両面押圧割離による加工, 無蓋	E 2 h5	
Q20	石鏡	1.5	(1.5)	0.4	(0.7)	安山岩	両面押圧割離による加工, 無蓋	E 2 f8	
Q21	磨石	10.9	6.9	2.5	288.5	ホムンフェルス	砥礪2面	F 2区	PL24

表2 弥生時代堅穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 (m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設						覆土	出土遺物	時代
								主柱穴	出入口 ピット	ピット	伊・壺	貯蔵穴				
3	F 2 b7	N-58°-W	方形	3.68×3.58	2~6	平垣	-	2	-	-	-	1	不明	弥生土器	後期後半	
4	E 2 g5	N-53°-W	隅丸方形	(7.78)×7.45	25~46	平垣	-	3	1	3	1	-	自然	弥生土器, 玉環, 石鏡, 磨石, 磨石	後期後半	
6	E 3 d11	N-67°-W	隅丸長方形	2.81×2.44	13~30	平垣	-	-	1	-	1	-	自然	弥生土器	後期後半	
7	E 2 d0	N-56°-E	隅丸方形	3.68×3.55	13~34	平垣	-	-	-	-	2	-	自然	弥生土器	後期前半	
8	F 2 c2	-	-	(5.50)×(1.94)	46~50	平垣	-	1	1	-	-	-	人為	弥生土器, 絞鉢車, 石鏡	後期後半	
11	E 2 f7	N-68°-W	長方形	8.45×(6.30)	16~20	平垣	-	4	-	2	1	-	自然	弥生土器, 絞鉢車, 石鏡	後期前半	
15	F 2 i7	N-57°-W	長方形	4.02×3.62	8~13	平垣	-	4	-	-	1	-	人為	弥生土器, 絞鉢車, 磨石	後期後半	
17	F 3 b1	N-59°-W	[楕円形]	(4.31)×3.40	18~25	平垣	-	-	-	-	1	-	人為	弥生土器	後期前半	
20	F 2 g8	N-35°-W	[長方形]	[4.31]×[3.85]	8~10	平垣	-	4	-	-	1	-	不明	弥生土器	後期後半	
22	D 2 h0	N-43°-W	[楕円形]	7.85×5.75	20	平垣	-	-	-	6	1	-	人為	弥生土器, 磨石, 磨石, 磨石具片	後期後半	
24	F 2 g3	N-72°-W	[楕円形]	3.60×(1.55)	8~10	平垣	-	-	-	-	-	-	不明	弥生土器	後期前半	

表3 弥生時代土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向	平面形	規模		深さ (cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	時代	備考・重複関係
				長径×短径 (m)	深さ (cm)							
2	D 3 d2	N-48°-E	楕円形	2.28×2.02	45	外傾	平垣	自然	弥生土器	後期後半	SK 3→本跡	
3	D 3 d2	N-76°-W	[楕円形]	1.38×1.14	24	外傾	平垣	自然		後期後半以前	本跡→SK 2	

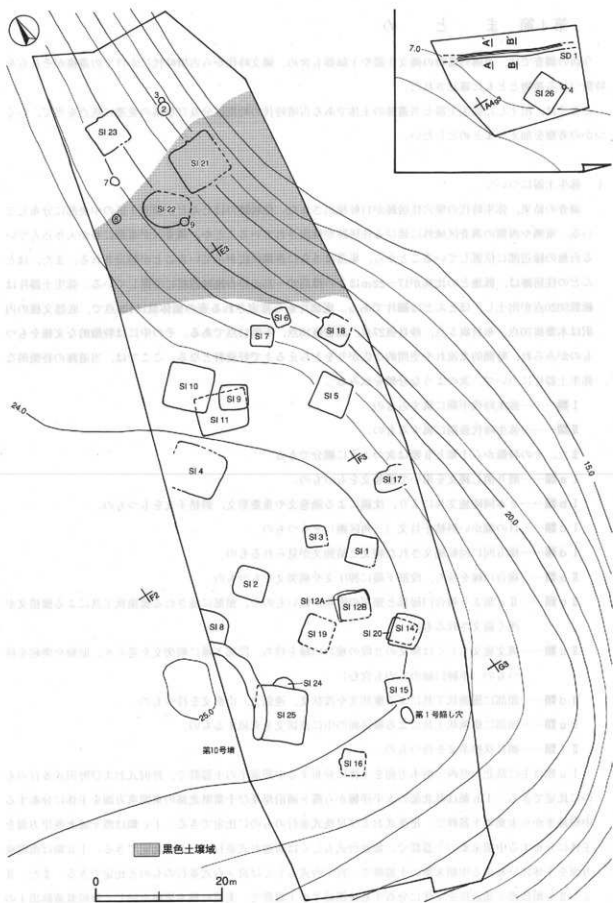
表4 古墳時代堅穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 (m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設						覆土	出土遺物	時代
								主柱穴	出入口 ピット	ピット	伊・壺	貯蔵穴				
1	F 2 d9	N-49°-W	方形	4.70×4.60	36~56	平垣	-	4	1	-	伊1	1	人為	弥生土器, 土師器, 土師器, 土師器, 土師器	3世紀末葉~4世紀初葉	
2	F 2 b4	N-45°-E	方形	5.36×5.18	25~30	平垣	-	4	1	-	伊1	1	人為	土師器, 土師器, 土師器	4世紀前半	
5	E 3 h1	N-35°-W	方形	5.98×5.67	8~33	平垣	-	4	1	1	伊1	-	人為	土師器, 絞鉢車, 絞鉢車	5世紀前半~中葉	
9	E 2 f8	N-58°-W	長方形	4.50×3.90	25~35	平垣	-	-	-	-	伊1	-	自然	土師器, 磨石	4世紀前半	
10	E 2 d6	N-47°-W	方形	7.32×7.16	5~58	平垣	一部	4	1	-	1	-	人為	土師器, 絞鉢車	5世紀末葉~6世紀初葉	
12A	F 2 e7	N-69°-W	長方形	5.75×(4.74)	10~30	平垣	-	4	-	-	-	-	人為	土師器, 土師器, 土師器	4世紀初葉	
12B	F 2 e7	N-68°-W	長方形	5.08×[4.35]	15~20	平垣	-	4	-	-	伊1	-	人為	土師器	3世紀末葉	
14	F 2 h8	N-42°-E	方形	5.12×4.67	1~3	平垣	-	-	-	-	伊1	-	不明	土師器	4世紀前半	

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 (m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	出土遺物	時代
								出入口 ピット	柱穴	礎	礎	礎			
16	G 2 a 4	N-43°-W	[長方形]	[4.00]×[3.55]	8~16	平垣	-	-	-	-	1	-	不明	土師器	6世紀初頭
18	E 3 f 3	N-23°-W	方形	4.61×4.32	15~20	平垣	-	1	1	-	1	-	人為	土師器, 小玉	6世紀初頭
19	F 2 f 5	N-50°-W	-	-	9	平垣	-	-	-	-	1	-	不明	土師器	6世紀初頭
21	D 3 g 2	N-8°-E	方形	7.56×7.50	20~100	平垣	-	4	1	1	1	-	不明	土師器, 紡錘車, 球状土器	6世紀中葉
23	D 2 d 9	N-2°-E	方形	5.60×5.47	10~43	平垣	半周	4	1	-	1	1	人為	土師器	6世紀中葉
25	F 2 g 2	N-48°-E	方形	8.62×(7.16)	20~40	平垣	-	4	-	-	礎1	1	人為	土師器, 球状土 器, 磨石	5世紀中葉
26	A 4 h 5	N-20°-W	方形	5.02×4.84	5~13	平垣	-	-	-	2	礎1	1	人為	土師器	5世紀初頭

表5 土坑一覽表

土坑番号	位置	長径方向	平面形	規模	深さ	壁面	床面	覆土	主な出土遺物	備考・重複関係
				長径×短径 (m)	(cm)					
4	A 4 h 6	-	円形	0.64×0.62	18	外傾	平垣	自然		SI26→本跡
7	D 2 f 9	N-31°-W	楕円形	1.67×1.46	86	外傾	皿状	自然		
8	D 2 h 8	N-79°-E	楕円形	1.55×1.30	44	外傾	平垣	自然		
9	D 2 i 0	-	円形	1.44×1.40	40	外傾	平垣	自然		SI22→本跡



第70図 石岡別所遺跡全体図



## 第4節 ま と め

今回の調査では、遺構外遺物の縄文土器や土師器も含め、縄文時代から古墳時代にかけての遺構がそれらの特徴づける遺物とともに確認された。

ここでは、出土した弥生土器と当遺跡の主体である古墳時代の時期区分及び集落の変遷に焦点を当て、いくつかの考察を加えてまとめたい。

### 1 弥生土器について

調査の結果、弥生時代の竪穴住居跡が11軒検出された。住居跡のほとんどが調査Ⅰ区の中央部に分布している。東側や西側の調査区域外に延びる住居跡が検出されていることや、調査区が東側に谷が入り込んでいた台地の縁辺部に位置していることから、集落はさらに西側に広がっていることが想定される。また、ほとんどの住居跡は、低地との比高が17～22mほどの標高20～25mの台地縁辺部に位置している。弥生土器片は総数5020点が出土し、ほとんどは細片である。底部片から推定される壺の個体数は126点で、底部文様の内訳は木葉痕70点、布目痕5点、砂目痕27点、調整痕13点、不明11点である。その中には特徴的な文様をもつものがみられ、時間的な流れや空間的な広がりをとらえる上で好資料となる。ここでは、当遺跡の特徴的な弥生土器片について、次のような分類を試みる<sup>9)</sup>。

I類……弥生時代中期に属するもの。

II類……弥生時代後期に属するもの。

また、その特徴からI類とII類は次のように細分できる。

I a類……磨り消し縄文を用いて渦巻文をもつもの。

I b類……2本同時施文具により、沈線による渦巻文や重菱形文、斜格子文をもつもの。

I c類……目の細かい斜格子目文（三角区画）をもつもの。

I d類……横方向に回転施文された縄文と結節文が見られるもの。

II a類……複合口縁を持ち、段部下端に押圧文や刺突文をもつもの。

II b類……II a類より複合口縁部と頸部の段差が低いものや、頸部に施される櫛歯状工具による櫛歯文が浅く施文されるもの。

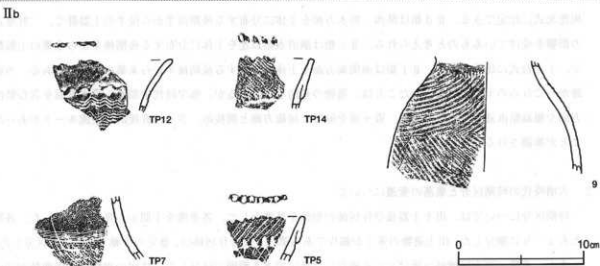
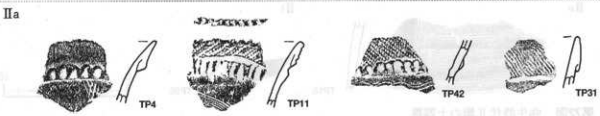
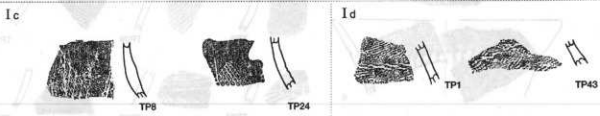
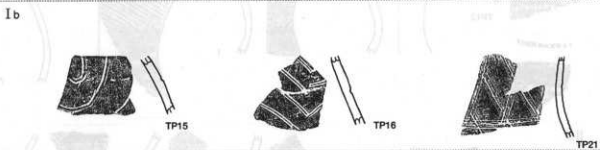
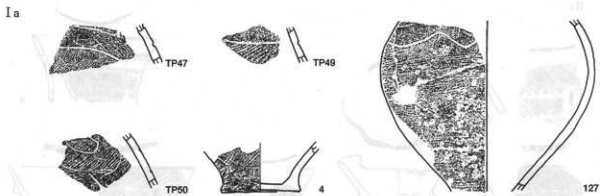
II c類……縄文施文もしくは無文の2段の複合口縁を持ち、段部下端に刺突文を巡らせ、貼瘤や突起を持つもの（単純口縁のものも含む）。

II d類……頸部に櫛歯状工具による康状文や波状文、連弧文、山形文を持つもの。

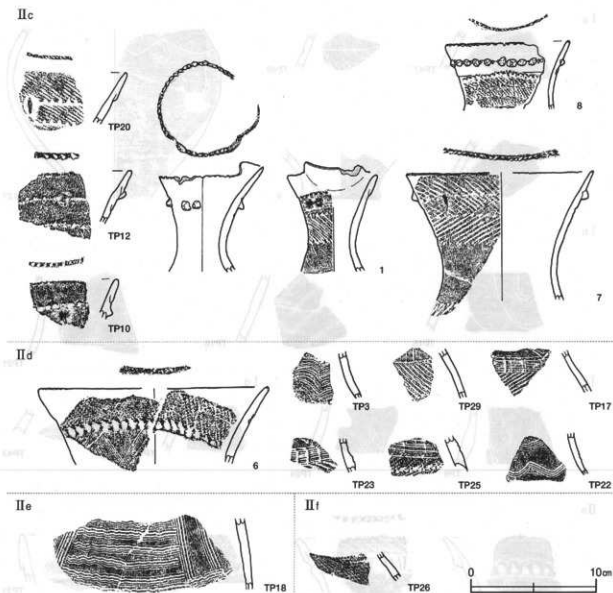
II e類……頸部に櫛歯状工具による縦区画の中に波状文を充填するもの。

II f類……網目状燃糸文を持つもの。

I a類は主に東北・県西・栃木方面を主体に分布する中期前半の土器群で、野沢式および野沢式並行のものに比定できる。I b類は県北部の太平洋側から霞ヶ浦沿岸及び千葉県北部の東関東方面を主体に分布する中期後半から末葉の土器群で、足洗式および足洗式並行のものに比定できる。I c類は霞ヶ浦北西岸方面を主体に分布する中期末葉の土器群で、新池台式もしくは新池台式並行のものに比定できる。I d類は南関東方面を主体に分布する中期末葉の土器群で、宮ノ台式もしくは宮ノ台式並行のものに比定できる。また、II a・II b類は霞ヶ浦沿岸を主体に分布する後期前半の土器群で、美浦村根本遺跡や同じく陣屋敷遺跡出土の土器に類似している。II c類は天の川やその本流である恋瀬川流域を主体に分布する後期後半の土器群で、



第71図 弥生時代 I・II 類の土器群

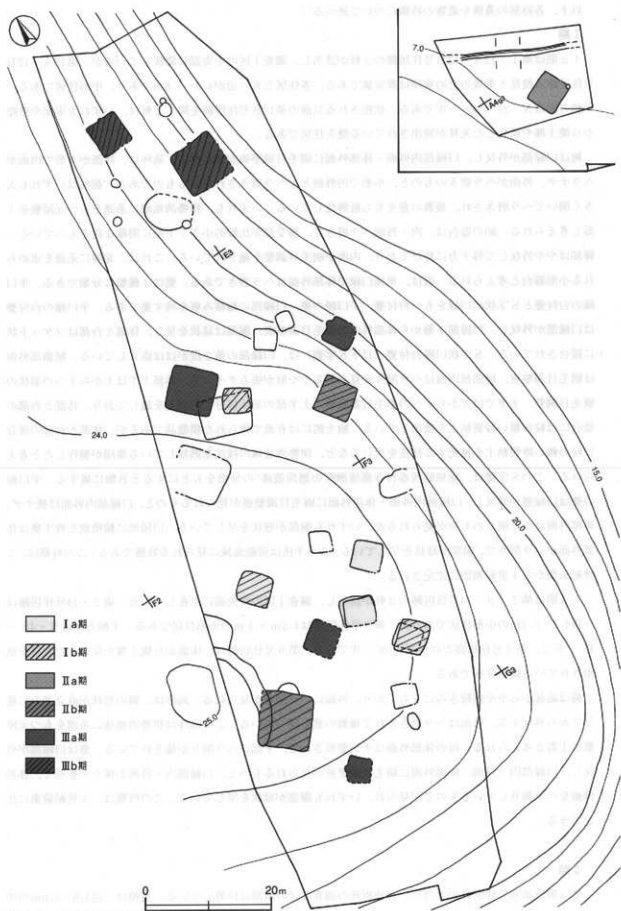


第72図 弥生時代Ⅱ類の土器群

根鹿北式に比定できる。Ⅱ d類は東西・栃木方面を主体に分布する後期前半から後半の土器群で、二軒屋式の影響を受けているものと考えられる。Ⅱ e類は澗沼水系以北を主体に分布する後期後半から末葉の土器群で、十王台式に比定できる。Ⅱ f類は南関東方面を主体に分布する後期後半から末葉の土器群である。当遺跡からこれらの土器が検出されたことは、遺物の量的な差はあるが、弥生時代中期から栃木方面を含む県西方面や福島県浜通りから県北方面、霞ヶ浦を隔てた房総方面と間接的、さらに直接的な交流ルートがあったことが推測される。

## 2 古墳時代の時期区分と集落の変遷について

時期区分については、出土土器及び住居跡の形態を基準として、各遺構をⅠ期からⅢ期に区分した。各期とも a・b に細分した。出土遺物の多くが細片である第19・20号住居跡は、推定的主軸方向により区分した。また、遺構が調査区域外へ延びている場合には推定できる範囲で区分した。住居の規模は、床面積が50㎡以上のものを大形住居、20～50㎡のものを中形住居、20㎡未満のものを小形住居とした<sup>2)</sup>。



第73図 古墳時代集落変遷図

以下、各時期の遺構や遺物の特徴について述べる<sup>9)</sup>。

## I 期

I a 期は第1・12A・12B号住居跡の3軒が該当し、調査I区の中央部に隣接しているが、第12A・12B号住居跡は攪乱と重複のため規模は推定値である。各住居とも一辺が4.3～5.8mであり、中形住居である。主軸方向はN-24°～49°-Wである。拡張される以前の第12B号住居跡を除く2軒は、いずれも床面や壁際から焼土塊や炭化した丸材が検出されている焼失住居である。

椀は口縁部が外反し、口縁部内外面・体部外面に刷毛目調整痕が見られる。高坏は、坏部が大形で内面がヘラナデ、外面がヘラ磨きのもと、小形で内外面ともヘラ磨きされているものである。裾部はいずれも大きく開いてヘラ磨きされ、複数の窓をもち低脚化している。いずれも、伊勢湾地域に系譜をもつ元屋敷系土器と考えられる。80の器台は、内・外面ヘラ磨きで、器受部が比較的小さく下端に明確な稜をもっている。脚部はやや外反して外下方に伸びており、内面が刷毛目調整を施されている。これは、北陸に系譜を求められる小形器台と考えられる。壺は、単純口縁で体部外面はヘラ磨きである。甕は4種類に分類できる。平口縁の台付甕とS字状の口縁をもつ台付甕、平口縁の甕、口縁部に輪積み痕を残す甕である。平口縁の台付甕は口縁部が外反し、口縁部下端から体部外面は刷毛目調整痕、胴部は球状を呈し、体部と台部はソケット状に接合されている。S字状口縁台付甕（以下S字甕）は、口縁部の第2段がほぼ直立している。屈曲部外面は刷毛目調整痕、屈曲部内面はヘラ削りが見られるやや肩が張るタイプで、体部上半は上から下への羽状の刷毛目調整。下半では下から上への刷毛目調整後、上半部の羽状部分に横刷毛を施しており、体部と台部の接合には粒の粗い砂質粘土を使用している。胎土的には在地で作られた模倣品であるが、体部と台部の接合に粒の粗い砂質粘土を補充する技法を用いるなど、伊勢湾地域の技法を熟知している集団が製作したと考えられる。このS字甕は、愛知県西春日井郡清洲町の廻間遺跡<sup>9)</sup>の分類をもとにする<sup>10)</sup>とB類に属する。平口縁の甕は口縁部が外反し、口縁部内外面・体部外面に刷毛目調整痕が見られるものと、口縁部内外面は横ナデ、体部外面はヘラ削りのものが見られるが、いずれも胴部が球状を呈している。口縁部に輪積痕を残す甕は体部外面がヘラ削りで、胴部が球状を呈している。この手法は房総地域に見られる特徴である。この時期は、3世紀末葉から4世紀初頭に比定される。

I b 期は第2・9・14号住居跡の3軒が該当し、調査I区の中央部に点在している。第2・14号住居跡は一辺4.7～5.4mの中形住居であるが、第9号住居跡は4.5m×4mの小形住居である。主軸方向はN-42°～45°-Eで、第9号住居跡だけがN-58°-Wである。第9号住居跡は、床面から焼土塊や炭化した丸材が検出されている焼失住居である。

椀は底部からやや内彎ぎみに立ち上がり、外面にヘラ削りが見られる。高坏は、脚の形状が直立ぎみに延びてから外反する。外面はヘラ磨きされて複数の窓を持っている。この高坏は伊勢湾地域に系譜をもつ元屋敷系土器と考えられる。埴の体部外面はナデ整形されて、下部にヘラ削りが施されている。甕は口縁部が外反し、口縁部内・外面、体部外面に刷毛目調整痕が見られるものと、口縁部内・外面が横ナデ整形で、体部外面をヘラ削りしているものが見られ、いずれも胴部が球状を呈している。この時期は、4世紀前葉に比定できる。

## II 期

II a 期は第26号住居跡が該当し、台地裾部の調査II区の南部に位置している。規模は一辺4.9～5.0mの中形住居であり、主軸方向はN-20°-Wである。床面や貯蔵穴から焼土塊や炭化した丸材が検出されている

焼失住居である。

埴は、体部外面にヘラ削りが施されている大形の埴と小形の埴に分類できる。小形埴は口径が体部径より大きく、口縁部が直線的に開くものと、口径が体部径よりやや大きいか等しく、口縁部が前述のものより短くなるものが認められ、口縁部や体部外面の調整もバラエティに富んでいる。高坏は坏部が大形でやや外反し、脚部がエンタシス状のものとラップ状に広がるものが認められる。裾部も「ハ」の字状に開くものとやや内彎ぎみに開いているものが認められ、調整はヘラ磨きを基本としている。脚部がエンタシス状で、裾部がやや内彎ぎみに開いている26の埴形は、畿内に系譜を持つ高坏と考えられる。壺は、ヘラナデで胴部が球状を呈するものと、ヘラ磨きとヘラ削りを施し、若干長胴化したものと底部の突出が見られるものがある。この時期は、5世紀前葉に比定できる。

Ⅱb期は第5・25号住居跡の2軒が該当し、調査Ⅰ区の中央部と南部にやや離れて位置している。第5号住居跡は中形住居であるが、第25号住居跡は8.7m×8.3mの大形住居であり、主軸方向はN-35°~47°-Wである。第5号住居跡は、床面から焼土塊や炭化した丸材が検出されている焼失住居である。

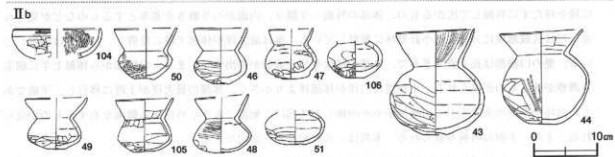
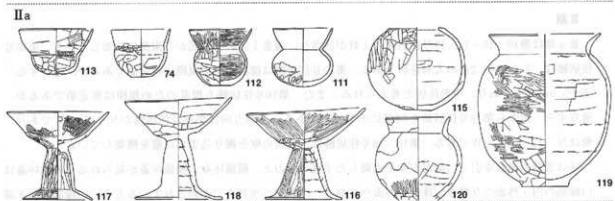
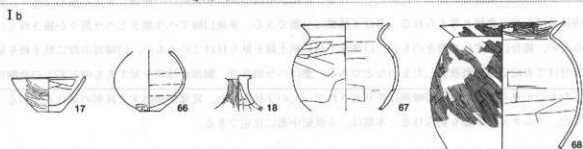
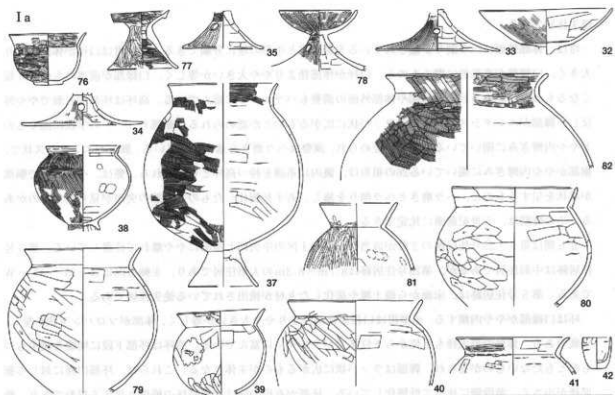
坏は口縁部がやや内傾する。小型埴は口径が体部径よりやや大きいか等しく、体部がソロバン玉状を呈し、平底である。体部の最大径も上位から下位までバラエティに富んでいる。高坏は坏部下段に明瞭な稜をもつものともたないものが見られ、脚部はラップ状に広がるものが主体となる。これらは、坏部口径に対して裾部径が小さく、前段階に比べて低脚化している。坏部が有段の56は木製高坏の模倣と思える器形であり、畿内に系譜を持つ高坏と考えられる。壺は4種類に分類できる。単純口縁でヘラ磨きとヘラ削りが施されているもの、複合口縁でヘラ磨きのもの、口縁部下端に粘土紐を貼り付けているもの、口縁部中段に粘土紐を貼り付けて有段口縁を形骸化したものなどである。壺はヘラ削りで、胴部が球状を呈するものと若干の長胴化したものが見られる。瓶の口縁部は折り返されて「く」の字状を呈し、底部が突出する鉢形の単孔式である。また、ミニチュアの壺も見られる。本期は、5世紀中葉に比定できる。

## Ⅲ期

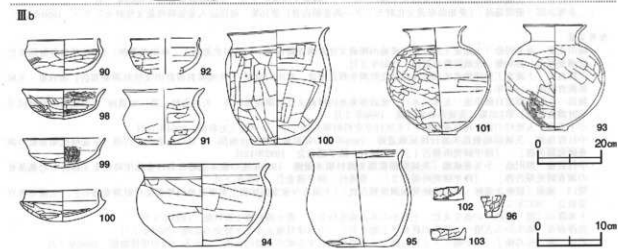
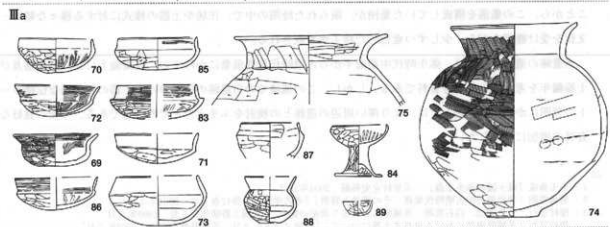
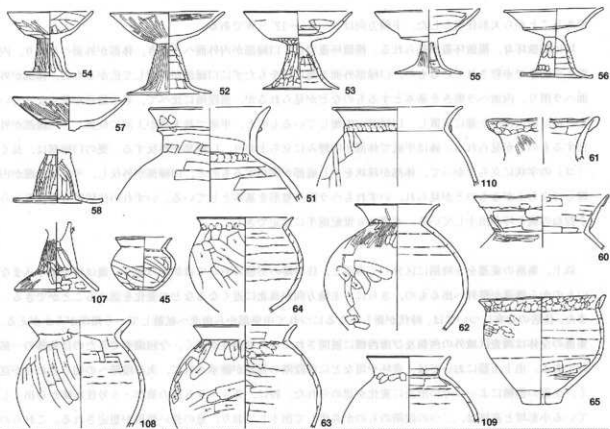
Ⅲa期は第10・16・18・19号住居跡の4軒が該当し、調査Ⅰ区の中央部から南部に分布している。第10号住居跡は、7.3m×7.2mの大形住居である。第19号住居跡は攪乱のため規模は推定値であるが、遺存する一辺が5.0m以上であり、中形住居と考えられる。また、第16号住居跡も攪乱のため規模は推定値であるが、遺存する二辺から第18号住居跡と同様に小形住居である。主軸方向は第18号住居跡がN-27°-Wであり、他はN-42°~50°-Wである。第10・19号住居跡は、住居の壁を掘り込まずに竈を構築している。

坏はⅡ期の流れを引く口縁部がやや内傾した平底のものと、模倣坏身、模倣坏蓋が見られる。模倣坏蓋は口縁部の内・外面ヘラ磨き、体部の外面ヘラ削り、内面がヘラ磨きで赤彩されているもの、口縁部外面下段に稜を持たずに外傾して広がるもの、体部の外面ヘラ削り、内面がヘラ磨きを基本とするものなどが見られる。72は武蔵地域に分布する小針型坏に類似している。碗は最大径が体部上段に位置し、口縁部は内傾している。壺の口縁部は長く直立ぎみで、体部が球状を呈し底部が突出する。また、口縁部から体部上半に刷毛目調整が残るものが見られる。小型埴は口径が体部径より小さく、体部の最大径が上段に移りし、平底である。高坏はⅡ期の系譜を引く口縁部がやや内傾した坏部に、裾部で大きく外反する脚部を有するものが見られる。また、手捏ねの碗も見られる。本期は、6世紀初頭に比定できる。

Ⅲb期は第21・23号住居跡の2軒が該当し、調査Ⅰ区の北部に隣接して分布している。第23号住居跡は5.6m×5.5mの中形住居である。第21号住居跡は攪乱のため規模は推定値であるが、遺存する二辺が7.5m以上



第74図 古墳時代 I・II期の土器群



第75図 古墳時代Ⅱ・Ⅲ期の土器群



であることから大形住居とした。主軸方向はN-8°~12°-Wである。

坏は模倣坏身、模倣坏蓋が見られる。模倣坏蓋では、口縁部が内外面へラ磨き、体部が外面へラ削り、内面へラ磨きで赤彩されているもの、口縁部外面下端に稜をもたずに口縁部が外傾して広がるもの、体部が外面へラ削り、内面へラ磨きを基本とするものなどが見られるが、前段階に比べて、若干器高が低くなっている。坏は最大径が上部に位置し、口縁部が内傾しているものと、平底で最大径が上部に位置し、口縁部が外反するものが見られる。鉢は平底で体部が内彎みに立ち上がり、口縁部が外反する。甕の口縁部は、長く「コ」の字状に立ち上がって、体部が球状を呈し底部が突出するものと、口縁部が外反し、平底で体部が内彎して立ち上がるものが見られ、いずれもへラ削り整形を基本としている。いずれの住居跡も甕付近から手捏ねの碗や坏が出土している。本期は6世紀前半に比定できる。

以上、集落の変遷を6時期に区分してみると、住居跡の形態においては炉から竈へ、竈は壁を掘り込まないものから煙道が壁外へ出るもの、さらに、主軸方向が真北に近くなるなどの変化を認めることができる。また、住居の分布については、時代が新しくなるにつれて中央部から南北へ拡散していく傾向がうかがえる。集落の全体は調査区域外の西側及び南西側に展開されていた可能性が高く、今回調査できたのは集落の一部分である。出土土器においては、高坏や埴などに前段階の形態が継承されて、次の段階への切り替わりが遅く、土器の器種によってその消長に変化が認められた。特に、Ⅱa・Ⅱb期の第26・5号住居跡から出土している小形埴と高坏は、二つの段階のものが併せて出土しており、息の長い使用が想定される。これらのことから、この集落を構成していた集団が、限られた時期の中で、住居や土器の様式に対する様々な精神・文化を受け継ぎながら、少しずつ変化した様子が看取される。

当遺跡の遺構や遺物は、弥生時代中期前半から古墳時代後期前葉にかけての、県南地方における集落及び土器編年を考える上での好資料である。しかし、この地域での当遺跡の位置づけや土器の具体的な伝播ルートの実明にかかわる問題などは、より深い周辺の遺跡との検討をふまえた上での課題である。今後の良好な資料の増加に期待したい。

#### 註

- 1) 小玉秀成「霞ヶ浦の弥生土器」玉里村立史料館 2004年10月
- 2) 菊地芳朗「東北地方の古墳時代集落—その構造と特質」『考古学研究』第47巻4号 2001年3月
- 3) 櫻村宣行、土生則浩、白石真理「茨城県における5世紀の動向」『東国土器研究』5号 1999年5月
- 4) 櫻村宣行「茨城県南部における鬼瓦式土器について」『研究ノート』2号 茨城県教育財団 1993年7月
- 4) 水塚次郎「廻間遺跡」『愛知県稲垣文化財センター調査報告書』第10集 財団法人愛知県稲垣文化財センター 1990年3月

#### 参考文献

- 1) 緑川正實 海老沢登「土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 原田北遺跡Ⅰ 原田西遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第80集 茨城県教育財団 1993年3月
- 2) 江村良夫「土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 原出口遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第94集 茨城県教育財団 1995年3月
- 3) 飯島一生「北関東自動車道(友部~水戸)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書 矢倉遺跡 後口原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第135集 茨城県教育財団 1998年3月
- 4) 小玉秀成「玉里村の弥生時代遺跡群」『玉里村立史料館報』第9号 玉里村立史料館 2004年10月
- 5) 中村哲也他「茨城県稲敷郡美浦村降屋敷遺跡 1989年度の埋蔵文化財(台地部)における弥生・古墳・平安時代集落跡の調査研究報告書」『陸平研究所報告1』美浦村・陸平調査会 1992年12月
- 6) 中村哲也 黒沢浩 小玉秀成他「茨城県稲敷郡美浦村根本遺跡 1990年度の根本遺跡における弥生時代を主体とした集落跡の調査研究報告書」『陸平研究所報告2』美浦村・陸平調査会 1996年3月
- 7) 関口 満他「根拠北遺跡・黒山南跡発掘調査報告書」『土浦市今泉環状拡張工事事業地内埋蔵文化財調査報告』土浦市教育委員会 1997年3月
- 8) 黒澤孝司「霞ヶ浦沿岸の弥生文化—土器からみた弥生社会」霞ヶ浦町郷土資料館 1998年8月
- 9) 黒澤孝司「弥生から古墳へ—時代の終わりと始まり」上高津貝塚ふるさと歴史の広場 2001年3月
- 10) 若狭 徹 生島優子「人が動く・土器も動く 古墳が成立する頃の土器の交流」かみつけの里博物館 2008年7月
- 11) 浅井哲也「茨城県における古墳時代前期の土器—領域の研究」阿久津久先生遺贈記念事業実行委員会 2003年3月
- 12) 加藤修司「房総地方における前期古墳の展開—重要遺跡確認調査の成果と課題4—土器編年集」『研究紀要21』千葉県文化財センター 2000年9月

写 真 图 版



第26号住居跡出土遺物



遺跡遠景（北東から）



第1区調査終了状況



第 3 号住居跡  
完 掘 状 况



第 4 号住居跡  
完 掘 状 况



第 6 号住居跡  
完 掘 状 况

第 6 号住居跡  
遺物出土狀況



第 7 号住居跡  
完掘狀況



第 8 号住居跡  
完掘狀況



PL 4



第 15 号 住 居 跡  
完 掘 状 况



第 17 号 住 居 跡  
完 掘 状 况



第 22 号 住 居 跡  
遺 物 出 土 状 况

第 1 号住居跡  
完 掘 状 況



第 1 号住居跡  
遺 物 出 土 状 況



第 1 号住居跡  
遺 物 出 土 状 況



PL 6



第 2 号住居跡  
完 掘 状 況



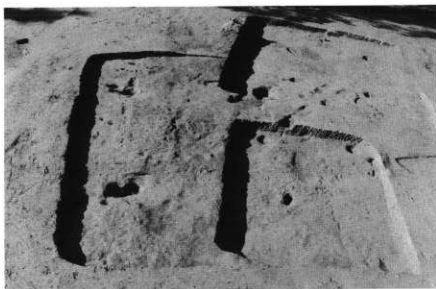
第 5 号住居跡  
完 掘 状 況



第 5 号住居跡  
遺 物 出 土 状 況



第9・10号住居跡  
完掘状況



第10号住居跡  
完掘状況



第10号住居跡竈  
遺物出土状況





第12A号住居跡  
遺物出土状況



第21号住居跡  
遺物出土状況



第21号住居跡  
遺物出土状況

第 23 号 住 居 跡  
完 掘 状 況



第 23 号 住 居 跡  
遺 物 出 土 状 況



第 23 号 住 居 跡  
遺 物 出 土 状 況





第 26 号 住 居 跡  
完 掘 状 况



第 26 号 住 居 跡  
遺 物 出 土 状 况



第 26 号 住 居 跡  
遺 物 出 土 状 况

第 25 号 住居 跡  
完 掘 状 況



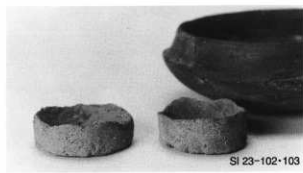
第 10 号 墳 周 溝  
遺 物 出 土 状 況



第 10 号 墳 周 溝  
遺 物 出 土 状 況



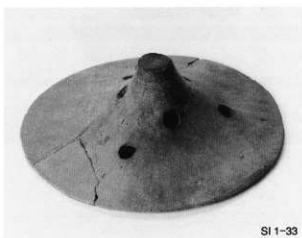




















第5号住居跡出土遺物



第21号住居跡出土遺物



SI 4-DP5



SI 18-DP13~16



外-DP22



SI 8-DP7



SI 11-DP1



SI 9-DP11



SI 4-DP6



SI 4-DP4



SI 2-DP3



SI 15-DP2



TM10-DP20



SI 21-DP18



SI 10-DP12



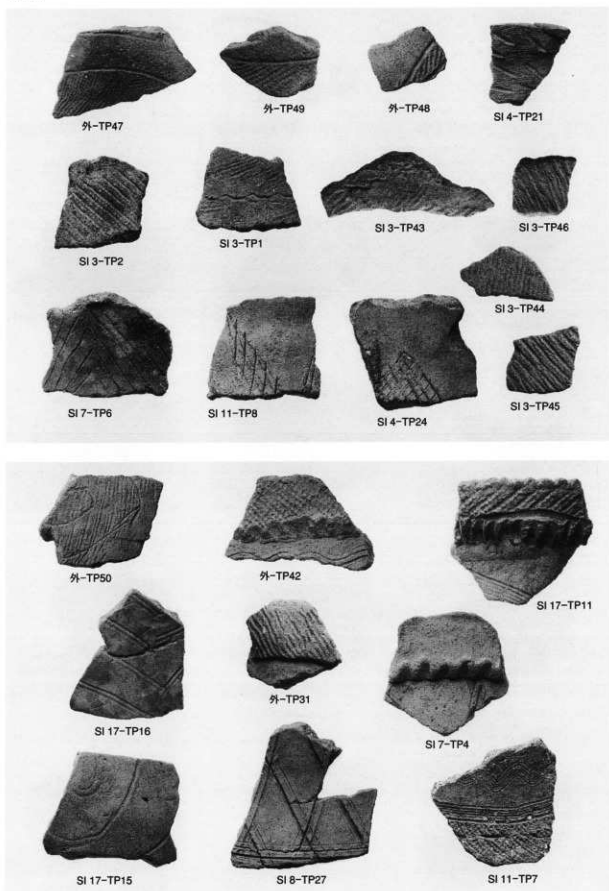
外-DP21



SI 5-DP9

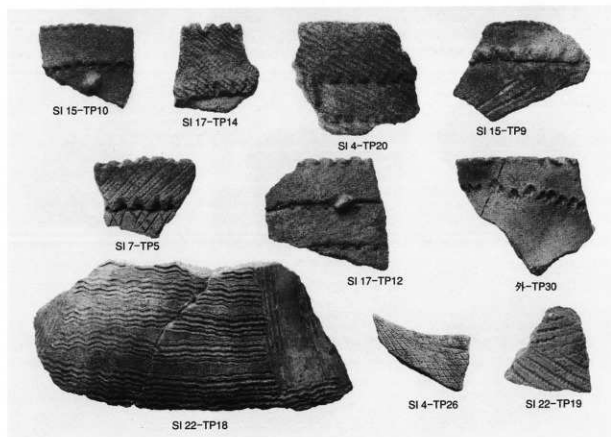
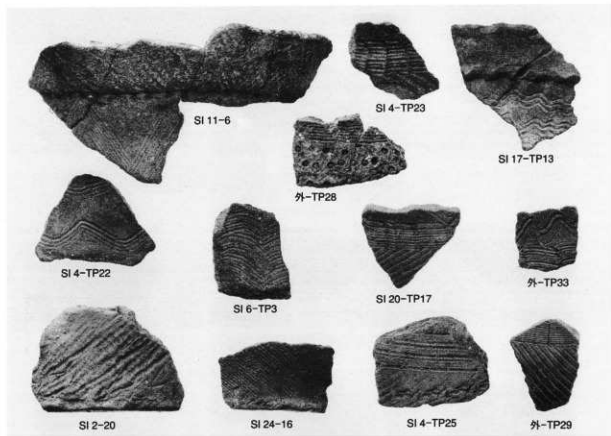
SI 5-DP8

住居跡、古墳及び遺構外出土土製品

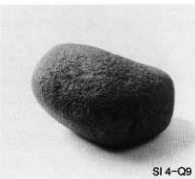
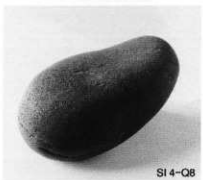


住居跡及び遺構外出土遺物(1)





住居跡及び遺構外出土遺物(2)



茨城県教育財団文化財調査報告第244集

## 石岡別所遺跡

一般県道石岡つくば線道路改良  
工事地内埋蔵文化財調査報告書

平成17(2005)年3月22日 印刷  
平成17(2005)年3月25日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団  
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番の2  
茨城県水戸生涯学習センター分館内  
TEL 029-225-6587  
印刷 (有)川田プリント  
〒310-0041 水戸市上水戸4丁目6-53  
TEL 029-253-5551